resort colony

FRANCHESKA

For information and booking visit our new homepage at www.francheska.side6 or call your local travel agent

私 いま、 昭和を 港 角の 店で ドを聞きながら書いている

防音壁の彼方から響くような 核エンジンの低音の響きが日常の虚飾をはぎ取り、心の底に眠っていた幼いころの冒険心の熱さをむき出しにして、わずかばかりの燃料を注いでくれるかのような 意趣返しに定期宇宙便のブラッシュライトのかい光が差し込むとき、私はストレスまみれの日常のしこりが少したけ氷解するのを感じる

閉鎖されたスペースコロニーの空間 大気も水も、循環することを前提とした生活を繰りかえしてはいても、どこか 外とつながっていることを実感できるこの空港の雰囲気が、私は好きだ 静謐たる真空の宇宙空間と、喧噪に充ちた人間の生活空間には、明らかに隔たりを明示した境界線があることを、われわれはもっと自覚的に抱えながら、日常をも毅然と生きていかねばなるまい

同時にこうした生と死の断絶を隔てる境界とは、空間のみならず、人いなる時間の流れにもまた存在していることをも、われわれは認識し、脳に刻みこまねばならない それが"中立"を標榜し、いかなる戦時下においてもビジネスや観光など、激戦下においても平時と変わらぬ安寧を得てきた、われわれサイド6・リーア住人の責務であると考える

"平和"とは単 の状態ではなく、常に"戦争"との対比において認識されるべき状況なのである 当たり前のことではあるが、それを様々な面で確認させてくれる重要な存在、時間の流れの中で"戦争"と"平和"の間に楔を打ちこんでくれたもののひとつに、リーアでも非常にポピュラーとなった ガンダム が位置づけられる

言うまでもなく ガンダム というモビルスーツは"兵器"であり、 は様々な武装を運用し、破壊可能なハで情況を制することにある "平和"とはほど遠い"戦争"のための装置である にもかかわらず、われわれは ガンダム が好きだ それは ガンダム の行使する暴力に興味があるのではなく、ガンダムが先ほどから述べているような、日常と非日常、戦争と平和の"境界"を強く揺さぶり、意識させてくれるからなのだ

ましてや、「リーア ガンダム」には、深い関わりがあるのだから

人類史上最悪の激戦となった「 年戦争 において、この両者が直接的な関係をもったタイミングは数度にわたる

一度目は、地球連邦軍のペガサス級強襲揚陸艦ホワイトベースがリーア第8バンチ ハルダ コロニーへと寄港したUC0079年12月15日。艦の目的は、ヘルカミノ社のドックで破損の応急修理をすることであったが、追撃してきたジオン公国軍のコンスコン艦隊が攻撃を強硬したため、わかサイド住民の貴重な財産が傷つくという大事が生した。さらにコンスコンは領宙外へ脱しようとするホワイトベースにリック・ドム編隊で 度目の攻撃をかけたが、戦闘の 部はバルダ民放中継船のカメラがとらえることになり、コロニー映像史上初の"実戦生中継"がTVに流れるという、メディア史を語るときに欠かせない事態を招来した このときノイズまみれの映像でリック・ドムの黒い機体を瞬時に撃滅し、同時にコロニーには決して被害をあたえまいと奮戦する白い機体が、鮮やかな青と赤の色彩の残像とともにリーア全住民の目をとらえた

これが伝説のRX 78ガンダムであることは、正史の上からも明らかな裏づけがある

そのわずか5日後。クリスマス準備にわく12月20日のリボー

"戦争"と"平和"の境界を意識させてくれる「ガンダム」という存在

By RYUSUKE HIKAWA リュースケ・ヒカワ

masterpiece of HUGE ARMS

"***masterpiece*** of HUGE ARMS / Anaheim Electronics MSZ-006 Zeta Gundam" has been published in 5 different language mainly used in Reah. This is a **Japanese** edition. There are also **English**, **French**, **German**, and **Chinese** version of this book.

masterpiece of HUGE ARMS バトルトレクトロニクス MSZ 006 ゼータ・ガンダム」は、リア全域で日常的に使われている5種類の言語で発行しています。本書はその日本語版です。日本語版以外にも、英語版「フランス語版」ドイツ語版」「中国語版」をお楽しみいただけます

ENGLISH

FRANCH

GERMAN

CHINESE

masterpiece of HUGE ARMS / Anaheim Electronics MSZ-006 Zeta Gundam" is fictional work based on "Mobile Suit Z Gundam", by © SOTSU AGENCY SUNRISE. The statement above, regarding the publication in 5 different languages, is also fictional None of the English, French, German, or Chinese version of this book is available Thank you for your understanding. 上記の5種類の言語で発行していますというのはフィクションです 日本語版以外は存在いたしません

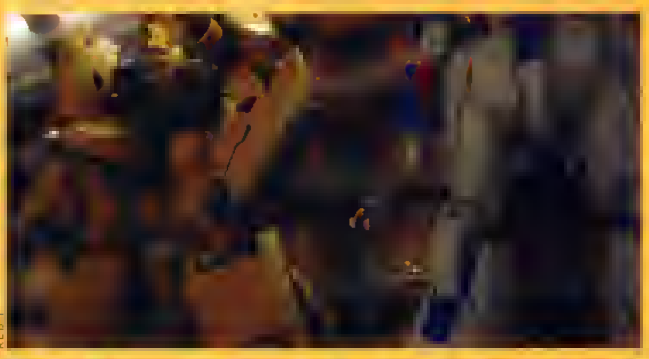
東区で、[illegible]戸籍上[illegible]に侵入したジオン公国軍が、駐留中の地球連邦軍と交戦。空中戦や陸戦という展開の中で、死傷者多数を出すという事件が発生した。戦争は隔絶したコロニー外のことではないことを思い知らされた事であった。このときの事実関係には、記録が改竄された形跡があって不鮮明なことが多いが、名称不詳なジオン軍重武装モビルスーツに対して先のガンダムに酷似した機体がさっそうと出現、これを迎撃したという伝説がある。市街戦でもあり、本件にもかなりの目撃者がいたため、これがリーア住民の一部に「ガンダム熱」をかきたてる結果となる。

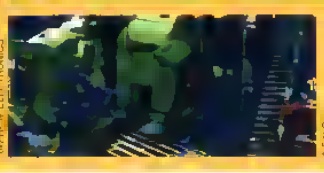
さらに5日後の12月25日、クリスマス当日にもジオン公国軍のザクが起動し、地球連邦のメディカル・センターを急襲するという事件が発生。目標と目的のはっきりしないテロに限りなく近い軍事行動が、住民の不安をかきたてる。この事件の際にも、2日と同様にいずこからともなくガンダムが来て事態を収拾したという者が後を絶たなかった。

こうした不鮮明さが、逆に困ったときには駆けつける神秘の存在としてガンダムのヒーロー性に神格を与えた[illegible]るだろう。特に筆者を含めた、当時また社会[illegible]った者にとっては、それは戦争の脚音を吹き飛ばす[illegible]もあった。かつて見たどんな兵器とも違うそのヒーロー[illegible]印象は、刷り込みに近いトラウマを残してしまったのだ。

[illegible]中継の不鮮明な画像に飽きたらず、あらゆる手を尽くして戦場の映像を収集した者が、ネットを含めたメディアにその雄姿を流す。そこに付帯される熱狂的なテキストが不鮮明さの向こうにガンダムの神格をさらに付与しかくして、わがサイド6、リーアにおいては、あらゆるミリタリー・ファンのカテゴリーとは連携しつつも独自に「ガンダム・ファン」という特殊な人種が発生したのである。

不可思議なことに、バルダコロニーには「自分がガンダムを開発した」と名乗る初老の男がシャンク屋を営んでさえいたという。彼も一年戦争末期に消息が不確かとなってしまったが、その言葉によってあらかじめガンダムの名を刻みこまれた近隣の少年が、少なからずいたという。彼らが先の中継映像でそれが実在の兵器であることに衝撃を受け、ガンダム・ファンの初期の布教活動にいそしんだ結果、今の[illegible]





008 ZETA GUNDAM in U.C.0091

By SIG-N シグ・エヌ
Photographs by YUSUKE TSURUMI ユウスケ・ツルミ

035 Fadeless souls 色褪せぬ魂

035 Fadeless souls 色褪せぬ魂
037 1; Background to the development 開発背景
2; "Reaching the all land on the globe" project 「全地球到達任務」構想
038 3; "Mobile Suit SHOCK" and interruption 「モビルスーツショック」と挫折
4; Stagnation period and the rise of the gigantic transporters 停滞期、そして巨人輸送機の台頭
040 5; Age of gigantic transporter's 巨人輸送機の時代
6; The idea of "Transformation" 「トランスフォーム」の思想
045 7; From exoskeleton to endoskeleton 外骨格から内部骨格へ
048 8; Completion of the Mobile Suit enable to perform "Reaching the all land on the globe" project 「全地球到達任務」モビルスーツの実現
8; Challenge of the private companies 民間企業の挑戦

By MASAYA TAKAHASHI マサヤ・タカハシ

058 ウェイブライダーの運用に関する誤解と正式な運用方法について

By SHINYA OGURA シンヤ・オグラ
With reporting by RYOTA FUJITSU リョウタ・フジツ

062 ゼータ・ガンダムはなぜトリコロールに塗られたのか？

By RYUSUKE HIKAWA リュースケ・ヒカワ

065 リック・ディアスが主力機になれなかった理由

By MANABU KOGA マナブ・コガ

隆盛があるのだという説さえ存在する。このように、20余年を経ても本コロニーとガンダムの因縁については、驚かされる新事実が増えることはあっても、決して絶えることはなさそうだ。

本書は、そんな生活や人生観にまで根をおろしてしまったほど重度の「ガンダム・ファン」のために贈る最高のプレゼントになるはずだ。特に連邦政府の内乱であったがゆえに、事態収拾後もなかなか事実関係が明確でない「グリプス戦役」と、そこで活躍した「ゼータ・ガンダム」以下の各モビルスーツにスポットを当てている。

この戦役は当事者たちでさえ、今ではひとつの事件を2通り以上に「解釈」するという異常な事態に見舞われており、正史に近いものでさえ2種類以上あって、歴史家・研究家泣かせなこと、この上ない。たとえばゼータ・ガンダムの最優秀なパイロットだったカミーユ・ビダンの消息でさえ、まるで正反対の記録が発見される有様なのだ。

そうした状況を鑑みて、これまでのメディアでは流れてこなかった角度から新事実を収集、イレギュラーかもしれない視点で各界の識者にその吟味と再検証を依頼したのが、本書の大きな特徴である。

リーアが直接関わりをもたなかった「ゼータ・ガンダム」は、これまでは「伝説」の存在だったかもしれない。しかし、いかに異説が多くあろうとも、それは確かにU.C.0087年の宙域に飛翔していた機体なのだ。

その実像を改めて脳裏にとらえ直し、真実に一歩でも迫るために本書が役立つことを期待する。その行為は、先述のように"戦争"という行為から"平和"を対照するための境界装置である「ガンダム」を楽しむ、最良のものとなることと確信している。

U.C.0106年9月　リュースケ・ヒカワ（メディア評論家）

リュースケ・ヒカワ　U.C.0058年生まれ。リボー工科大学では電気物性を専攻し、磁性体の研究で電磁気粒子工学科を卒業。その後、通信機器メーカーに就職、ミノフスキー粒子下における携帯データ通信端末の開発、設計に従事する。並行して大学在学中からメディア論に興味を持ち、メディア上で流布される言説や、噂の拡大メカニズム、情報改竄の識別方法などの研究を独学で確立。U.C.0101年にフリーランスとなり、各メディアに寄稿している。

070 A.E.U.G. NEWS RELEASE U.C.0087

070 エゥーゴに新たに参加したパイロットについて
071 地球連邦軍ジャブロー基地攻撃に関するデマゴーグについて
072 ティターンズのフォン・ブラウン周辺について
073 ブレックス・フォーラ准将の暗殺について
074 フォン・ブラウン市の治安回復について
092 ティターンズのコロニーレーザー（グリプス2）について

Reporting by RYOTA FUJITSU リョウタ・フジツ

077 a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

086 WEEKLY NEWS November 21, U.C.0087 issue
088 ダカールで行った地球圏連邦会場占拠について
089 MONEY=MOON U.C.0088 January edition
090 DAILY SUNRISE November 17, U.C.0087 issue
091 SIDE VIEW December 2, U.C.0087 issue

095 PROPOSAL

097 スペックから読み解ける上位機種

By SIG-N シグ・エヌ

109 Mobile Suit 時代を作るモビルスーツ shape the next generation

109 Mobile Suit shape the next generation 時代を作るモビルスーツ
110 Battlefield of Zeta ゼータの戦場
113 Development of Zeta Gundam ゼータ・ガンダムの開発
126 The historic significance of Zeta ゼータの歴史的意義

By ISAKU OKABE イサク・オカベ

128 Resources.

Wander Land, co.

New menu, with wholesome fresh vegetables!

Super-deluxe HAMBERGER

75 cools each. Combo set are only 90 cools, with Drink (M) and French fries (M). 550 KCal.

With our unique management system, we, Wander Land Co., have contracts with an agricultural plant of each space colony to serve you with the fresh and safe meal. Come to our Wander Land Co. hamburger shop in your city street, for your space colony's agricultural plant harvest and grows necessary ingredients for the hamburger. Lettuce, pickle, onion, flour bun, beef patty, cheese, and bacon. They are all from your own space colony. All of the ingredients are originally from earth,and are not Genetically Modified. "Wander Land Co." is the hamburger shop for citizens of space colonies.

Wander Land, co.

Reah Wander Land, co.

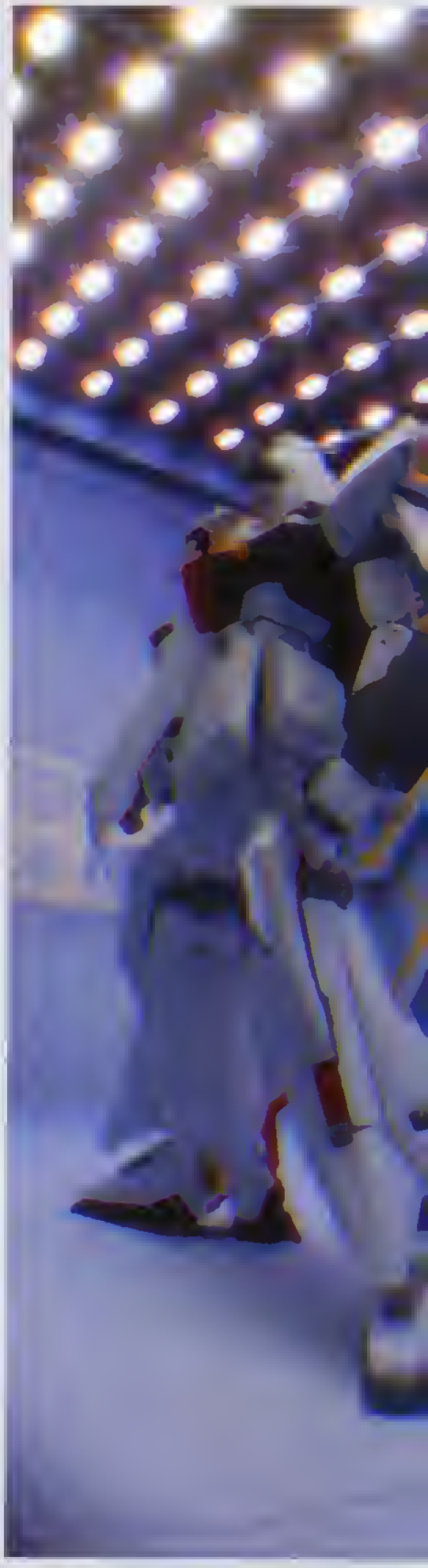
The logo "W" is registered trademark of "Wander Land Co.". "Wander Land Co." is an imaginary corporation that appears in original animation "Mobile Suit Gundam 0080 war in the pocket".

ZETA GUNDAM in U.C.0091

By SIG-N シグ・エヌ
Photographs for *masterpice* U.C.0091 by YUSUKE TSURUMI ユウスケ・ツルミ

U.C.0091年6月、新型モビルスーツのロールアウト式典を取材するため、月のアナハイム・エレクトロニクス社・グラナダ工場に赴いた我々は式典会場であるハンガーに入ったとたん、我が目を疑った。そびえたつ2機のモビルスーツのうち1機は今回の取材対象でもある新型機RGZ-91リ・ガズィであったが、もう1機はトリコロールカラーに塗られたMSZ-006ゼータ・ガンダムであった。何の事前通告も、一切無かったが、アナハイム・エレクトロニクス社としては今回の新型機が伝説の名機MSZ-006直系の子孫である事を強調したかったのであろう。公式にはカミーユ・ビダンの乗っていたMSZ-006 1号機はアクシズで大破した時点で登録から抹消され、以後行方不明である。アナハイム・エレクトロニクス社が回収したとの噂はあったが目前の機体がそのゼータ・ガンダムであるという保証にはならない。展示用に別の機体のフレームに似ている外装を取り付けたという可能性もあるのだ。私自身、実際にこの目でゼータ・ガンダムの実機を見たことは無い。しかし写真や映像、流出したわずかな社内資料を穴のあくほど見ていた私の脳ミソはすぐに答えをはじき出した。私は同行のカメラマンに「リ・ガズィの写真は2、3枚でいい。残りのメモリーはすべてゼータで使い切れ」と指示を出した。

SIG-N [illegible] 年3月[illegible] 映像ディ[illegible] 主[illegible] 前世紀[illegible] 兵器や戦闘[illegible] 実写映像を発掘[illegible] キメラ[illegible] 作品を手[illegible] モビルス[illegible] 研究[illegible] 完全[illegible] 趣味。



91

HEAD of MOBILE SUIT

単なるセンサーの塊でしかないモビルスーツの頭部であるが、その機能ゆえに真っ先に狙われる部分であり、自衛用火器を搭載する必要から振動対策や配置で特に設計の難しいユニットであると言う。反面、その機体のキャラクター性が出せる部分でもあるので設計者の個性が盛り込めるという楽しみもあるらしい。

COCKPIT BLOCK

1.

POSITION of COCKPIT BLOCK (GUESSWORK)

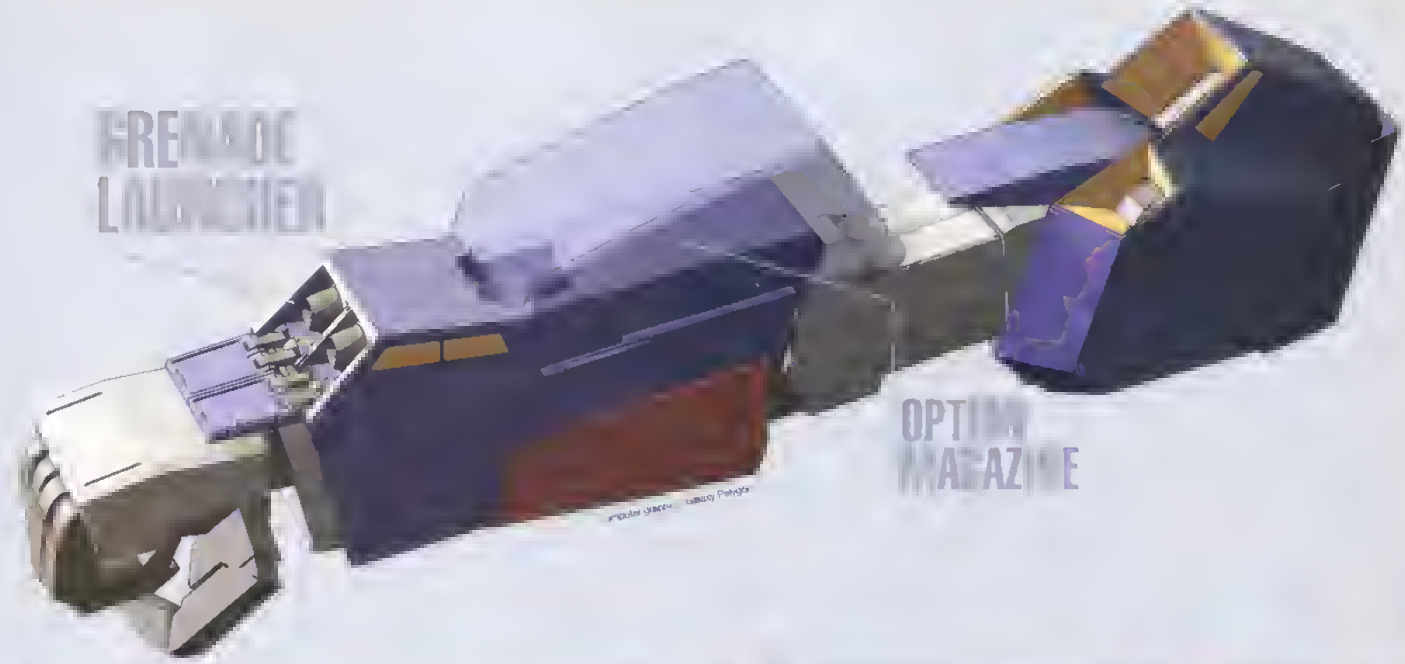
2.

3.

LAYOUT in COCKPIT BLOCK (GUESSWORK)

従来、ゼータ・ガンダムのコクピット・ブロック[illegible]ノ・モード、ウェイブライダー・モード相互に移行する時で約90度回転し、内部のシートのみが水平を保つと考えられていた。しかし、今回改めて写真の解析を行った結果、コクピット・ブロック自体が水平を保ちつつそれぞれのモードで収まるという可能性も出てきた。その理由としては、まず、写真では見えないが、従来コクピット・ブロックの一部と考えられてきた胴体の赤いブロックの下部に回転軸用と思われる円形のメンテナンスハッチがあったこと、写真で推定されるコクピット・ブロックの大きさではモビルスーツ・モード時に腹部装甲をわざわざ左右に広げる必要が無いことなどがあげられる。腹部スペースに関しては以前より議論されていた部分であるが、これでもまだスペース的には余裕があるため、一部には従来型と遜色の無い大きさのコクピットを持つという説も見られる。この場合はパイロットと共にコクピット・ブロックの一部が移動すると考えた方が良いだろう。

ARMS
of MOBILE SUIT



Photo, A E U G

Photo, KARABA AIR FORCE

モビルスーツの腕も人間の腕のように多機能で多用途だがモビルアーマの場合は基本的にマルチパーパス・ウエポンプラットフォームとして使用される。先端には人間と同じ5本の指を持ったマニュピレーターがあり、様々な武器を操作可能だ。たとえばビーム兵器であれば標準装備のビーム・ライフルから、より長射程のビーム・カノンまでを扱い、エネルギーパックが空になれば人間の兵士が弾倉を取り替えるようにマニュピレーターを使って交換する。さらにモビルスーツ同士の近接戦闘になれば今度はビーム・サーベルを握って互いを斬り合う。これはモビルスーツそのものが汎用の兵器であるがゆえにほかならない。しかしそのために比較的脆弱な部分であり、特にゼータ・ガンダムの場合変形機構も有するためか、全てを装甲で覆えず、写真に見られるように一部の動力系パイプが剥き出しとなっている。手首上に装着されているグレネード・ランチャーは標準装備だが、他機種で装備されている例はあまり無く、試作機ゆえの試験装備と考えられている。

POSITION in MOBILE SUIT

POSITION in WAVERIDER

ゼータ・ガンダムを名機とさわしめた大きな要因の　つと言えるのが、この股間のムーバブル・フレームの構造である。機体全体の構造と変形機構の要であり、このフレーム構造のため他機種とは　線を画したプロポーションを有し、これがいまだにダントツの人気を誇っている理由の一つであろう。ゼータ・ガンダムの驚異的な変形速度を実現させるためには、変形フレーム自体に余計な慣性モーメントを生じさせない軽さとそれに反する驚異的な強度を有していなければならない。現在までゼータ・ガンダムのフレームにどのような材質が使われているのかは公表されていないが、通常の合金ではないとする説もある。とはいえ複合材料では宇宙空間での運用には耐えられないのだ。

MOVABLE FRAME BETWEEN GROINS

THERMONUCLEAR JET/ROCKET HYBRID ENGINE

AIR INTAKE

ゼータガンダムは初めてジェネレーターを両足に搭載したモビルスーツとして有名である また、その熱核反応炉コアの高温流体を導き出し、プロペラントまたは大気に触れさせ急激に膨張させた高温ガスを推力とする熱核ジェット・ロケット・エンジンを搭載しているとされている。従来は熱核ロケットであると見られていたが、大気圏内での長時間にわたる戦闘や脚部側面にエアインテイクが開いている写真などが見つかり、ジェットとロケットのハイブリッド・エンジンであると推測されている。ふくらはぎに当たる部分にはダイバージェンス・コンバージェンス・ノズルがあり、これも当初はブースト用のロケットエンジンかと思われていたが、前部のエアインテイクらしき開口部からとがったコーンが覗いており、ここには熱核ラムジェット・エンジンが搭載されていることが判明している。また、脚部の青い部分は前後に移動させる事により可変ベーンとなって衝撃波を発生させ、どの領域でも効率良く空気を取り入れることができるようだ

REVERSE JET THRUSTER

胸部の黄色いダクトは初期にはコ[illegible]エアインテイクと考えられていたが、近年ノズルと言う説が有力であり ここに掲載した写真はそれを裏付けるものだ このノズルはウェイブライダー・モードでは減速、方向転換用であり、モビルスーツ・モードでは機体の姿勢制御のために働く。従来は黄色いダクトが上下に動き、縦方向、中に見える縦のベーンで左右方向の推力変更を行うと考えられていたが、写真を見る限り、中にあるのはリニアスパイクノズルである。大気圏内での運用も考えられていたことは明らかであり、これなら最小限の可動機構で推力変更が行えるのでガス式という可能性もある。ゼータ・ガンダムが大気圏内戦闘で見せた驚異的な運動性能の秘密がこれであろう。

OTHER VERNIER NOZZLES

ゼ・・・リングダムの卓越した機動力を生 のが機体各所に設けられたバー ア・ノ ・ である 肩に3箇所ずつ見られる四角い開口部にはリ ・ズバ ノズルがあると見られ、これて大気圏内外、特に大気圏内 域において効率良く推力が出せるようになっている また背面スカート内部には通常のダイバ ・ェンス・コンバーェンス・ノズルがあることから宇宙空間での推進用、または大気圏内でのブースト用に使う核ロケットエンジンが搭載されていると思われる。これらのバーニア用プロペラントはさらに前部スカートに搭載されていると見られている

FLYING ARMOR
and TAIL STABILATOR

From live telecast on November 16 U.C 0087

ゼータ・ガンダムの外観的な特徴となっているのがモビルスーツ・モード時、背面に配置されるフライングアーマーとテイルスタビレーターの各ユニットである。両ユニットとも前縁部を赤に、それ以外をフラットブラックの耐熱塗料で塗装されており、時におもちゃっぽくなってしまうトリコロールカラーの機体に凄みを加えている。フライングアーマーの力はアーマーと呼ぶには少々脆弱であるが、大気圏再突入時には機体下面に展開し衝撃波を発生させ、大気圏内では主翼として揚力を発生させる。これにも熱核ラムジェットが搭載されており、特に大気圏上層での機動を助けていると見られる。テイルスタビレーターには熱核ロケットエンジンが内蔵され、下面に並んだリニアスパイクノズルが大気圏内外での運用を可能にしている。テイルスタビレーターに装備されているロケットエンジンはかなり強力らしく、かのダカール戦での報道映像には、地表近くをこの推力だけで悠々と飛行していくモビルスーツ・モードのゼータ・ガンダムが写っている。

EQUIPMENT of WAVERIDER

THERMONUCLEAR
DUCT JET ENGINE.

Photo A E U G

モビルスーツ単体での大気圏再突入の研究は低軌道上での戦闘中に予期せずに大気圏に再突入してしまった機体とパイロットを生還させるために始まったとされているが、ゼータガンダムの場合は再突入可能とはいってもやはり事前の入念な準備が必要であり、突入後のフライングアーマーの再使用(大気圏再突入)は不可能であったらしい。しかし、シールドとフライングアーマーの組み合わせであったがウェイブライダーとしては非常にコントローラブルで性能は良かったとされる。また大気圏内での飛行も安定しており、航空機としての性能も高かった。余剰推力も充分で減弾した自式を載せて大気圏内を飛行したこともあったという。

SHIELD

リ・ガスィのロールアウト式典会場内にはシールドも置かれており、詳細に観察してみたが、実際にゼータ・ガンダム用に製作されたもののようであった。シールド内にもジェネレーターが搭載され大気圏内での飛行を補助しているとの説もあったが当時見た限りではそれらが装着された跡やスペースは見当たらなかった。しかし表面の材質はフライングアーマーと同じに見え、シールドとしての機能は疑問である。たとえそれなりの性能を持つシールドであったとしても再突入直前に戦闘があった場合、再突入に成功したかは疑わしい。しかもシールドが無ければウェイブライダー・モードに移行できないわけで、運用面での疑問は残る。

BELGAMINO CHALLENGE CUP

JUNIOR MOBILE SUIT CHAMPIONSHIP OF YOUTH 0107

1 Slaloms

2 Stairs

3 Jumping

4 Rocks

5 Climbing

6 Jumping down

6 Stairs with cargo

7 Carry cargo

8 Jumping with cargo

10 Jumping up with cargo

START

GOAL

0105 Record 5:28:04 Team EPS (RH-35EX)

Challenge 10 obstacles!

Make your machine
Break the record of DRAKEN!

Sign up by 8.6.0106

Scan this VR code and visit the site with your mobile for the most up-to-date schedule, regulations, and more.

VR 0200226

JMSCA RBC ASCOT Belgamino Inc.

色褪せぬ魂

Fadeless souls

By MASAYA TAKAHASHI マサヤ・タカハシ

機体構造そのものを変化させて複数のミッションに迅速に対応でき、宇宙空間から人気圏内まで連続運用を可能とする破格の汎用性を備えた驚異のモビルスーツ、MSZ-006ゼータ・ガンダム。モビルスーツのコンセプトや設計がいわゆる「第2世代」に移行しつつあったUC 0087年の登場時、すでに「第3世代」にまで進化していると言われたこの革新的モビルスーツは、現在も謎の多い機体である。本稿では現在までにアナハイム・エレクトロニクス社、地球連邦軍ならびに地球連邦政府から明らかにされている資料をもとに、その開発経緯をひもといてみたい。

なお、筆者は本稿執筆にあたり現在可能な限りの一次資料を収集したが、「一年戦争」ならびにその後の戦禍による資料／情報自体の消失、連邦政府情報保護法の壁などにより、一部、関係者の証言や推測、憶測の類が含まれていることをお断りしておきたい。しかしながら、極力、怪しげな風説の類は排除したつもりである。後年、本稿に記された内容が事実と相違している場合、それはひとえに筆者の責任に帰するものである。▶▶

マサヤ・タカハシ 00U 生 。アモ ル ノ製作者 作家 ン ナリスト ジャーナル 一年戦争 時に 撃したモ レマ 戦争 ホワイトベース ノ製作集団 Stromer Sie Bas のメン ー ホビ アモ 古雑 lo 本の記事をまとめたりし0082年発 モトマ 製作評論者 How t uild Mobile Suit」は当時ノ ー、テ ア製作者たち 衝撃を与えまたの アモ ル ノ大会を予測 たカ な MS ん ト 年戦争 ー の イ 重モ レフ イロトガルホルタ ン「MS戦 ム カコ の原作、ナ 携わ ている 綿密な調査資料 い ン 向 ナ る 連邦電教連 乱事件」を 撃した レポルター カ タムセ チネル」力著者と も知られる 現在はモビ 格 ノ ナ ム ノのカスタマイフ チ ー ノ カ 競技全般 モ レマ 全般のメカ ム ネし ー 造 かい 編集。者ー ン 連邦 状モ ル イセ ノ(車用時外)を保持

1＝カラバが所有するガルダ級輸送機「アウトムラ」とウェイブライダー形態で飛行する「セータ・ガンダム」。写真＝カラバ提供

1; Background to the development

開発背景

UC0079年に開戦した人類史上初の"宇宙戦争"である「一年戦争」時、ジオン公国軍の地球降下作戦に対して有効な反撃戦力集結を行えなかった地球連邦軍はこれがトラウマとなっていたことと、終戦後も地球に残存したジオン公国軍部隊による重武装のゲリラ的テロ活動の脅威が予想されていたことから、地球上での連邦軍戦力の緊急展開能力の向上（即時反撃能力の整備）をはかるべく、戦力整備計画を発動した。この戦力整備計画は戦後すぐのUC0080年に発動されたとも、すでに「一年戦争」末期の「星一号作戦」前後から発動されていたとも言われているが、詳細なデーターが失われている現在、その時期の特定は不可能である。

この戦力整備計画に対する回答が　①地球上の総司令部であるジャブローから、海外に展開する連邦軍基地を経由することなく直接的に「全地球到達任務」を行える、航続距離2万km（地球半周）を達成でき、なおかつ1～2時間以内で攻撃を開始できる戦闘／攻撃航空機もしくはモビルスーツの開発。――②かつてのジオンの「ガウ攻撃空母」のような、モビルスーツ運用能力を持つ巨大航空機の開発。また、その航空機による常時警戒態勢の確立、であった。

①案はいわば「高空対地攻撃機／高空対地襲撃機」計画であり、②案は旧世紀にアメリカ合衆国が行っていた、空母機動部隊による遊弋哨戒の宇宙世紀版である。大雑把に言えば①案が後にゼータ・ガンダムの開発（いわゆる「プロジェクト・ゼータ」）につながり、②案が複数のガルダ級輸送機の実戦配備に結実することになる。

2; "Reaching the all land on the globe" project

「全地球到達任務」機計画

「全地球到達任務」を達成できる機体の開発構想は「一年戦争」後に始まったことではなく、旧世紀2003年にアメリカ合衆国で提案された「FALCON（Force Application and Launch from the CONUS）計画」に遡る（さらに旧世紀1957年にアメリカ合衆国空軍によって計画がスタートし1964年に中止されたボーイングX-20「ダイナソア」や、その元となった中世代の"ナチスドイツ"の科学者であったオイゲン・ゼンガー博士が提唱した"ダイナミック・ソアリング"（大気圏を離脱した後、大気の摩擦による反作用を利用することで軌道を変更して目的地へ到達する技術）を応用した「シルバーバード」有人宇宙爆撃機計画にまで遡れるが、本稿では飛行可能な試作機が完成していたと思われる「FALCON計画」を始祖と位置づけた[1]。

これは「全地球到達任務」を遂行できる爆撃用HCV（Hypersonic Cruise Vehicles＝極超音速巡航機）を開発しようという計画だった。

この爆撃用HCVは航続距離を稼ぐために"ウェイブライダー"と呼ばれる空力形態でデザインされ、空気抵抗の少ない高度3万～4万キロメートル（18000～25000マイル）の大気圏上層を飛行する。"ウェイブライダー"とは、極超音速で飛行する際に衝撃波が下面に集中して発生する性質を利用し、機体の下面の圧力を高めることで、圧縮波である衝撃波の上に乗る形で揚力を得ようというもので、「衝撃波の波乗り」に由来する名称だ。後にゼータ・ガンダムの巡航形態のデザインにも採用され、巡航形態の通称にもなっているのでご存知の方も少なくないだろう。

動力には空気密度が薄くても有効なIRR（Integral Rocket Ramjet）方式のエンジンが採用されることになっていた。ちなみにIRRはロケットモーターで加速上昇した後、空いたスペースに酸素と燃料を噴射するエンジンで、スクラムジェットエンジンとも呼ばれる。

この計画は当時の技術レベルが未熟だったことと、実現のためにはコストがかかりすぎることから中止に追い込まれたが、「オーロラ」と呼ばれた実験機は完成していた模様で、戦略偵察機であるという情報がリークされていた。当時、この「オーロラ」は計画を秘匿するため、「外宇宙生命体が乗ってきた宇宙船の技術が使用されている」などというヨタ話が意図的に流布されていたという。この「FALCON計画」については、すでに旧世紀の計画ゆえ、現在ではその詳細を知る由もない。

旧世紀にはこの計画実現のためには幾多の困難があったと思われるが、UC0080年代の技術レベルにおいてはこの構想は充分に実現可能であり、再び「全地球到達任務」機計画が脚光を浴びることになった。

残念ながら電子記録が失われている現在は詳細不明だが、当初、連邦軍各工廠から提案されたものは、当時、連邦軍が技術的にリードしていた大口径荷電粒子砲を主武装としたウェイブライダー形態の機体を持つ攻撃機であった。そのデザインは3案あったと言われるが、いずれにしても大同小異だったと伝えられる（中には冗談まがいの「外宇宙生命体の乗る宇宙船」、いわゆる"UFO"的なデザイン案もあったと噂されるが、NRX-044アッシマーの前身かもしれない）。

その構想自体もほぼ同じで、ロケットブースターによって一気に高度3万～4万キロメートル（18000～25000マイル）へ打ち上げ、IRRエンジンによって最高速マッハ10で目標上空に到達、地上に集結しつつある敵勢力が体制を整え、橋頭堡を確立する前に上空から荷電粒子砲によって敵戦力を殲滅、もしくは甚大な損害を与え、本格的な反攻部隊の到着と展開までの時間稼ぎをすると言うものである。

戦闘後、機体は手近な連邦軍基地へ着陸し、専用輸送機や輸送船に積載されて帰還する手はずとなっていた。このため、想定されていた機体のサイズはかなり小さかったものと考えられている。

ちなみに地上基地からロケットブースターによって発進し、大気圏上層を飛行する航空兵器としては「一年戦争」時に連邦航空軍によって使用されたというハービック社の「フライダーツ」が想起されるが、こちらはあくまで低軌道／超高空専用迎撃機と言うべき存在であり、超高空から敵地へ侵入し、地上の敵を襲撃するという本構想とは運用が根本から異なる。「一年戦争」の戦禍によって当時の詳細な電子記録が消失している現在、「フライダーツ」と称する機体の運用記録や戦果、生産機数、スペックなどは一切現存しておらず、2～3案のデザインスケッチと運用構想と運用状況についての簡単なメモが残されているのみであるため、現在では「"プロパガンダ目的だけ"に存在した、いわゆる"ゴーストファイター"だった」とする説（※）もある。

※「MS International　0081　Were "Flydarts" produced truly? Vol.35　No.1　January 0081　pp.97-109

1＝アウドムラ。写真＝カラパ空軍

3; "Mobile Suit SHOCK" and interruption

「モビルスーツショック」と横槍

「全地球到達任務」機の開発計画は各工廠において"見切り発車"的に独自にスタートした。無論、技術的にもコストパフォーマンスの面からも容易に実現可能だったからだ。

しかし、順調に進むかに見えたこの計画に全般的に連邦軍上層部からの"横槍"が入れられる。

「一年戦争」において登場したモビルスーツという新たな兵器体系は、「一年戦争」中より連邦軍中枢を「モビルスーツショック」とも言うべき症状に蝕んでいた。「モビルスーツ万能主義」「モビルスーツ崇拝主義」とでも言い換えることができよう。つまり「敵戦力がモビルスーツ主体であるならば、こちらもモビルスーツ主体の戦力整備を成すべきである」という思想である。旧世紀の一時期に流行した「戦車に対抗するには戦車」という「主力戦闘戦車(MBT＝メイン・バトル・タンク)」思想の宇宙世紀版とも呼んでも良いだろう。

さらに「一年戦争」開戦劈頭のジオン公国軍による「ブリティッシュ作戦」や「ルウム戦役」で多大な被害を受けた虎の子の宇宙艦隊再建を唱える地球連邦軍上層部がV作戦と同時期に開始した、モビルスーツ搭載／運用能力を持つ宇宙艦艇整備計画、いわゆる「ビンソン計画」の"一応の成功"が、この思想を助長／補強した感は否めない。

「モビルスーツ万能主義」「モビルスーツ崇拝主義」と言うと先進的な思潮のように思えるが、モビルスーツ部隊のみを独立運用することは不可能であり、その運用のためには母艦である宇宙艦艇、ひいては宇宙艦隊を必要とする。つまり、依然として宇宙艦隊の必要性を認めさせたい連邦宇宙軍のいわゆる"艦隊派"の提督たちにとっては、ロマンチックな「大艦巨砲主義」こそ譲歩せざるを得ないものの、自分たちの宇宙艦隊という玩具の存続のためには、それに相反するように思える"モビルスーツの優位性"は、むしろ"好都合な理屈"とも言えた。

そこへ地上の基地から緊急発進し、短時間で地球上のあらゆる場所に到達可能で、即座に反攻の露払い役となる「全地球到達任務」機などという"便利な"存在は、厄介者以外の何者でもなかったわけだ。

また「全地球到達任務」機プランと同時に提出されていた「モビルスーツ運用能力を持つ巨大航空機の開発と、その航空機による常時警戒態勢の確立」というプランは、"艦隊派"の提督たちの目を惹くには充分だった。

ジオン公国軍が「一年戦争」時に地上で運用したモビルスーツ／艦載機運用能力を持つ、空中"空母"、空中"戦艦"とも言うべきガウ攻撃空母のような兵器は、これをもって地球の空に「空中艦隊」を編成し、地球の空すら"彼らの艦隊の海"にするという子供じみた夢想をさせるには恰好の玩具だったのだ。

かくして「全地球到達任務」"機"計画は、「「全地球到達任務」"モビルスーツ"計画と成すべし」という実現の見込みのない要求へすり替えられて事実上葬り去られ、開発の焦点は「巨人機」計画へと移ることになる。

4; Stagnation period and the rise of the gigantic transporters

停滞期、そして巨人輸送機の台頭

いわゆる"ムーバブル・フレーム"のコンセプトが生まれる以前の段階では、「全地球到達任務」"モビルスーツ"の開発に実現の見込みがないのは当然であった。当時の概念として「基本的に"人型"をしていること」が必須であったモビルスーツと、「理想の空力形態は"ウェイブライダー"」とされていた極超音速巡航機の形状を両立させることなど、「ムーバブル・フレームを利用した可変モビルスーツ(TMS＝Transformable Mobile Suit)」という発想が存在しなかった時代には、どう考えても不可能だったのだ。

とは言え、この時期に各工廠で創造されたアイデアやコンセプトに見るべきものがなかったわけではない。たとえば、ウェイブライダー形状の飛行ユニットにモビルスーツを載せて目的地まで超音速飛行させた後、目的地でモビルスーツを切り離して戦闘、その際、飛行ユニットはモビルスーツの大型シールドとして使用するというものが提案されている。この提案は「戦闘後に再飛行できないため要検討」として連邦軍装備開発局から却下されているが、後の"フライングアーマー"と通じるものがあり、現在ではこの計画の提案者は、当時、ある工廠から開発を請け負っていたアナハイム・エレクトロニクス社だったと信じられている。

いずれにせよ「戦闘／攻撃航空機もしくはモビルスーツの開発」という表現が「モビルスーツの開発」という表現に改められた結果、各工廠の「全地球到達任務」機に関する計画は急速に規模を縮小、衰退し、以後、小さな研究が細々と継続されるのみの状態となった。

さて、「全地球到達任務」機の開発計画が自然に縮小して行く一方で、モビルスーツ運用能力を持つ巨大航空機の開発が注目を集めていた。全長317メートル(1040フィート)、翼長524メートル(1720フィート)、最大積載量9800トン(2160万ポンド)に達し、熱核ジェットエンジン20基により、無補給で地球を2周できるガルダ級輸送機である。

ガルダ級輸送機はUC0075年より史上最大の軍用輸送機として、連邦軍により開発がスタートした。開発開始当初は「モビルスーツ以前」の時代なので、当然、モビルスーツ運用能力など想定されておらず、単純に「通常兵力の拠点間の大量大規模移動」のみが考慮されていた。とは言え、ガルダ級輸送機が本格的に戦闘に使用されたUC0087年時点でさえもこの巨人輸送機に合う滑走路はほとんどなく、離着陸には主に海上を用いることになっていたため、当時の連邦軍が「拠点間の大量大規模移動」にどのようなイメージを持っていたのか理解に苦しむ。

余談ながら、本機には開発当初から機体底部に離水時にも使用する低速飛行用ホバーノズルが装備されているため、ひょっとしたら着水後は、旧世紀1970年代のロシア(当時はソヴィエト連邦)において製作された強襲揚陸艇「A-90オリョルノーク」というエクラノプラン(地面効果翼機(Wing-in-Ground Effect Craft ＝WIG)もしくは表面効果翼艇(Wing-in-Surface Effect Craft ＝WISE))のように水面上を滑航し、拠点近傍の浜辺などにそのまま乗り上げて物資や部隊を揚陸する構想だったのかもしれない。

しかしながら当時、"カリスマエンジニア"と呼ばれたA90オリョルノーク の60メートル(197フィート)に迫る全長と比較しても5倍ある300メートル(1000フィート)以上の全長と500メートル(1700フィート)を超える翼長という巨体では、いくらなんでも強襲着陸後の滑走での自力方向転換などとかなわないはずで、滑走に[illegible]かったきりであろう。

さて、UC0079年の[illegible]年戦争」開戦により、ガルダ級輸送機の建造作業は"宇宙艦艇の建艦優先のために一時中断され、実際に1番機のガルダが就役したのは開発スタートから7年、[illegible]年戦争」終戦から2年を経たUC0082年のことであった。

しかし、連邦政府とコロニー公社がスペースコロニーの再建と復興事業に邁進していたUC0080年の[illegible]年戦争終戦直後とも言える時代に、このような途方もない金食い虫の軍用大輸送機の建造が再開、継続され、就役したという事実は驚くべきことと言ってもよい。

無論、これは連邦軍内における例の「モビルスーツショック」の影響であることは疑いないのだが、ガルダ級輸送機を強引にと言ってもよいだろう就役させるために連邦軍はある種の"トリック"を使ったふしがある。

ご存知の通り、ガルダ級輸送機は軍用機ではあるが、民間シャトルの打ち上げにも使用される。つまり連邦軍は"コロニー再建と復興のための、宇宙と地球を結ぶ空中中継基地"としての役割を強調することで、本機の建造予算を軍事費以外のところ[illegible]戦災復興特別予算など[illegible]から確保したようなのだ(※)。

この「シャトル打ち上げ能力」は開発当初の構想には含まれていなかったと伝えられており、本機の大きなペイロードと高空飛行性能から逆説的に付与された、いわば"後付け能力"だったのではないかとも言われている。ともあれこの結果、「グリプス戦役」の始まるUC0087年までに、連邦軍はまんまとアウドムラ、スードリなど5機のガルダ級輸送機を手にするに至った。

しかしながら1番機の「ガルダ」は予算獲得にあたって"軍用以外の目的"を強調したために、連邦軍籍にありながら、就役直後より常にコロニー公社など民間企業に連絡用小型シャトル発射母機として貸し出される状態が続いており、ほとんど軍務につくことはなかったようだ。連邦軍が初めて自由に使用できるガルダ級輸送機を手に入れたのは、アウドムラ、スードリ以降と言えるだろう。▶▶

巨人輸送機の時代

5; Age of gigantic transporters

まんまとカルダ級輸送機を入手した連邦軍の"艦隊派"は，さっそくこれを"空中空母"として利用するべく，早くもUC0083年に，建造中のアウドムラ，スードリに対して「第一次改装計画」を発動した

ガルダ級輸送機は離着陸，水できる能力を持つものの，こと"輸送"という面で考えた場合，物資の積み下ろしのためにいちいち離着陸，水していたのでは効率も悪く，不経済である．また，輸送を行う拠点や基地が充分な大きさの滑走路を持っているわけではなく，近傍に浜辺があるわけでもない．そこで空中のガルダ級輸送機と地上の拠点を結ぶエレベーターのようなものが必要となるわけだ

無論，これは空中のガルダ級輸送機からシャフトを地上に下ろして物資の積載を行うエレベーターを装備するわけではなく，空中を自在に移動する物資運搬"リフト"と言ったほうが適切であろう．その"リフト"として採用されたのが「ドダイ改」と呼ばれる機体であり，ガルダ級輸送機の「第二次改装計画」は，主にこの「ドダイ改」の積載，運用能力の向上に焦点が置かれていた

「一年戦争」時，ジオン公国軍はド・ダイYS要撃，爆撃機の推力に大きな余裕があることに目をつけ，その機体背部に物資を積載してVTOL戦術輸送機としても運用していた．後に簡単な補強を施せばモビルスーツさえ積載できることが判明，"サブ・フライト・システム"と称してモビルスーツを積載し，地球上でのモビルスーツの航続距離の延伸や機動的作戦運用にも供していた

このド・ダイYS要撃，爆撃機の運用例に注目した連邦軍は，同機を改設計した「ドダイ改」を，戦後いち早く戦術VTOL輸送機として採用していた．「ドダイ改」は原型機と異なって無人飛行も行え，またモビルスーツを積載した場合には，モビルスーツ側から操縦することも可能となっていた．また，その推力も原型機より大幅に強化されており，標準的なモビルスーツ2機を積載して飛行することが可能であった．これは「ドダイ改」を運用する場合，"物資積載用クレーン／ローダー"がわりのモビルスーツが常に1機は随伴するためである．無論，これは「建前」の話ではあるのだが

しかし連邦軍"艦隊派"のカルダ級輸送機に対する「ドダイ改」運用能力向上の狙いは，物資搬入"リフト"以上の部分を含んでいた．それは当然，「ドダイ改」のモビルスーツ用"サブ・フライト・システム"としての運用であり，モビルスーツのガルダ級輸送機の"艦載機"化だ．

ちなみに現在では「ドダイ改」は，さらにモビルスーツの戦闘補助用"サブ・フライト・システム"に特化した方向性にあり，自前の武装すら有する「ベース・ジャバー」登場までの"間つなぎ"の機体だったのではないかと考えられている．これは旧世紀，回転翼航空機（ヘリコプター）が登場した際，軍事用途として輸送ヘリコプター，武装輸送ヘリコプター，純戦闘用ヘリコプターへと進化していった状況と似ていて興味深い．あえて言えば「ドダイ改」は輸送ヘリコプターであり，「ベース・ジャバー」は武装輸送ヘリコプターに対比される存在だろう．

さて，ガルダ級輸送機に「ドダイ改」（後に「ベース・ジャバー」へ装備改変）と限定的なモビルスーツ運用能力を備えることに成功した連邦軍"艦隊派"ではあったが，その後は思うように予算獲得が進まず，グリプス戦役」時は，当初"艦隊派"が目論んでいた空中"空母"，空中"戦艦"的な存在としては未完成なまま，戦闘に臨まざるを得なかった．

1＝サブ・フライト・システム「ドダイ改」。モビルスーツを乗せて飛行することができる。写真＝カラバ空軍／2＝可変モビルアーマー「アッシマー」。写真＝地球連邦軍

「トランスフォーム」の思想

6; The idea of "Transformation"

「グリプス戦役」以前，「全地球到達任務」モビルスーツの実現は，「何らかのサブ・フライト・システムのようなものと組み合わせねば不可能」という空気が支配的であった．

その固定観念のブレイクスルーとなったのが，連邦軍のニュータイプ研究所のひとつとして知られる，オークランド研究所で提案された「トランスフォーム（可変）コンセプト」である．

ここで誤解のないように付け加えれば，ニュータイプ研究所という存在は，実際には「ニュータイプ」そのものの研究機関と言うよりは，「ニュータイプ的なもの」を応用した軍用装備等の研究開発機関であり，むしろ最先端技術研究開発拠点「工廠」という意味合いの方が強い．これは「一年戦争後」，連邦軍ならびに連邦政府は「ニュータイプ」そのものに対しては危険視していたためである

「トランスフォーム」コンセプトとは，「局面に応じて飛行に最適な形状から，機体構成要素を連続的に組み替えて，汎用性に富む人型形状へ機体を変化させる」というものである．それを具現化したものが可変モビルアーマー・NRX-044アッシマーであり，UC0085年には完成を見ていた．

アッシマーはサブ・フライト・システムを使用せずに大気圏内を飛行できるモビルアーマーである．その標準的な運用法は，円盤型のモビルアーマー形態で目的地まで飛行，高高度まで上昇して人型のモビルスーツに変形し，自由落下中に白兵戦を行い，再びモビルアーマー形態で戦線を離脱するというものだった．

この「トランスフォーム」コンセプトを導入したアッシマーにより「全地球到達任務」モビルスーツは実現されるかに思えたが，結果から言えば同機は過渡的な性格の実験機とも呼ぶべきものであり，特徴的な「円盤型の巡航形態は空力特性を考慮したリフティングボディだったとはいえ大気圏内

Earth Federation Forces NRX-044 ASSIMAR

[illegible]
全長(頭部まで):約21メートル(約68フィート)
本体重量:41.1トン(90600ポンド)　全備重量:[illegible]
ジェネレーター出力:2010キロ[illegible]
スラスター総出力:[illegible]キロダム
センサー有効半径:10000メートル(約6マイル)
[illegible]
[illegible]

[illegible]
サブ・フライト・システムを搭載せずに大気圏内を飛行できる

U.C.0085

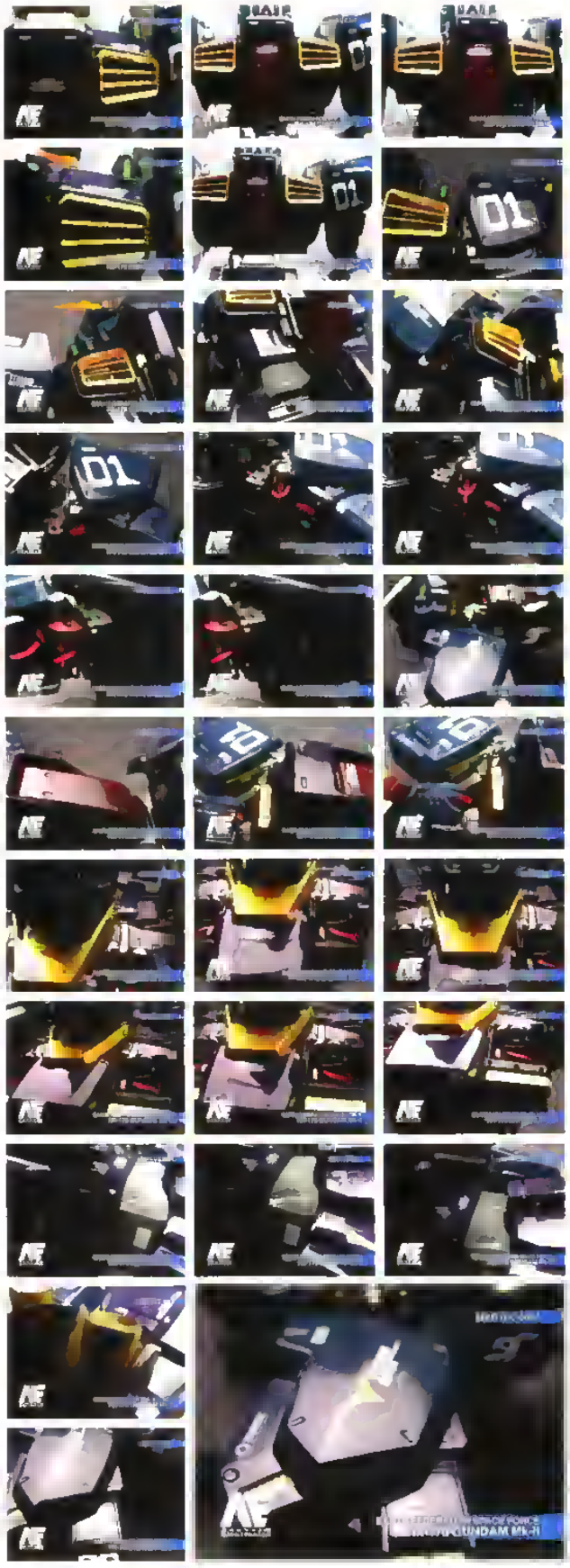
に限定した運用を考えた機体(熱核ジェットエンジン機)であったため、「全地球到達任務」モビルスーツに要求されていた「敵を"直接的"に"1～2時間以内"で攻撃」という要件を満たすことはできなかった。アッシマーはどちらかと言えば「サブ・フライト・システムなしに目的地まで自力飛行して作戦展開できる」モビルスーツとして考えられていたと見るべきだろう。

また既存の技術の蓄積で作られた可変機構が機体の大型化と機構の複雑化を招くこと、可動部にマグネット・コーティングを施したとは言え変形時間が理想状態で最短でも0.5秒かかること、変形時に胸部フレームが露出してしまうといった問題も抱えていた。さらに言えば、ガルダ級輸送機を母機とした水平発射を想定していた機体であるため、ガルダ級輸送機の存在を脅かすどころか、同機の"艦載機"候補として黙殺される始末であった。

それでもアッシマーは、「全地球到達任務」モビルスーツとして連邦軍にプロパガンダされていたこともあり、当時、結成されたばかりの反地球連邦政府組織エゥーゴに脅威を与えるには充分な存在であった。本機の存在こそがエゥーゴによるアナハイム・エレクトロニクス社への可変モビルスーツ開発要求のきっかけとなり、後にゼータ・ガンダムの開発(プロジェクト・ゼータ)につながったと言われている。実際、巡航能力や機動力は決して悪くなく、耐弾性や生産性も良かったことから、連邦軍に少数が制式採用され、「グリプス戦役」時には指揮官機や拠点防衛用としてジャブローやダカールの戦闘で使用されている。

アッシマーで具現化された「トランスフォーム」コンセプトは技術的ブレイクスルーになったものの、当初に想定されていた「全地球到達任務」モビルスーツを実現させるためには、さらにもう一つの技術的ブレイクスルーである「ムーバブルフレーム(可動式内部骨格)」コンセプトが必要であった。▶▶

EARTH FEDERATION SPACE FORCE
RX-178 GUNDAM Mk-II



外骨格から内部骨格へ

7; From exoskeleton to endoskeleton

ジオン公国がモビルスーツを開発して以来、モビルスーツはモノコック構造(外骨格構造)で設計されており、外部の装甲そのものが骨格として機体を支える構造をとっていた。骨格となる装甲そのものの強度で機体を支えることができ、安価に大型モビルスーツを生産できる反面、骨格を外部側にとることで各関節可動部の可動範囲や強度に制約が生まれるというデメリットも同時に内包していた。

この問題を解消すべく提案されたのが「ムーバブル・フレーム(可動式内部骨格)」コンセプトである。これは機体を支えることと各関節部の可動を請け負う内部骨格(フレーム)と、単に装甲として機能する外部装甲から機体を構成するというもので、装甲による支持なしに機体を支えるフレーム構造を提案するものだ。

簡単に言えば、従来の"四角い箱を関節でつないだ"機体構造ではなく、原則として人型をした骨格に板状の装甲を"着せる"という機体構造である。

初めて「ムーバブル・フレーム」コンセプトを全面的に導入して具現化された機体は、ティターンズ影響下にあるサイド7のグリプス開発基地で開発されたRX-178ガンダムMk-IIである。当時、ムーバブル・フレームは最高機密に属する技術であり、U.C.0087年3月2日、サイド7の「グリーン・ノア1」で運用試験中の同機の3号機が、後にエゥーゴのパイロットとなるカミーユ・ビダンによって強奪されるという「グリプス戦役」本格化の発端となった事件までは、まさにティターンズの独占技術とも言えるものであった。

U.C.0083年よりティターンズにおいて制式採用され、使用されたRGM-79Qジム・クゥエルの一部(比較的加重の負担が少ない脚部構造)にムーバブル・フレームに相通じる機構が採用されていることから、コンセプト自体はそれ以前から存在していたと思われるが時期は定かではない。同機はルナツー工廠でティターンズが独自に開発したものであるため、「ムーバブル・フレーム」コンセプトはティターンズに協力的ないずれかの連邦軍工廠、もしくはニュータイプ研究所において提示されたものと推測されるが、一説には後に民間企業であるアナハイム・エレクトロニクス社に招かれた、連邦軍モビルスーツ開発局のMナガノ博士が提示したものとも言われている。

Earth Federation Forces RX-178 GUNDAM Mk-II

所属:ティターンズ→エゥーゴ　建造:地球連邦軍グリプス開発基地
全高:19.6メートル(64.3フィート)　頭頂高:18.5メートル(60.7フィート)
本体重量:33.4トン(73600ポンド)　全備重量:54.1トン(119300ポンド)
ジェネレーター出力:1930キロワット
スラスター総推力:81200キログラム(179000ポンド)
センサー有効半径:11300メートル(7.0マイル)
装甲材質:チタン合金セラミック複合材
武装:ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、頭部バルカンポッド、
ハイパー・バズーカ、シールド(ランチャー装備可能)

ムーバブルフレームをはじめて本格的に採用した機体
ティターンズによって開発されたがエゥーゴに奪取される

U.C.0087

Anaheim Electronics MSN-00100 TYPE-100

所属:エゥーゴ　製造:アナハイム・エレクトロニクス社
全高:21.4メートル(70.2フィート)　アンテナ高:19.2メートル(63.0フィート)
頭頂高:18.5メートル(60.7フィート)
本体重量:31.5トン(69400ポンド)　全備重量:54.5トン(120200ポンド)
ジェネレーター出力:1850キロワット
スラスター総推力:74800キログラム(164900ポンド)
センサー有効半径:11200メートル(6.96マイル)
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、60ミリバルカン砲×2、
クレイ・バズーカ、メガ・バズーカ・ランチャー

可変モビルスーツ開発プロジェクトで誕生した非変形機
パイロットはクワトロ・バジーナ大尉

U.C.0087

1＝アーガマ艦内の百式。／2＝特徴的な金色の外装。／3＝百式が率いる編隊飛行するモビルスーツ小隊。2と3の写真はおそらくエゥーゴの宣伝活動用に撮影されたと思われる。写真＝エゥーゴ

この「ムーバブル・フレーム＝Mナガノ博士提唱説」にはもう一つ異説があり、連邦軍モビルスーツ開発局にナガノ博士が在籍中、ナガノ博士以下5人の研究者をメンバーとする『ペンタゴナ』と称した私的かつ自主的なモビルスーツ技術研究／懇親会の中で議論／研究されていたコンセプトであったというものだ。当初は私的に共同研究されていたコンセプトであったため、『ペンタゴナ』のメンバーの人事異動や退官に伴い、連邦軍各工廠やニュータイプ研究所、アナハイム・エレクトロニクス社のような民間企業に同時期に「ムーバブル・フレーム」コンセプトが伝播したとも言われているが、定かではない。

しかしながらこの説に従えば、はなはだ不完全な形ではあるがティターンズ以外の組織も「ムーバブル・フレーム」コンセプトの情報をほぼ同時期に入手していた可能性があると考えることができる。カミーユ・ビダンによるガンダムMk-II強奪以前からアナハイム・エレクトロニクス社が独自にムーバブル・フレームの研究開発を行っていたと仮定するならば、「グリプス戦役」拡大後のかなり早い時期には同社の2機の試作可変モビルスーツ（後のMSN-00100百式およびMSA-005メタス）が完成し、実戦参加していたことも納得がいく（この2機はUC 0086年には開発がスタートしていたとも言われている）。

「ムーバブル・フレームは〝誰〟が〝いつ〟？」というのはモビルスーツの技術史上、興味が尽きない話題だが、本稿の主旨ではないので先を急ごう。

さて「可変モビルスーツ」、ひいては「全地球到達任務」モビルスーツを開発するにあたってのムーバブル・フレーム採用のメリットは、各関節可動部や機体そのものの屈曲／伸縮性の自由度の高さにある。つまり従来のモノコック構造では考えられなかった、機体の大胆な「折り曲げ」や「スライド」といったギミックを自然な形で盛り込むことができるということだ。つまりムーバブル・フレームを採用すれば、より容易に、さして機体を大型化せずに可変モビルスーツを実現できるというわけである。

「ムーバブル・フレーム」と「トランスフォーム」という2つの要件が出揃ったことにより、「全地球到達任務」モビルスーツ実現への道は一気に開けて行く。

「全地球到達任務」モビルスーツの実現

8; Completion of the mobile-suit enable to perform "Reaching the all land on the globe" project

UC0085年に登場したアッシマーにより、「全地球到達任務」モビルスーツを実現させるためのカギが、いわゆる航空機様の巡航形態から人型様のモビルスーツ形態への「トランスフォーム」にあることは、多くのモビルスーツ開発者の共通認識となったことは疑いもない。その「トランスフォーム」をスムーズに実現させると同時に機体を(アッシマーに比して)小型化するための一つの"解"として「ムーバブル・フレーム」を手に入れたことから、連邦軍各工廠やニュータイプ研究所、民間企業に再び「全地球到達任務」モビルスーツの開発熱が巻き起こった。

また「トランスフォーム」というコンセプトは、機体各部のスラスターの方向を集中するよう変形させることで高速移動を実現させることができ、機体各ユニットを集中させることで慣性モーメントの低減と剛性の向上を実現させて高い運動性能を発揮させることが可能となるため、モビルスーツの汎用性と「一年戦争」時にジオン公国軍が使用したモビルアーマーの機動性とを併せ持った新たな兵器体系の創造が可能であることからもてはやされ、「全地球到達任務」以外の目的(大気圏内でのサブ・フライト・システムによらない飛行や宇宙空間での航続距離拡大など)に供する可変モビルスーツ(TMS)も数多く開発された。アッシマーが登場したUC0085年から「グリプス戦役」いっぱいは、まさに"可変モビルスーツの時代"と呼んでも過言ではないだろう。

可変モビルスーツもまた興味深いテーマではあるが、本稿のテーマはゼータ・ガンダムの開発経緯の"あり得べき推論"であるため、宇宙戦闘を主眼とする可変モビルスーツ/モビルアーマーへの言及は留保したい。

さて「トランスフォーム」と「ムーバブル・フレーム」コンセプトの双方を導入して作られた「全地球到達任務」モビルスーツの一番手と言えるのが、連邦軍ティターンズ系のニュータイプ研究所のひとつ、オークランド研究所(一説にはオーガスタ研究所)によって開発されたORX-005ギャプランである。ギャプランはモビルアーマー形態にブースターを装備して大気圏を離脱、弾道軌道で目的地上空へ到達し、再突入後、大気圏内ではサブ・フライト・システムに依存せず飛行が可能であるモビルアーマー形態で上空より敵戦力を攻撃、さらにモビルスーツ形態に変形して地上において残敵を掃討するという運用を想定していたと思われる。

しかしながらギャプランの大気圏内飛行用のモビルアーマー形態を見ればわかるように、本機の場合は"飛行"と言っても主に推力に依存する形態であること(「充分な推力さえあれば、どんな形のものでも飛ばせる」という、いにしえの技術者の言葉が想起される)と、両腕部に装備した可動式スラスターの急激な推力偏向によって戦闘機動を行うといういささか乱暴なシステムのおかげで加速Gが強力になってしまい、通常の人間には到底乗りこなせる代物ではなかったと言われる。事実、推力/重量比は公式発表によれば1.94と、とりあえず空力的な"飛行"ができるゼータ・ガンダムの1.83を上回る。そのため本機のパイロットには、ある種の薬物投与やマインドコントロールによって潜在能力を極限まで引き出された特殊な者が選ばれた(ひどい表現になると「作られた」)と言われているが、現在にいたるまで、そのような怪物のような兵士の存在は少なくとも連邦政府ならびに連邦軍からは公式に確認されていない。

たしかに「グリプス戦役」前期に本機を操縦したパイロットは不明であるが、少なくとも後期に本機に搭乗したのはパイロットとしては一般的な技量を持つ者であったことから、機体に何らかの改善措置が取られた後期生産型が存在したのか、本機の運用に際して制限が課せられたのであろう。本機をめぐる"特殊なパイロットの専用機"とか"ニュータイプ専用機"という説は、現在では前期生産型(?)のあまりにもジャジャ馬的な性格を誇張した風説であろうと考えられる。

初めて「全地球到達任務」モビルスーツを手に入れた連邦軍だったが(結果的には連邦軍によって開発された"唯一の"ということになったが)、「グリプス戦役」を通して一度も「全地球到達任務」に使用されたことはなく、地球上においてはもっぱら超高高度迎撃任務に使用され、またブースター装備による単機での大気圏離脱能力を買われ、宇宙空間戦闘に対する緊急的な戦力補強に用いられたに留まったのは残念なことであろう。

1=アナハイム エレクトロニクス社とエゥーゴの協力で完成したリノク・ディアス エゥーゴのモビルスーツの基本になった機体 写真=エゥーゴ

民間企業の挑戦

9; Challenge of the private companies

ギャプラン同様に、「トランスフォーム」と「ムーバブル・フレーム」のコンセプトを導入した「全地球到達任務」モビルスーツとして開発が始められたモビルスーツが、ご存知のMSZ-006 ゼータ・ガンダムである。

この機体は「エゥーゴとアナハイム・エレクトロニクス社共同による次世代超高性能モビルスーツ開発計画」プロジェクト・ゼータ」で開発された、いわゆるアナハイム・ガンダムのひとつ」として知られているが、現在にいたるまで「プロジェクト・ゼータ」そのものがはっきりとわかっておらず、異説も数多い。

ただし「ゼータ・ガンダムを開発すること」が目的であったことから、ゼータ・ガンダムに導入された「トランスフォーム」と「ムーバブル・フレーム」という2つの主要コンセプトと「ウェイブライダー」形態、カラバによって使用された形跡のあるブースター装備といった要件を見る限り、「全地球到達任務」モビルスーツ開発計画と無縁であったとは考えにくい。

むしろ、もともとはUC0085年あたりから連邦軍からの受注がまったくなくなってしまった(その理由は現在まで不明だが、新型ガンダム開発計画に伴う大事件が起こったという説がある。)アナハイム・エレクトロニクス社による、連邦軍からの受注回復のための起死回生の「全地球到達任務」モビルスーツ開発計画だったと考えた方が自然に思える。従って、本稿ではこの説に則って進めることにする。

1＝可変モビルスーツ「メタス」。実機機でありながら量産が実戦投入されている。／2＝パーツ回収中の大破したメタス。この機体、運搬で女性パイロット「レコア・ロント少尉」の戦死が伝えられた。／3＝量産機は比較的容易と言われ、女性新人パイロットが搭乗することが多かった（女性パイロットの活躍はエゥーゴのプロパガンダでもある）。写真＝エゥーゴ

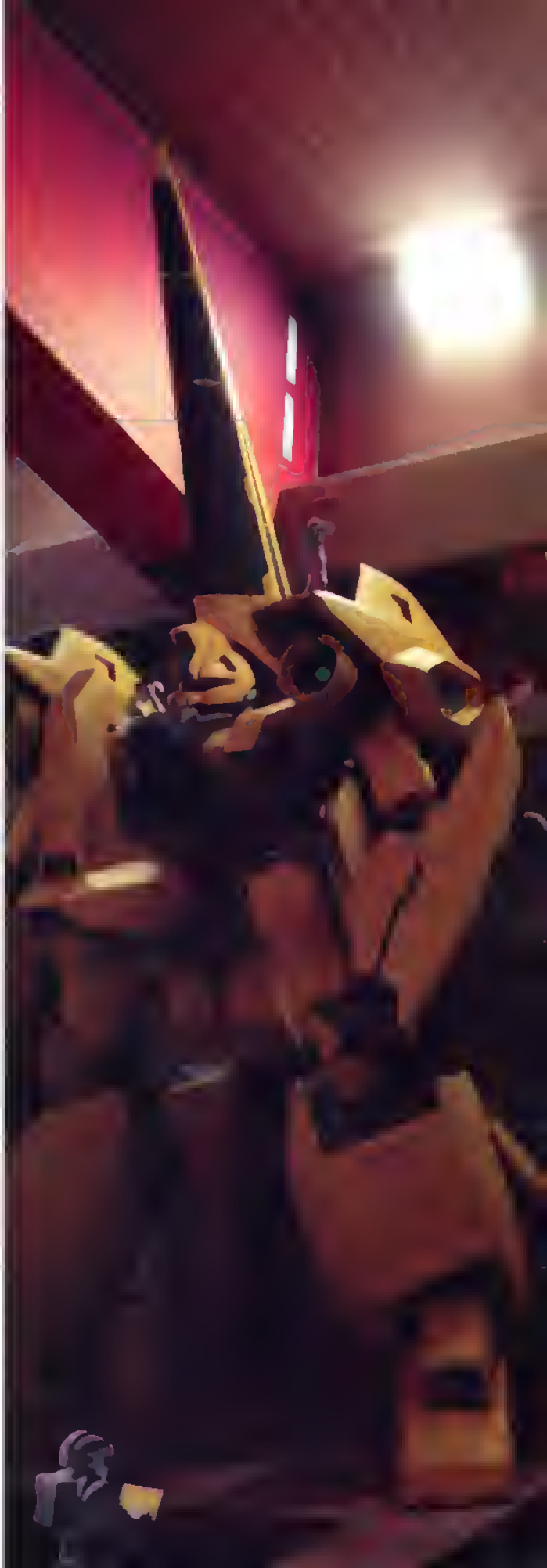
UC 0086年、すでにアナハイム・エレクトロニクス社と協力関係にあり、MSA-099（対連邦欺瞞用型式番号RMS-099）リック・ディアスを完成直前にこぎつけていた反地球連邦組織エゥーゴは、「全地球到達任務」モビルスーツのアッシマー（実際にはそうではなかったが ・・・）の登場に衝撃を受け、これに対抗するべく、宇宙／地球を問わず全領域で運用可能で、オプション装備なしに大気圏再突入が可能なモビルスーツの開発を求めた。

地球上に拠点を持たないエゥーゴにとっては、地上施設等の制圧作戦は宇宙空間からの直接侵攻以外にあり得なかったわけだが、「地球上のどこにでも短時間で緊急展開でき、即時反撃が可能なモビルスーツ＝全地球到達任務モビルスーツ」という存在は、まさに頭痛の種以外の何ものでもなかったのである。「どこにでも緊急展開可能なモビルスーツ」に対して「どこにでも襲撃可能なモビルスーツ」で対抗するのは自明の理であった。

この要求に対しアナハイム・エレクトロニクス社が用意した回答が後のゼータ・ガンダムとなるプランであり、これこそが同社が独自で研究していた「全地球到達任務」モビルスーツ計画だったようだ。

有り体に言えば、ゼータ・ガンダムはアナハイム・エレクトロニクス社が独自に研究していた「ムーバブル・フレーム」コンセプトと、アッシマーからインスパイアされた「トランスフォーム」コンセプトを軸とした可変モビルスーツである。それは本機に先んじて完成した、現在では本機の試作機と位置づけられているMSN-00100百式やMSA-005メタスから明らかであろう。ただし、「ムーバブル・フレーム」コンセプトを独自に確立するには多くの困難があった模様で、メタスの場合は非常に簡易型の可変フレームとなっており、実験機としての性格が強いようだ（結果論だが、メタスの場合の可変機構は宇宙艦などへ搭載する際のスペース効率を上げるために役立っていると言える）。また百式の場合はムーバブル・フレームの耐久性に問題があり、可変モビルスーツとしての開発は断念されたと伝えられている。

ゼータ・ガンダムは、開発そのものはギャプランとほぼ同時期に発動されたと見られるが、人型モビルスーツ以外の「もう一つの形態（巡航形態）」が、いわゆるモビルアーマー形態ではなく、高い揚抗比（L／D）を持つスペースプレーン形態であったことが革新だった。この形態は機体に採用された設計理論とデザインから「ウェイブライダー」と呼ばれるが、大気ブレーキ航法と同様に大気上層を飛行することにより、そのブレーキ効果ばかりでなく、揚力によっても自在に軌道の傾きを変えることができる。また、地球軌道から大気圏突入した場合、制動噴射以後、大気による速度／方向制御によって、地球表面の過半を占める範囲の低高度空間に到達できるのである。つまり、軌道上では燃料消費の高さゆえに不可能な大角度で軌道の傾きを変えることができ、一旦、大気中に進入したら、地球上のどんな地点に対しても攻撃が可能であるということなのだ。無論、どこに攻撃をかけてくるか予想することは不可能なので、奇襲攻撃の効果は高くなる。この能力はエゥーゴの要求に完全に合致するものだった。また、もともとはブースターを装着して大気圏を離脱させることを考えていた機体であったため、特にエゥーゴからの要求はなかったものの、独自に地上から宇宙への帰還が果たせる点も評価されたようだ。



Anaheim Electronics MSA-005 METHUSS

所属：エゥーゴ　生産：アナハイム・エレクトロニクス社
モビルスーツ形態
全高：26.0メートル（85.3フィート）　頭頂高：18.1メートル（59.4フィート）
モビルアーマー形態
全高：6.2メートル（20.3フィート）　全長：21.8メートル（71.5フィート）
本体重量：27.8トン（61300ポンド）　全備重量：52.4トン（115500ポンド）
ジェネレーター出力：1640キロワット
スラスター総推力：77000キログラム（169800ポンド）
センサー有効半径：11300メートル（7.0マイル）
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：アーム・ビームガン×2、ビーム・サーベル×6

可変モビルスーツ開発プロジェクトで誕生したテスト機
エゥーゴ開発アーガマに配備された

U.C.0087

1ニアーガマのモビルスーツ部隊による大気圏突入戦(ジャブロー攻撃)の準備風景。カミーユ・ビダンが搭乗するガンダムMk-IIと同様装備のフライングアーマーの調整をしていると思われる。写真=エゥーゴ

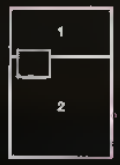
しかしながら記述のようにアナハイム・エレクトロニクス社自前のコンセプトによるムーバブル・フレームでは限界があり、完成を見るには、カミーユ・ビダンが引き起こした「ガンダムMk-II強奪事件」によってティターンズのムーバブル・フレーム技術を入手するまで待たねばならなかった。RX-178 ガンダムMk-IIに採用されていたムーバブル・フレームは非常に優秀な設計で、フィールドモーター駆動を効率的に使用しており、可変モビルスーツ開発に要求される機能を充分に備えたものだったのである。また当時としては他とは比較にならないほど高い構造強度を有していたのも特筆すべき点である。

このガンダムMk-IIのムーバブル・フレーム構造を真っ先に研究できたのは他ならぬカミーユ・ビダンその人であり、ガンダムMk-IIのアナハイム・エレクトロニクス社到着とほぼ同時にカミーユ・ビダンより寄せられていた「可変モビルスーツ製作に対するアドバイス」を参考に、ゼータ・ガンダムの開発は急速に進展していったと伝えられている。その間、エゥーゴによる地球進攻作戦(ジャブロー降下作戦)において、カミーユ・ビダン自身によるフライングアーマーを用いた「ウェイブライダー」形態の検証なども行われており、本機の開発に対する氏の貢献は計り知れないものがある。後に本機のパイロットとなったのも、氏の"専用モビルスーツ"と言われるようになったのも頷ける話だ。

正確な日付は不明だが、ゼータ・ガンダムはU.C.0087年6月ごろには完成し、月近傍宙域で1ヶ月ほど極秘に実用評価試験を行った後に実戦投入された。本機の運用母体が宇宙を拠点とするエゥーゴという組織であったこと、本機が実戦投入された時点ではすでにエゥーゴとカラバは協力関係にあったことなどから、ブースターを装備して大気圏離脱を行うミッションの必要がなく、ブースターの製造は後回しにされたために、ギャプラン同様に本機もまた本来の「全地球到達任務」に投入されることはなかった。しかしながらカラバによってテストされていた機体(!)がブースターを装備して何らかのミッションに使用された形跡があるという報告もあり、今後の資料発表と情報解禁を待ちたいところだ。

その後のゼータ・ガンダムの「グリプス戦役」における活躍は、すでにみなさんもご存知であろう。ゼータ・ガンダムは、高い強度を有するムーバブル・フレームにより機体構造そのものを変化させることで、宇宙空間から大気圏内、地上にいたるまでの連続運用が可能であり、複数のミッションに迅速に対応できる柔軟性を持ち、装甲にはガンダリウムα(アルファ)以上の耐久力を誇るガンダリウムγ(ガンマ)を使用、背部に装備されたAMBACシステムとスラスターとしての機能を併せ持つロングテールバーニアスタビライザーによって大気圏内外で優れた運動性能を発揮、豊富なオプション装備により広範な戦局に柔軟に対応するという、まさに"夢"のモビルスーツであった。

本来の目的——全地球到達任務——にこそ使用されなかったとは言え、U.C.0080年代初頭に始まるその無謀な要求に敢然と回答したその輝きは、現存も依然として色あせてはいないのである。



1、2＝月面で慣熟飛行中と思われるゼータ・ガンダム。極秘試験を終えたゼータ・ガンダムはアーガマに収容される。写真＝エゥーゴ

Anaheim Electronics MSZ-006 ZETA GUNDAM

所属：エゥーゴ　生産：アナハイム・エレクトロニクス社
モビルスーツ形態
全高：19.85メートル（65.12フィート）　垂頂高：18.7メートル（61.4フィート）
ウェイブライダー形態
全長：24.32メートル（79.79フィート）　全幅：18.61メートル（61.05フィート）
本体重量：28.7トン（63300ポンド）　全備重量：62.3トン（137300ポンド）
ジェネレーター出力：2020キロワット
スラスター総推力：112600キログラム（248200ポンド）
センサー有効半径：14000メートル（8.7マイル）
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル×2、60ミリバルカン砲×2、ビーム・ライフル、
2連装グレネード・ランチャー×2、シールド、ハイパー・メガ・ランチャー

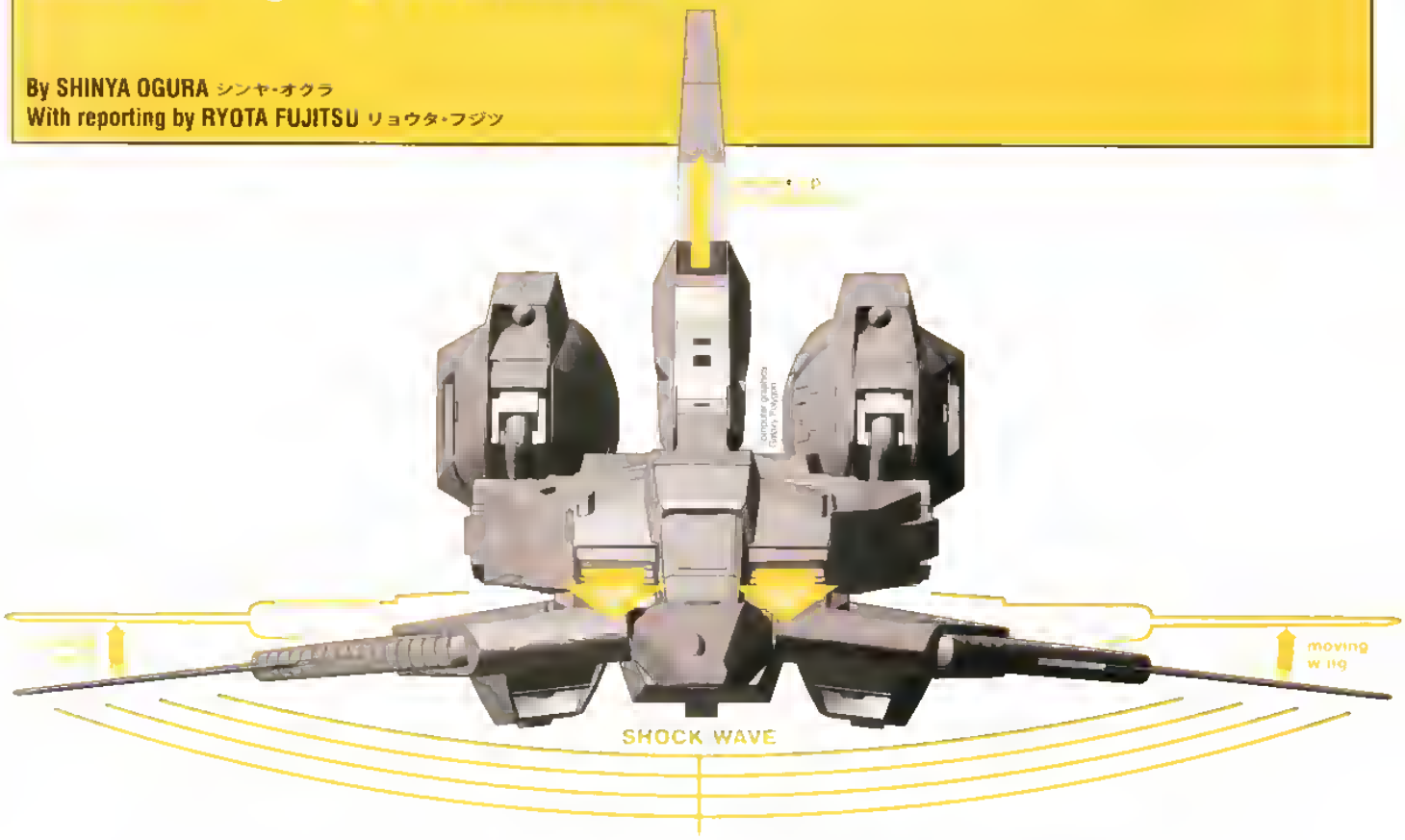
可変モビルスーツ開発プロジェクトの完成形
宇宙空間から重力下までの連続運用を可能とする機体

U.C.0087

1＝衛星軌道上のアーガマ。カタパルトデッキには発進待機中の百式が見える。／2＝アーガマ上部。／3＝発進直前のゼータ・ガンダム。これらの写真はエゥーゴの宣伝活動用に撮影されたものと思われる。写真＝エゥーゴ

Ballistic flight of WAVERIDER

By SHINYA OGURA シンヤ・オグラ
With reporting by RYOTA FUJITSU リョウタ・フジツ



ウェイブライダーの運用に関する誤解と正式な運用方法について

MSZ-006 ゼータ・ガンダムの最大の特徴は何か。それはモビル・スーツ単体での大気圏突入能力を有する点にある。もちろんこの特殊な機能は、実際の戦場では有効に使われたとは言い難い。たかゼータ・ガンダムが、時を経て「不遇の名機」との評価を得るに至った背景には、この大気圏突入能力とそれを実現するだけの高度なスペックを有していたことに理由があるのは間違いない。

しかしながら、本稿ではその大気圏突入能力について、ひとつ大きな疑問を呈したいと思う。それは、ゼータ・ガンダムの大気圏突入方法が間違っていたという可能性である。

ゼータ・ガンダムの大気圏突入の事例について、公式に記録されているのは次の二例である。一例目は、UC 0087年11月、軌道上より降下、カラバとともにキリマンジャロの連邦軍基地攻撃に参加している。この突入時には、背面にMSN-00100 百式を乗せていたという。二例目は、UC 0088年8月、戦闘中に落下を始めた敵機キュベレイを救うため、前例と同様、AMX-004-2 キュベレイを背面に乗せ、大気圏突入を行っている。この二例に共通するのは、背面にモビル・スーツという重機物を乗せているという点だ。この時、機首はやや下向きの姿勢をとり、いわゆる鈍体突入の姿勢をとっていたと考えられる。具体的な映像資料は残っていないが、関係者などによる各種の記録を参照すると、そう考えるのが妥当であり、これが現在でも広く通説となっている。

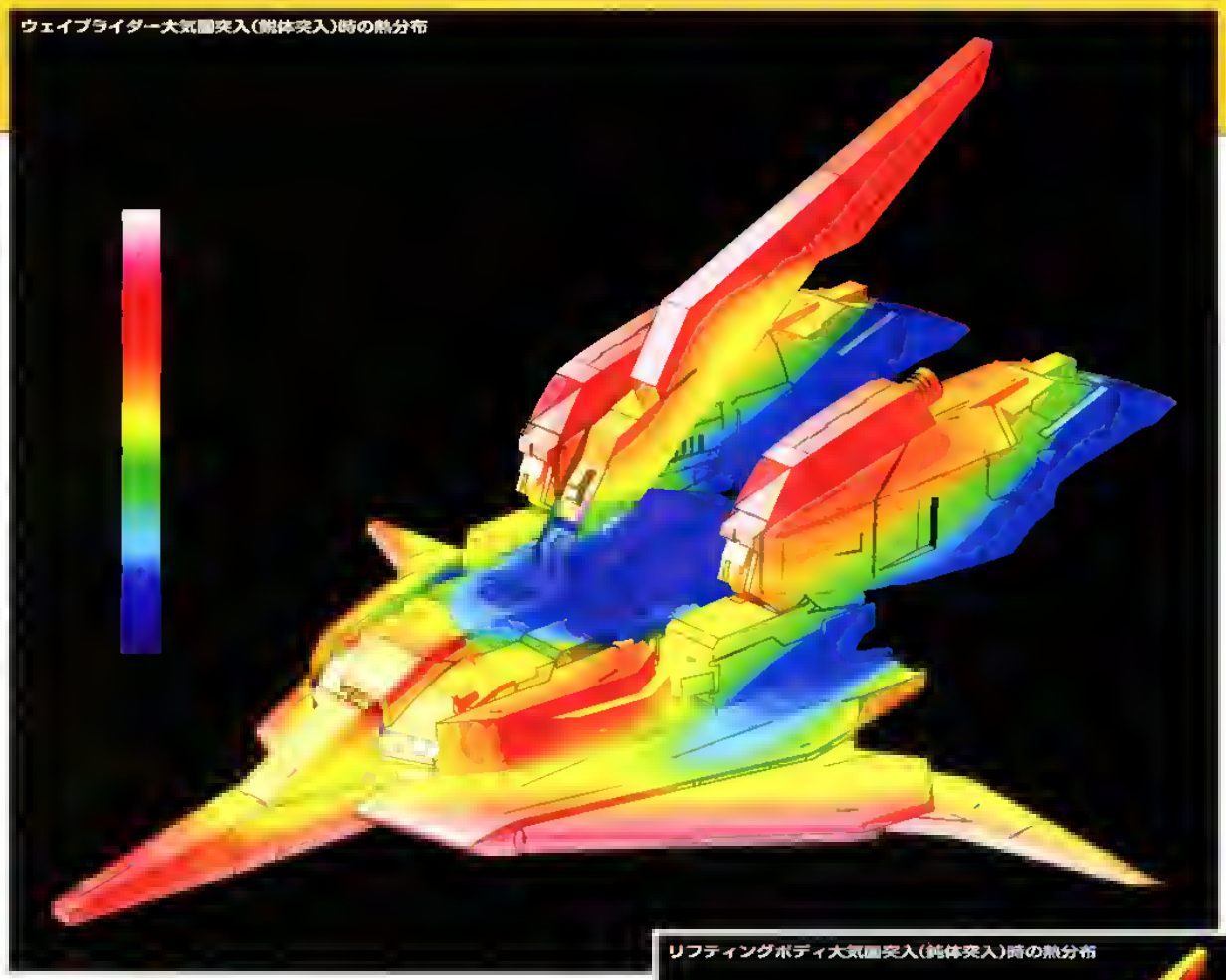
この突入姿勢は、ガンダムMk-IIがシャプロー攻略作戦に参加した時に使用したフライング・アーマーの突入姿勢とほぼ同様である。そもそも、フライング・アーマーがゼータ・ガンダム開発の過程でスピンオフされたものである以上、運用面での相似は当然と考えることもできないわけではない。ただし後述するように、それこそがゼータ・ガンダムの誤った運用につながったと私は考える。ともあれ、以上のようなことから、ゼータ・ガンダムの大気圏突入形態は、機体全体で空気を受け止め滑空するリフティングボディで、それによる鈍体突入が行われていたと広く考えられてきた。

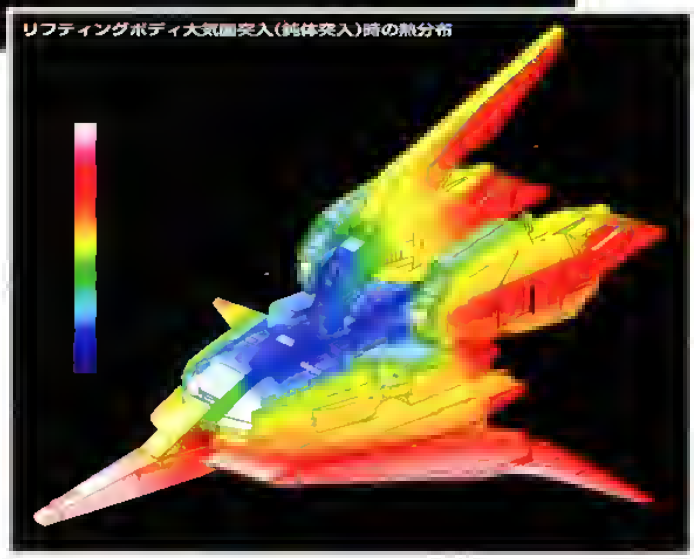
だが、ここに大きな陥穽があると私は考える。あまりにも明白すぎて見落とされがちだが、ゼータ・ガンダムの大気圏突入形態は、そもそもウェイブライダーと呼ばれているのである。

この命名は、極超音速（おもにマッハ5～8くらい）で飛行する際に衝撃波（ショックウェーブ）に乗る（ライドする）極超音速航空機の形態カテゴリーにちなんでつけられた。ウェイブライダーは、機体下面に衝撃波（ショックウェーブ）が集中して発生するように設計し、圧力を高めることで圧縮波である衝撃波の上に乗る。下面の圧力が高ければ対する上面の気圧は低く、結果生じる揚力で飛行する。旧世紀のNACA（NASAの前身）の非公開論文、『圧縮揚力理論』の産物である。

対してリフティングボディは機体自体が揚力を発生させるため、亜宇宙領域におけるほぼ軌道速度での大気圏再突入時において、空力特性に優れる。リフティングボディが大気との摩擦抵抗を利用し減速する際、機体特性から揚力が

Ballistic flight of WAVERIDER





発生し、地表への降下をさらに緩やかなものにする。衝撃波はその過程で付帯しているにすぎない。一見似たモノのようだが、両者は全く発想が異なるものなのだ。

つまりゼータ・ガンダムは、『ウェイブライダー』形態を何故か『リフティングボディ』として運用していた　　ということになる。これが私の指摘したい運用面での「誤り」である。

では、本来アナハイム・エレクトロニクス社の開発陣が当初考えていたウェイブライダーとしての突入方法とはどのようなものだろうか。現在知られている各種の機体情報から推察してみよう。

まず突入姿勢。機首を上げた鈍体突入ではなく機首を進行方向に定めた鋭体突入である。この時の突入速度はマッハ20(ほぼ衛星軌道速度)。衝撃波は、機首の先端から29度という鋭い円錐形を描いて発生する。機体翼面が下反角により倒立V字形に挟れた底面を形成している。これはこの翼面でショックウェーブを押さえ込むようにして捉えるためだ。ここにウェイブライダーのウェイブライダーたる所以がある。スタビライザーは、ショックコーンの円錐を飛び出さないよう、収納された脚部と並ぶほどの高さにまで起きあがり、その中で機体制御の重要な役割を果たすことになる。

また重要な役割を果たすのが、コクピット両脇に位置する胸部スラスターだ。高熱などからコクピットを守るため、突入時にはこのスラスターから推進剤が噴射される。周囲は超高温(約2000℃)でプラズマ化した大気であるから、通常の温度(約700℃)の推進剤ガスでも十分に冷却剤として機能するのである。これは冷却ガスによる耐熱フィールド形成、つまりRX-78ガンダムで採用された技術の応用である。

また私見ながら補足するとこの耐熱フィールド形成には、小規模なIフィールドによるプラズマ誘導境界層流制御技術が使われていた可能性があると思われる(正確な記録は残されていないが、一年戦争当時、ペガサス級強襲揚陸艦『ホワイトベース』が大気圏突入時にこの「Iフィールドによる▶▶

Ballistic flight of WAVERIDER

プラズマ誘導制御」で擬似突入障壁を形成したと言われている。大型艦でのこのシステムをモビルスーツサイズの規模で実用実験をしていたのではないだろうか？)。Iフィールドにより、プラズマ化した大気を切り裂くように誘導、出力的にわずかではあるが機首よりある程度の範囲を保護していたのだろう。

従来のリフティングボディでは、高温のプラズマに晒されるのは主に機体下面に集中していたが、鋭体突入した場合は、脚部背面などもかなりの高温に晒されることになる。シミュレーション画面を前ページに掲載したが、脚部の温度の違いに注目してもらいたい。

そもそもゼータ・ガンダムは、軌道上から大気圏へ戦術機動突入、高速で地表まで降下し拠点攻略を行う目的で開発された機体であると推察されている。核弾頭のMRV(再突入体)を例にあげるまでもなく、極超音速での突撃に迎撃側はほぼ無力とも言えるし、転じてモビルスーツ形態で制圧戦を行えれば後続する降下部隊を有利に導ける。まさに特殊部隊による奇襲攻撃そのものである。そのような目的であれば、穏やかに速度を殺しながら突入する鈍体突入ではなく、鋭体突入であるのは当然だろう。

ではどうして、このような誤った突入方法でゼータ・ガンダムは運用されることになったのか。

その一因は有翼突入装甲、フライングアーマーにある。先述の通りフライングアーマーは、ウェイブライダー形態からのスピンオフとして開発され、外観上翼面の構成などは確かに似通っている。だが、最大の違いは、ゼータ・ガンダム機首近辺にある冷却システムを装備していない点である。また、フライングアーマーが使用されたジャブロー降下作戦は、バリュートシステムで降下する他のモビルスーツと歩調を合わせて降下する必要がある作戦であった。以上のような理由で、フライングアーマーは、鈍体突入せざるを得なかったのである。おそらくフライングアーマーに関しては、アナハイム・エレクトロニクス社の開発者もそのような使用方法を想定していたはずだ。

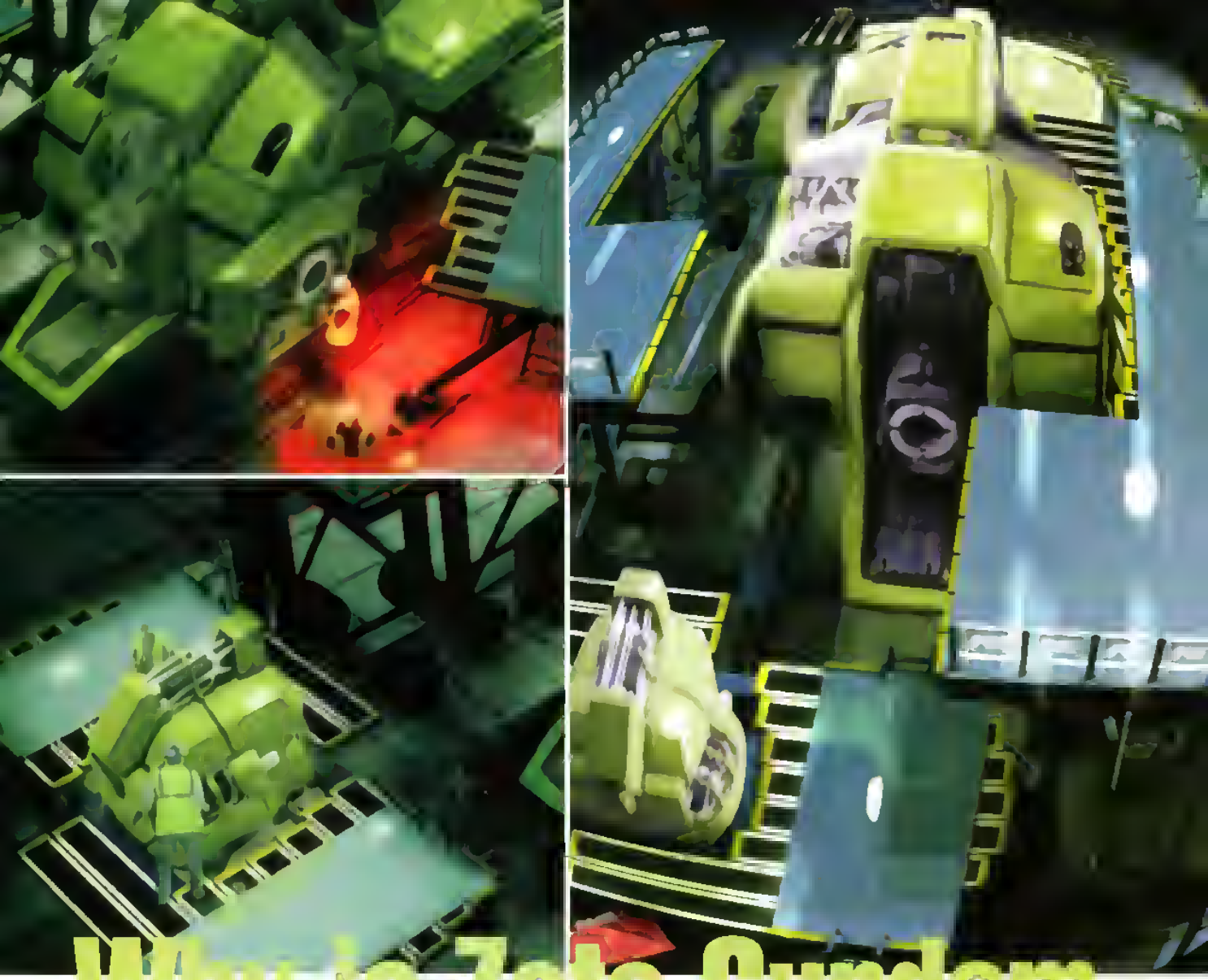
これがおそらくパイロットに誤解を生むことになったのだろう。形状が似ているゼータ・ガンダムのウェイブライダーもまた、リフティングボディとして運用すればいいのだと考えてしまったのだ。パイロットはフライングアーマーの時もゼータ・ガンダムの時も同じ、エゥーゴの少年兵カミーユ・ビダンである。

このあたりには内戦下にあり、正式な使用方法を具体的にアナハイム・エレクトロニクス社側からレクチャーする間もなく、ゼータ・ガンダムが戦場に投入されていた、という事情もあるだろう。いわば現場対応の一つとして、大気圏突入方法も"発見"されたわけである。また言うまでもないことだが、ゼータ・ガンダムのウェイブライダー形態が、結果としてリフティングボディとしても運用可能な設計になっていたということも大きかった。

さらに個別の事情もある。二回の突入のどちらもが、モビルスーツを乗せての突入であり、鋭体突入をやりたくてもやれる状況ではなかった。乗せた機体の安全を考えれば、鈍体突入をするのが正解であったと言えるだろう。逆に言えば、フライングアーマーによる突入経験によって生まれた誤解が、ゼータ・ガンダムによるモビルスーツを乗せての突入を成功させたとも言える。これについては、僥倖としか言いようがない。

その後現在に至るまで、ゼータ系モビルスーツを除くと、ウェイブライダーへと変形するモビルスーツはほとんど試みられていない。一度も正式に運用されることのなかったウェイブライダーは、それ故に、時代のあだ花として消えていったのだ。

シンヤ・オグラ　ＵＣ0065年6月25日生まれ。リーア在住。航空宇宙工学研究者、地球連邦総合大学リーア分校 天文物理学特別講師。タキム重工 木星開発部門にて、惑星間宇宙船の設計・建造に携わる。U.C 0101年に独立。同年の『U.C.0087客船プロスペロー墜落事故』の検証ドキュメンタリーで解説者として注目され、以来特に『宇宙機としてのモビルスーツの機動』『モビルスーツ・大型宇宙艦による大気圏再突入』の研究発表で知られている。直近の研究はモビルスーツ戦闘中の特殊現象を扱ったものが多く、『サイコフレーム・サイコミュによる多元量子通信と零点エネルギーの解放』などがある。



Why is Zeta Gundam

By RYUSUKE HIKAWA リュースケ・ヒカワ

ここに示すのは、ゼータ・ガンダム頭部装着の瞬間をとらえた貴重な一枚の写真である。開発過程において数次にわたり行われた塗装前の仮組み確認工程のひとつだ。ひと目で「これは珍しい写真だ！」と看破できる人間は、まれに違いない。この写真は完成品のゼータ・ガンダムとはあまりにも印象を異にしている。胸部や肩部の外形特徴に着目すれば、真贋に疑いは不要だが、なぜここまで違う印象があるのか？

そこにゼータ・ガンダムが歴代ガンダム中で占める独特のポシションの秘密を解くカギが存在するように思える。

まず、ゼータ最大の特徴とは、ガンダムとして初めて備えられた大規模な「変形機構」である。パーツ状態に還元された状態で見ると、複雑な変形機構と引き替えに装甲が抱えた一種のデリケートさが顕著になる。初代RX-78ガンダムは、耐被弾性能において神秘的なまでの強靭さを保ちながら激戦を勝ち抜いたと伝えられる。ところが、この写真が示すゼータのスリムさは、そうした厚みとは正反対のものだ。むしろ18メートル(60フィート)級の巨人にしてセンチ、ミリ単位の精度を要する繊細さ、言い換えれば脆弱性が随所に感じられる。

ゼータ・ガンダムと言えば今では「迎撃」のイメージが強いが、開発時点で求められた特質とは「強襲」だったと、そこから推察がつく。アクロバティックにフォルムを変化させ、高速で敵警戒網を突破し、一撃離脱を行う兵器である。しかし、それは圧倒的なパワーで制圧を行い、最強の敵を排除する「ガンダムの系譜」からは外れている。

それを念頭において写真をさらに観察すると、大きな違和感として頭部の印象が気になる。この時点ではV字アンテナが装着されていないのだ。頭部もきわめて面長な印象を与えるし、マスク部にも横スリットの切れ込みがない。ゼータ・ガンダムがMSN-00100百式と酷似していることは20年前から指摘されているが、この写真も何者かの作為によってアンテナが後から装着された可能性を示唆する。

すべての状況から導かれるのは、「ゼータとは、ガンダム

painted in tricolor?

ゼータ・ガンダムはなぜトリコロールに塗られたのか？

として開発された機体ではなく、何らかの理由によって途中から"ガンダムを名乗らされた"のではないか、という仮説である。となると、着目すべきは「運用」である。ここで機体について、やがて塗装される「色彩」という要素を補助線に使って論考を深めてみよう。ゼータはガンダムの特徴であるトリコロール（青・白・赤）にペイントされ、エゥーゴの主力機として活躍した。

ここで不可解な前例が浮上する。ティターンズの開発したRX-178ガンダムMk-II。周知のように、連邦内勢力としての正義を示すため、RX-78を連想させるデザインが採用された機体だ。ところが、こと色彩に関してはティターンズの制圧下の象徴・群青色が採用され、ガンダムの印象を損なっている。むしろエゥーゴが捕獲し運用を開始して以後の白を基調としたMk-IIのほうが、ガンダムを連想させる。

エゥーゴがMk-IIを使わざるを得なかったのは戦力不足が理由だが、リペイントを強行したのはティターンズと同じく正義の旗印のためなのだ。ポイントが「形」なのか「色」なのか、両陣営でこだわりに大きな差があったということだ。その流れに乗ってゼータも、新型ガンダムという「印象づけ」のためにトリコロールペイントされ、さらにVアンテナの追加によって、ティターンズ反攻のシンボルとなったと考えるのが自然ではないか。

では、「なぜ色なのか？」それはメディアの影響を重視したためであろう。リーアにおいてなぜガンダムがここまで話題になるかと言えば、ミノフスキー粒子下の荒れた映像でも視認性の良かった白を中心としたトリコロールを保つガンダム活躍の映像によってだった。エゥーゴの上層部は、内乱のグリプス戦役においては、戦いの帰趨は戦士が決めるものではなく、観客が決めると先読みをしていたのである。

このように数奇な運命のバランスが導き、ゼータ・ガンダムは「ガンダムの系譜」に名を連ねることとなった。今では特異性により、もっとも愛すべきガンダムとするファンも多数獲得している。そのユニークさの陰に潜む時代性と、かの機体の数奇な運命にも、ぜひ想いをはせていただきたい。

/moc.evaw-ybboh.www//:ptth

nami

Enjoy your creative hobby life. We are always seeking your complete satisfaction.

1＝アーガマ下部デッキで待機中のリック・ディアス。写真＝エゥーゴ

Anaheim Electronics RMS-099 RICK DIAS

所属：エゥーゴ　生産：アナハイム・エレクトロニクス社
全高：21.6メートル（70.9フィート）　アンテナ高：18.7メートル（61.4フィート）
頭頂高：18.0メートル（59.0フィート）
本体重量：32.2トン（71000ポンド）　全備重量：54.7トン（120600ポンド）
ジェネレーター出力：1833キロワット
スラスター総推力：74800キログラム（164900ポンド）
センサー有効半径：11500メートル（7.14マイル）
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・ピストル×2、ビーム・サーベル、クレイ・バズーカ、
バルカンファランクス、ビーム・ライフル（ガルバルディβ用）

装甲材にガンダリウム・ガンマを用いた最初の機体
パイロットはクワトロ・バジーナ大尉ほか

U.C.0087

リック・ディアスが主力機になれなかった理由

The reason that RICK-DIAS could not be a main force

By MANABU KOGA マナブ・コガ

モビル[illegible]ーツを駆使した戦闘に必要なものはモビルスーツとパイロットだけではない。エゥーゴが戦争を始めるにあたっては準備期間が必要だった。

そもそもエゥーゴは最初から軍隊であったわけではない。元々はティターンズをはじめとする地球連邦軍の暴力的な軍事行動を監視する市民団体であったと記憶している。その市民団体を母体に、地球連邦でありながら反ティターンズである政府組織やジオン公国の残党と思われる組織、またアナハイム・エレクトロニクス社を中心とする民間企業の援助が集まって成長していき、UC0087年には軍事行動が可能な組織＝軍隊になっていったのである。

エゥーゴは市民団体から軍隊になるために、新型モビルスーツ「リック・ディアス」を準備していた。ジム・クゥエルやハイザックといったティターンズのモビルスーツとの戦闘を目的に開発された「対モビルスーツ用モビルスーツ」だ。地球出身で宇宙空間での戦闘に不馴れなパイロットが多いティターンズに対して、独特の背面バインダーを持つリック・ディアスの高い空間戦闘能力は圧倒的に有利であり、エゥーゴの期待通りに実績もあげていた。エゥーゴの本格的な軍事行動は、リック・ディアスの完成をなくして始まらなかったとも言えよう。ところがリック・ディアスはエゥーゴの「主力モビルスーツ」にはなり得なかったのだ。▶▶

1、2、3＝アウドムラ艦内のディジェ。／4＝ドダイ改に乗って飛行するディジェ。アウトムラを母艦とする航空モビルスーツ部隊の隊長機として活躍したディジェは、地上よりも空中で映画することが多かった。写真＝カラバ空軍

Karaba
MSK-008 DIJEH

所属：カラバ　製造：カラバ（アナハイム・エレクトロニクス社・キャリフォルニアエ場）
全高：23.0メートル（75.5フィート）　肩頂高：18.4メートル（60.4フィート）
本体重量：33.9トン（74700ポンド）　全備重量：51.3トン（114200ポンド）
ジェネレーター出力：1852キロワット
スラスター総推力：74000キログラム（163100ポンド）
センサー有効半径：11700メートル（7.27マイル）
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：バルカン砲×2、ビーム・ライフル、ビーム・ナギナタ、クレイ・バズーカ

エゥーゴから譲り受けたリック・ディアスのフレームを流用
パイロットは一年戦争の英雄アムロ・レイ大尉

U.C.0087

カラバもエゥーゴ同様に最初から軍隊だったわけではない。エゥーゴはUC0087年5月11日のジャブロー基地攻撃の際、新型機ネモを中心とする大量のモビルスーツをバリュートシステムによって大気圏突入させた。作戦終了後のモビルスーツ隊を再び宇宙に帰還させたのが、地球上で反ティターンズ活動をしていた組織＝カラバである。

ただし宇宙に帰還することができたのは一部の試作機とパイロットを中心とした兵員だけだった。地球に残されたモビルスーツはそのままカラバに譲渡され、ジャブロー基地から持ち出したガルダ級輸送機アウドムラを母艦に、そのままカラバの主力部隊になる。

エゥーゴとの共同作戦で突然軍隊になったカラバも、反ティターンズである地球連邦軍人の参加や、ルオ商会を中心とした民間企業からの資金・物資援助が集まり、勢力を拡大していく。中でも一年戦争でガンダムのパイロットであったアムロ・レイ大尉の参加は有名だ。アムロ大尉の乗機は、エゥーゴが残していったリック・ディアスを元に大気圏内用に改造した「ディジェ」であった。ディジェはアウドムラを母艦とするモビルスーツ隊の隊長機の役目を負った。

一部のベテランパイロットが搭乗することでリック・ディアスの活躍は目立っていたものの、エゥーゴ、そしてカラバでも主力機として配備されたのはあくまでネモであった。

なぜリック・ディアスはエゥーゴ陣営の主力機になれなかったのか？　いくつかの理由が考えられる。

リック・ディアスの開発コードネームが「ガンマ・ガンダム」だったこともあり、機体コストが高いという説は有名だ。元地球連邦軍軍人が多く参加していたことから、ジム系パイロットにネモが好まれていたとの説もある。

また、多額の企業献金に支えられていたとはいえ、エゥーゴが所有する艦船はティターンズと比較すると貧弱なものであった。最新鋭の旗艦アーガマと2隻のアイリッシュ級戦艦以外は、連邦軍から離反したサラミス改級によって構成されていたことも見逃せない事実だ。当時のサラミス改のデッキはジムIIの運用を前提に作られていたため、ジムIIと同サイズのネモしか搭載できなかった可能性がある。リック・ディアスを配備したくても、このモビルスーツを運用できる艦船が揃わなかったという説もあるのだ。

結果としてリック・ディアスは主力機にはなれなかったが、エゥーゴの広報資料の中で頻繁にその姿を確認できる。「エゥーゴには高級機が数多く配備されている」という印象を連邦市民に与えることに成功した「メディアの中の主力機」として、戦局を有利に導いていったのかもしれない。

Anaheim Electronics MSA-003 NEMO

所属：エゥーゴ、カラバ　建造：アナハイム・エレクトロニクス社
全高：19.5メートル(64.0フィート)　頭頂高：18.5メートル(60.7フィート)
本体重量：36.2トン(79800ポンド)　全備重量：55.6トン(122600ポンド)
ジェネレーター出力：1620キロワット
スラスター総推力：72500キログラム(160500ポンド)
センサー有効半径：10020メートル(6.23マイル)
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：60ミリバルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、シールド

ジムIIに代わるエゥーゴおよびカラバの主力モビルスーツ
スペックに対するコストパフォーマンスが高い

U.C.0087

1＝アーガマの下部デッキと上部デッキをつなぐエレベーターで待機中のネモ。後にリック・ディアスも見える。写真＝エゥーゴ／2＝アウドムラ艦内のネモ隊／3＝ドダイ改で飛行するネモ。写真＝カラバ空軍

A.E.U.G. NEWS RELEASE U.C.0087

ここで紹介するのは、[redacted]戦役時にエゥーゴ広報より発表されたプレスリリースである。周知の通りエゥーゴはアナハイム・エレクトロニクス社のバックアップを受けており、広報面でもアナハイム・グループに属する広告代理店が深く関与し、メディア対応の実質を取り仕切っていた。

これはティターンズとの内戦が、直接的な軍事行動だけでなく、地球側の市民感情をいかに捉えるかという情報戦もまた非常に重要なファクターであったからである。情報戦にも一定の関心を払っていたからこそ、ダカールの地球連邦議会召喚とそれに伴う戦闘をTV中継するという作戦も実行可能になった。あのTV中継が分水嶺となり、ティターンズへの反発と、エゥーゴへの支持が高まるきっかけとなったのは有名なエピソードである。

プレスリリースは、親エゥーゴのメディア、ジャーナリストを中心にしながらも、広くマスコミ全般へと配布された。ただし戦局が緊迫するグリプス戦役末期になると、広報面でも混乱が見られ、一時間のような頻繁なリリース配布は行われなくなった。またプレスリリースは、情報開示のためではなく、あくまでも政治宣伝の一環として行われているため、エゥーゴに不利な情報は極力発表されていないに等しい。たとえば現在は関係者の回想録などで広く知られているが、ジクシズの旧ジオン軍勢力と接触、対ティターンズのための密約を結んだ件などについては、反発の大きさを恐れてか一切発表されていない。逆に、エゥーゴ艦隊の旗艦アーガマの話題は多く、同艦の存在が一種の政治宣伝（新型モビルスーツの優先配備など）も兼ねていたことからかがわれる。

ゼータ・ガンダムを取り巻く時代の証言として、その一部を紹介する。

Photo A.E.U.G.

AEUG [redacted]

News Release

FOR URGENT NOTIFICATION

Contact [redacted]

Information of AEUG new pilots.

u.c.0087.05.15

1. From last March the two new pilots have joined AEUG. Here are their general information.
Emma Sheen (EEF First Lieutenant) 24 years old formmt TITANS pilot
A young male pilot. 17 years old high school student from Green Noah 1
(His name is kept private for his age)

2. Emma Sheen was born in the Earth and a TITANS mobile suits pilot. She had doubts on TITANS as the personal army of General Bask Om and decided to join AEUG. Since her probation was over she is now on board the Space Cruiser Argama as a mobile suits pilot.

3. The young male pilot was a high school student in Green Noah 1 and both of his parents were the researchers. He had questioned regarding recent TITANS control policies and decided to join AEUG when he knew the approach of the Argama to Green Noah 1 in March. However, to change his decision, inhumane TITANS had not only taken his mother as a hostage, but sent his father to the Argama as a spy. This shameless operation had ended up in failure but his parents had been slain. The young pilot said "Seeing the atrocities committed by TITANS, it just makes me re-realize that I must fight against them. Although this tragic event. He have participated in the decent operations to the Jaburo in May 11th and achieved substantial results.

4. Please contact to public relations office for any interview request with these two new pilots. Due to his young age on interview with the young male pilot you may be asked to fill them in question-and-answer form.

[redacted]

エゥーゴに新たに参加したパイロットについて

U.C.0087.05.15

[redacted]に新たなパイロットが2名参加しましたのでご紹介します。

エマ・シーン（連邦軍中尉）24歳 前歴 ティターンズ ハイパイロット

少年 17歳 前歴 グリーンノア1のハイスクールの生徒

※少年は未成年のため名前は明かしません。

エマ・シーンは、地球出身のティターンズ所属パイロットでしたが ティターンズのバスク・オム中将の実質的私兵であることに疑問を持ち エゥーゴへの参加を決意しました。保護観察期間を経て 現在は正規のパイロットとして巡洋艦アーガマに搭乗しています。

少年は グリーンノア1のハイスクールに通う生徒で 両親ともに研究職についています。以前よりティターンズの統制に疑問を持っていた彼は3月にアーガマのグリーンノア1への接近を知り 意を決してエゥーゴへの参加を決めました。しかし 非道なるティターンズは 少年の母を人質にして少年に翻意を迫ったばかりでなく 父をスパイとしてアーガマに送り込んできました。この破廉恥極まりない作戦は失敗に終わったものの その過程で戦闘に巻き込まれた少年の両親は死亡することになりました。少年はこの件について「ティターンズのあのような非道なやりかたを見せられると やはり戦うしかないと思いました」と語っています。少年は、5月11日のシャプロ降下作戦にも参加し、十分な戦果をあげました。

[redacted]人への取材については 広報担当者に申し込んでください。ただし、少年については 未成年であるため直接取材ではなく 質問状形式等でお願いする場合があります。

A.E.U.G. NEWS RELEASE U.C.0087

A.E.U.G. Anti-Earth Union Guerrilla

News Release

FOR URGENT NOTIFICATION

Contact: [illegible]

To whom it may be concern:
About false rumor regarding the attack on the Jaburo/EFF base.
u.c.0087.05.15

1. There has been a false rumor that has used weapons had been used to destroy the base in our attack to the Jaburo on May 11th earth standard time. We AEUG believe the earth is to be a home for the entire human race and will not use any nuclear weapon under any circumstances. The demolition of the Jaburo base by nuclear weapon was a work of TITANS. Following are the detailed information regarding this incident.

2. On May 11th AEUG initiated the operation to take control of the Jaburo base by descending several squadrons of mobile suits and other ships from the Space Cruiser Argama. Just after our entry to the Jaburo base, an captured EFF officer told the troops that "there is a nuclear bomb under the Jaburo and will go off in one hour." This officer also testified that the Jaburo base commander is the one who started the detonation sequence of the nuclear bomb.

3. This selfish use of nuclear weapon sacrificing even their own troops can be judged as a crime not only against the earth ecological system but to entire human kind. We AEUG can not pass over this heinous act of TITANS without making any protest. We AEUG will continue our campaign against TITANS and the terror reign.

4. The testimony from a captured EFF officer was obtained by proper questioning and not by any illegal torture. We can provide the film on which we recorded our questioning for those media who is in need. Please contact us for further details.

[illegible]

地球連邦軍ジャブロー基地攻撃に関するデマゴークについて

U.C.0087.05.15

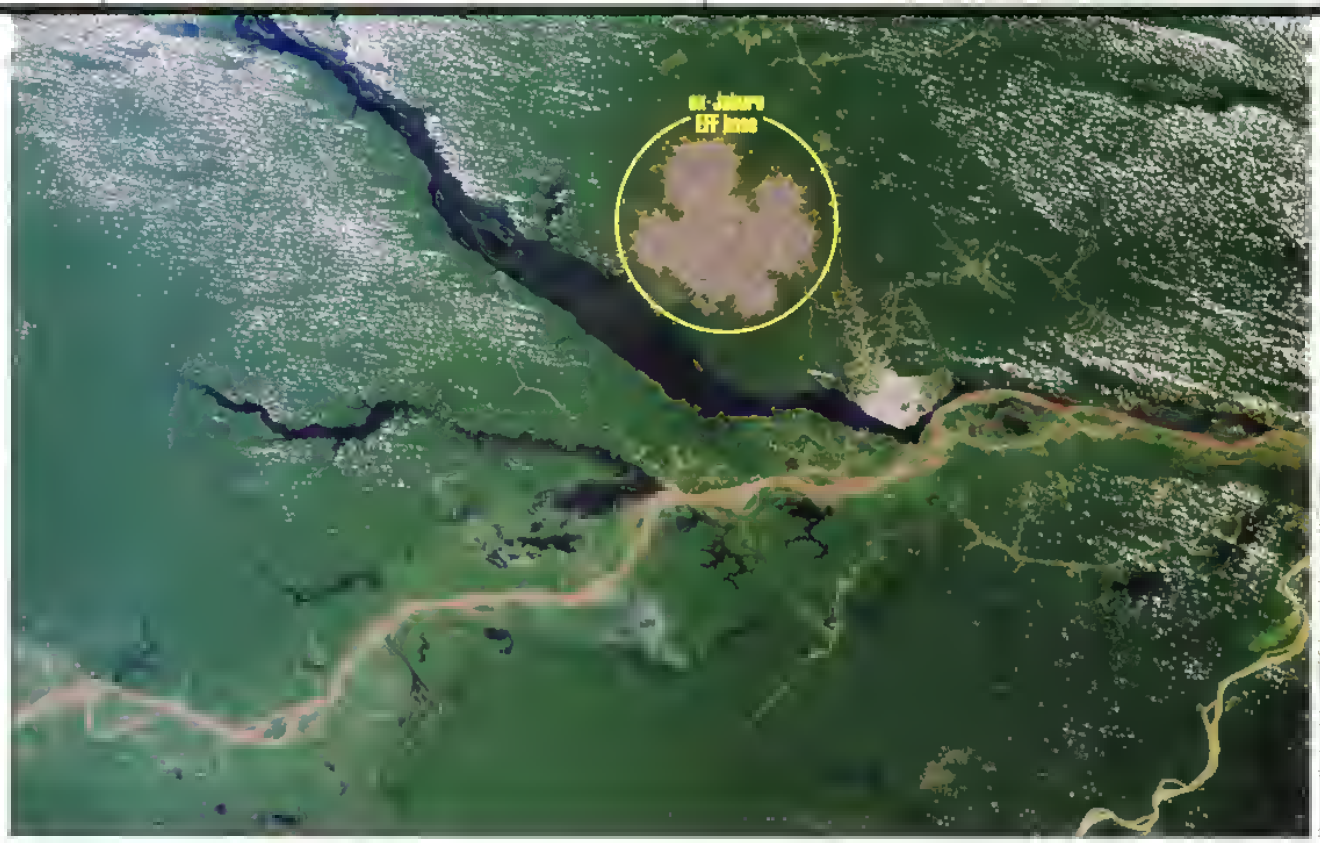
[illegible]日 地球標準時 [illegible]た地球連邦軍の[illegible]ャブロー基[illegible]攻撃に[illegible]て「基地を殲滅するために核攻撃を行った」という悪質な[illegible]ゴ[illegible]グが流布しています。地球を人類の故郷と[illegible]て大切に考えるエゥ[illegible]は核兵器を使用する[illegible]とはあり得ません。ジャブロー基地が核兵器により壊滅したのは ティタ[illegible]ンスによるものです。以下 その状況を説明します。

2. 5月11日 エ[illegible]ーゴはジャブロ[illegible]基地の制圧を目的として 巡洋艦ア[illegible]カマを中心とする艦隊から、モビルス[illegible]ツ部隊を地球へと降下させました。ジャブロ[illegible]基地に突入直後 捕虜とな[illegible]た地球連邦軍士官から ジャブローの地下に核爆弾が仕掛けられている。あと1時間で爆発する という重要な証言を得ました。士官はまた 核爆弾の起爆スイ[illegible]チを押したのはジャブロ[illegible]基地司令である[illegible]も証言しています。

3. 自軍の兵士をも巻き込んだ核兵器の使用は、地球環境だけでなく人道に反する罪でもあります。ティターンズの[illegible]のような非道を エゥーゴは看過する[illegible]とはできません。今後もエゥ[illegible]ゴは ティタ[illegible]ンズの暴走を制止するための行動を続けます。

4. なお[illegible]官の証言は 公正な手段によって得られたもので 拷問等の不正な手段は使用してい[illegible]ません。必要ある媒体には 尋問の動画をお渡しすることができます。詳しくは担当まで

※下は[illegible]0099に撮影された[illegible]ャブロー基地跡地とされる写真



Place with the Jaburo EFF base before it [illegible]

A.E.U.G. NEWS RELEASE U.C.0087

A.E.U.G. Anti-Earth Union Government

News Release

FOR URGENT NOTIFICATION

To whom it may be concern:
Regarding the TITANS occupation of Von Braun city.

u.c.0087.08.10

1. August 10th earth standard time Von Braun lunar city was occupied by the TITANS space battle ship Dagosse Giat. Currently the city is under control by Maj Jamaican Dannigan and freedom of the citizens is considerably limited. This occupation is violation against all spacenoid freedam.

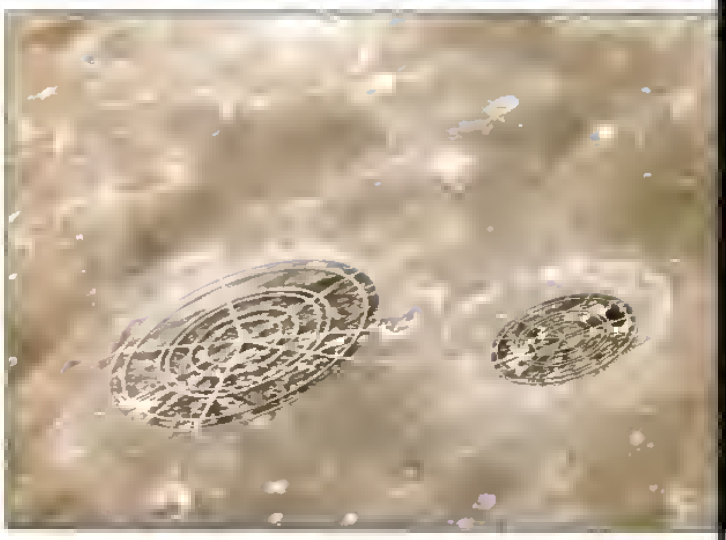
2. To protect the freedom and safety of spacenoid, we AEUG will continue our effective countermeasures against TITANS.

ティターンズのフォン ブラウン市占拠について

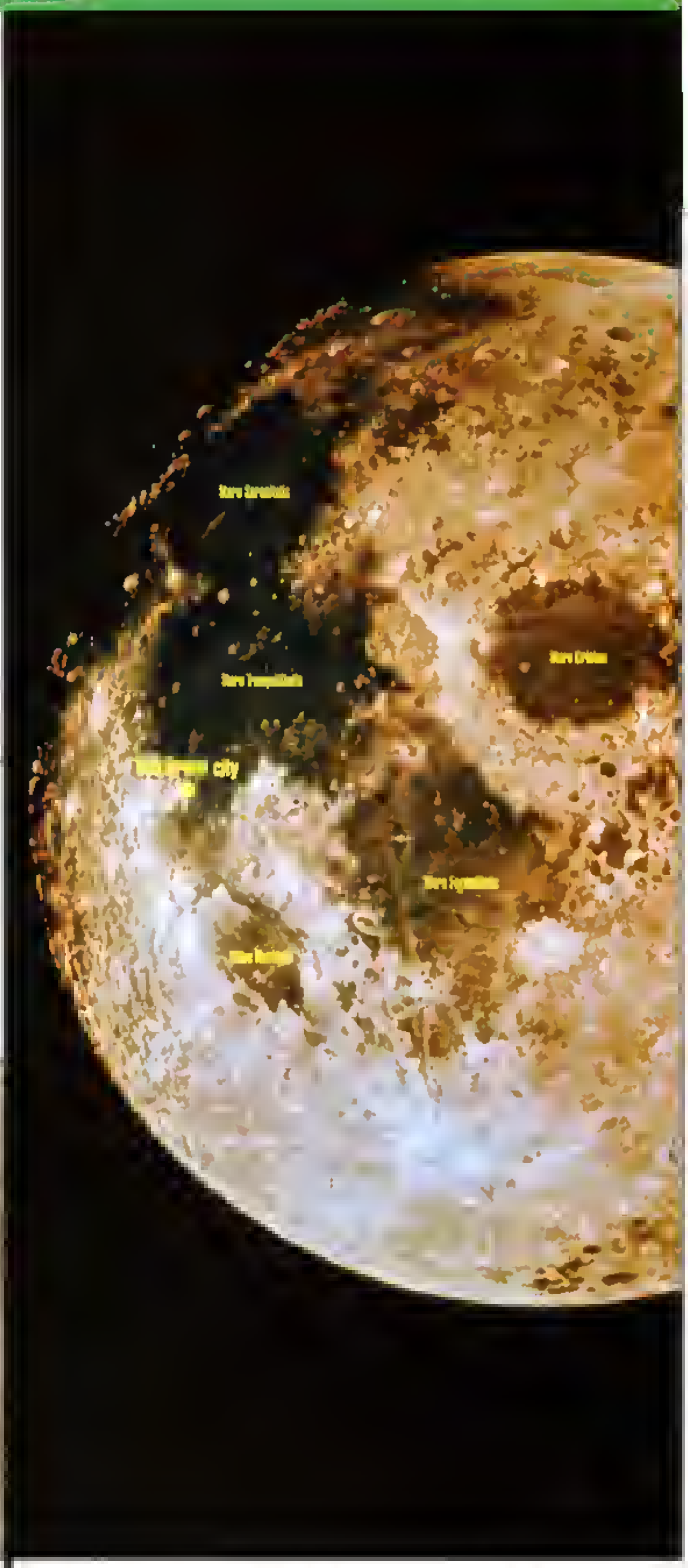
U.C.0087.08.10

ロー ト(地球標準時) テ ア ー ラの戦艦トゴス・キアによ て月面都市フォン ブラウン市が占拠されま た 現在 同市は ジャマイカ ダン ン少佐が実権を握っており 市民は生活の自由を著し 侵されて います。これはスペースノイトの自由を与す 行為です。

エゥ はスペ ス イトの自由 安全を守るため ティターンズに対して具体的な行動をも て対抗 ていきます



Von Braun city



Von Braun city (N 0.8° E

A.E.U.G. NEWS RELEASE U.C.0087

A.E.U.G. Anti-Earth Union Government

News Release
FOR URGENT NOTIFICATION

Contact [redacted]

To whom it may be concern
Regarding the assassination of Brigadier General Blex Forer.
u.c.0087.08.17

1 August 7th earth standard time the AE.U.G Brig. Gen. Blex Forer was found dead in the Hotel Prince in Daker city.

2 We believe he was assassinated in his sleep from several gun wounds to his chest. Local police are investigating the case but no new evidence is found so far.

3 Brig. Gen. Blex Forer was visiting Daker city to attend the Earth Federation Assembly. The first person to find him dead was his companion for this assembly, Capt. Quattro Bajeena.

4 This assassination of a council member during the Earth Federation Assembly is a grave challenge to democracy. AE.U.G request local police for quick arrest of the suspects and proper measures for this murder case under the judicial system.

Photo attached is the latest photo of Brig. Gen. Blex Forer.

Photo: A.E.U.G

ブレックス・フォーラ准将の暗殺について

U.C.0087.08.17

1 8月17日(地球標準時) ダカール市内のホテル・ダカール・フ[redacted]ーゴのブレックス フォーラ准将が死亡しているのが発見されまし

2 胸等に拳銃で撃たれた跡があり 睡眠中に、何者かに暗殺されたと思われます。現在 現地警察が捜査中ですが 現時点では事件解決に結びつく具体的な情報は入っていません。

3 フレックス准将は、ダカールで行われていた地球連邦議会に出席するため、同地を訪れていました。第一発見者は、同行していたクワトロ・バシーナ大尉。

4 言論の場である地球連邦議会開催中に 議員の一人を暗殺するという行為は、民主主義に対する重大な挑戦です。エゥーゴはこのような犯人の早期逮捕と 司法を経た上での適正な処分等を、現地警察などに望んでいきます。

・資料として添付した写真は、ブレックス フォーラ准将の近影です。

A.E.U.G. Brig. Gen. Blex Forer was assassinated!?

DAKAR, Senegal (UT)—Aug.17th EST A.E.U.G. (Anti-Earth Union Gov-ernment) Brig. Gen. Blex Forer was found dead in the room of Hotel Prince in Daker.

From gunshot wounds to his body, local police is now investigating the case in aspects of homicide and suicide.

Brig. Gen. Blex Forer was one of the lead-er of the A.E.U.G. and also a council mem-ber of the Earth Federation As-sembly. He was staying in Daker for its congress where the crucial argument re-garding the relation-ship between the EFF and the TITANS was discussed. Various sources are now keeping an eye on what will happen next after untimely death of the leader of the A.E.U.G who is currently in battle with TITANS.

A.E.U.G. Brig. Gen. Blex Forer

Dakar city hall
Assembly building i[redacted]
part in Dakar City. T[redacted]

リーアで発行されている新聞"DAILY SUNRISE"U.C.0087年8月18日号より。

エゥーゴのブレックス准将、暗殺!?

【ダカール発UT】17日(地球標準時) ダカ ルのホテル・ダカール フリンスの一室で エゥーゴ(反地球連邦政府)のブレ ックス准将が死亡しているのが発見された 体には拳銃で撃たれた跡があり 警察では自殺と他殺の両面で捜査を進めている

ブレックス准将はエゥ ゴ首脳メンバーの一人。地球連邦議会の議員でもあり 議会に参加するため、数日前からダカールに滞在していた。

議会ではちょうど 地球連邦軍とティターンズの関係をめぐって重大な討議が進んでいる最中。そのティターンズと交戦中のエゥーゴの首脳が意外な死を遂げた結果が どのような影響を及ぼすのか、各方面からの注目を集めている。

A.E.U.G. NEWS RELEASE

A.E.U.G Anti-Earth Union Government

News Release

FOR URGENT NOTIFICATION

To whom it may be concern:
Regarding the order for restoration of Von Braun city.
u.c.0087.08.17

1 On August 17th earth standard time AEUG has succeeded in making TITANS retreat from Von Braun city

2 AEUG had been working on the operation plan to liberate Von Braun city prioritizing citizen s safety since the TITANS occupation started on August 10th by the battle ship Dogosse Gnat As a result we have managed to let the Von Braun city free with minimal engagement by taking control of the ity power station

3 TITANS had initiated combat with mobile suits even when they were near city area resulting in the damage of outer city w all Not only that they also had begun battle action inside the city and destroyed many part of it AEUG had activated the transformable mobile suits and others to fight back, and managed to repel the TITANS mobile suits squadron with minimal damage

4 AEUG will continue to resist TITANS tyranny

attached below is photo s of the AEUG s new mobile suits that are in the operation

フォン ブラウン市の治安回復について

U.C.0087.08.17

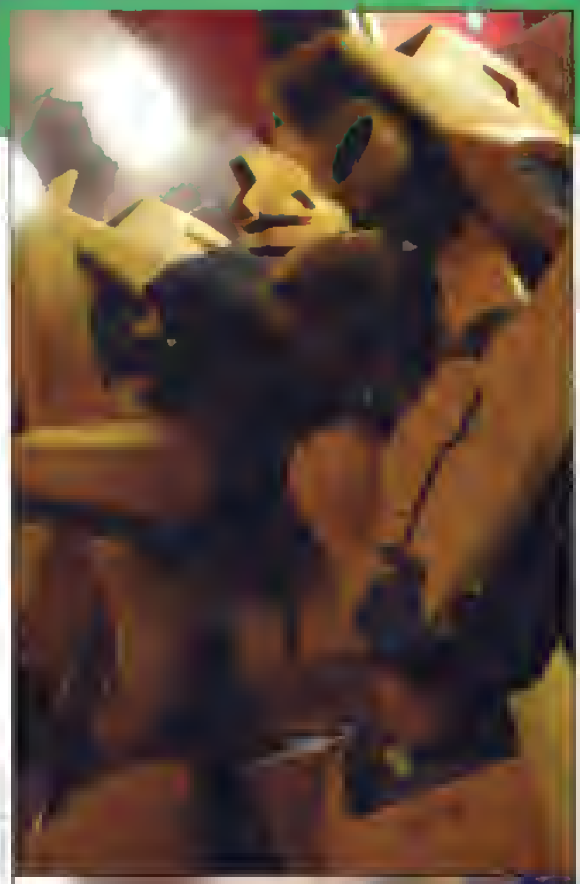
1 8月17日(地球標準時) エ ゴは フォン ブラウン市よりティターンズを撤退させることに成功しました

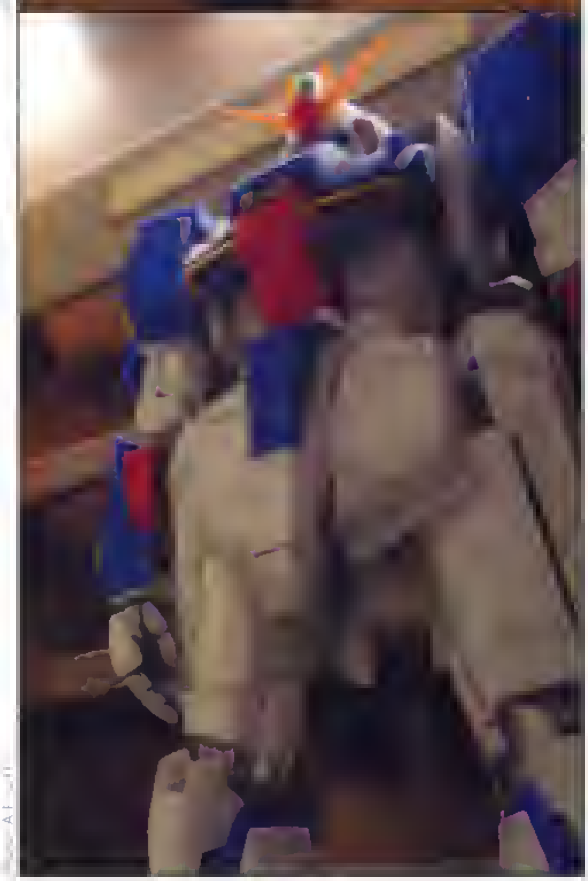
2 8月10日にティターンズの戦艦トコス ド よ て占拠されて以来 エゥーゴは,市民の安全を確保しつつ いかにフォン ブラウン市の治安を回復するかについて作戦立案を進めてきました その結果 市の発電施設を抑えることで 最小限の戦闘のみで フォ ブラウン市を解放することができま た

3 ティターンズは市街地の近くであるにもかかわらずモビルスーツによる戦闘を強行。結果的に フォン ブラウン市の外壁を破壊、さらに市内部でも戦闘をおこし 多数の被害を出しました エゥ ゴは ロ変モビルス ツなどを投入 最小限の被害で ティタ ンズのモビルス ツ部隊を撤退することに成功しました

4 今後もエゥーゴは ティタ ンスの横暴に対 徹底的に抗戦していきます

※資料として添付した写真は 作戦に参加 たエゥ ゴの新型モビルスーツの画像です。





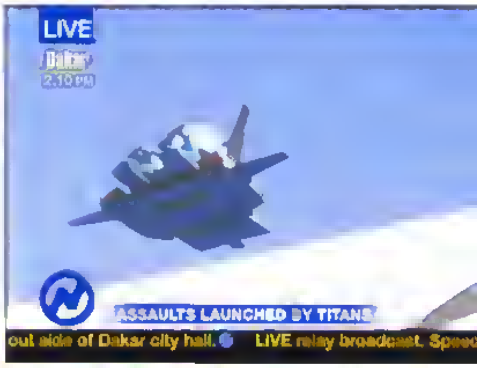
MSZ-006 ZETA GUNDAM
U.C.0107 The 80th outbreak of the Gryps war anniversary Deluxe display model

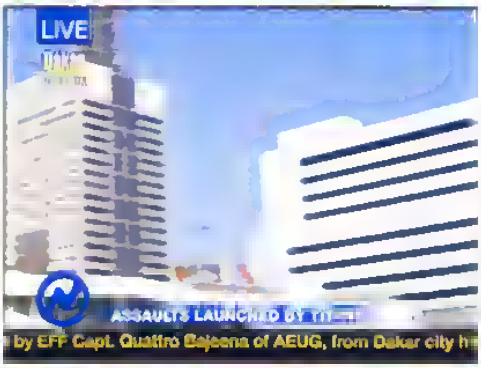
MSZ 006 ZETA GUNDAM
U.C 0107 The 20th outbreak of the Grips war anniversary Deluxe display model

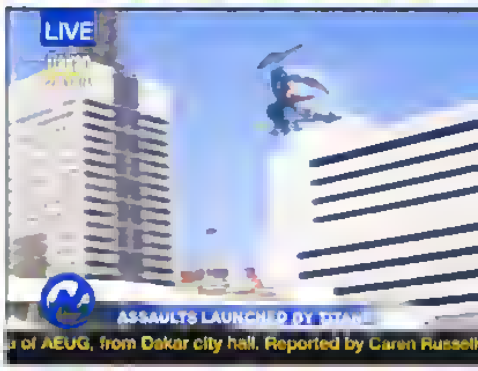
a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

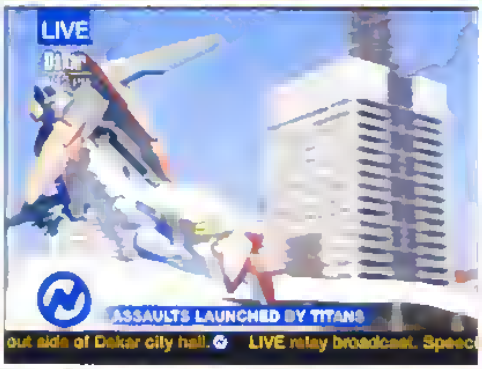
エゥーゴによる地球連邦議会占拠事件はティターンズとの内戦にあって大きなターニングポイントとなった。当時の報道資料からその実像を掘り起こす。

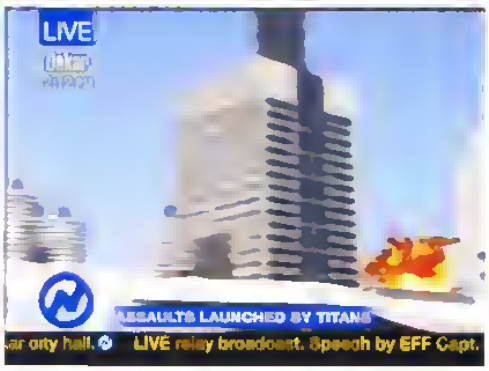
Reporting by RYOTA FUJITSU リョウタ・フジツ







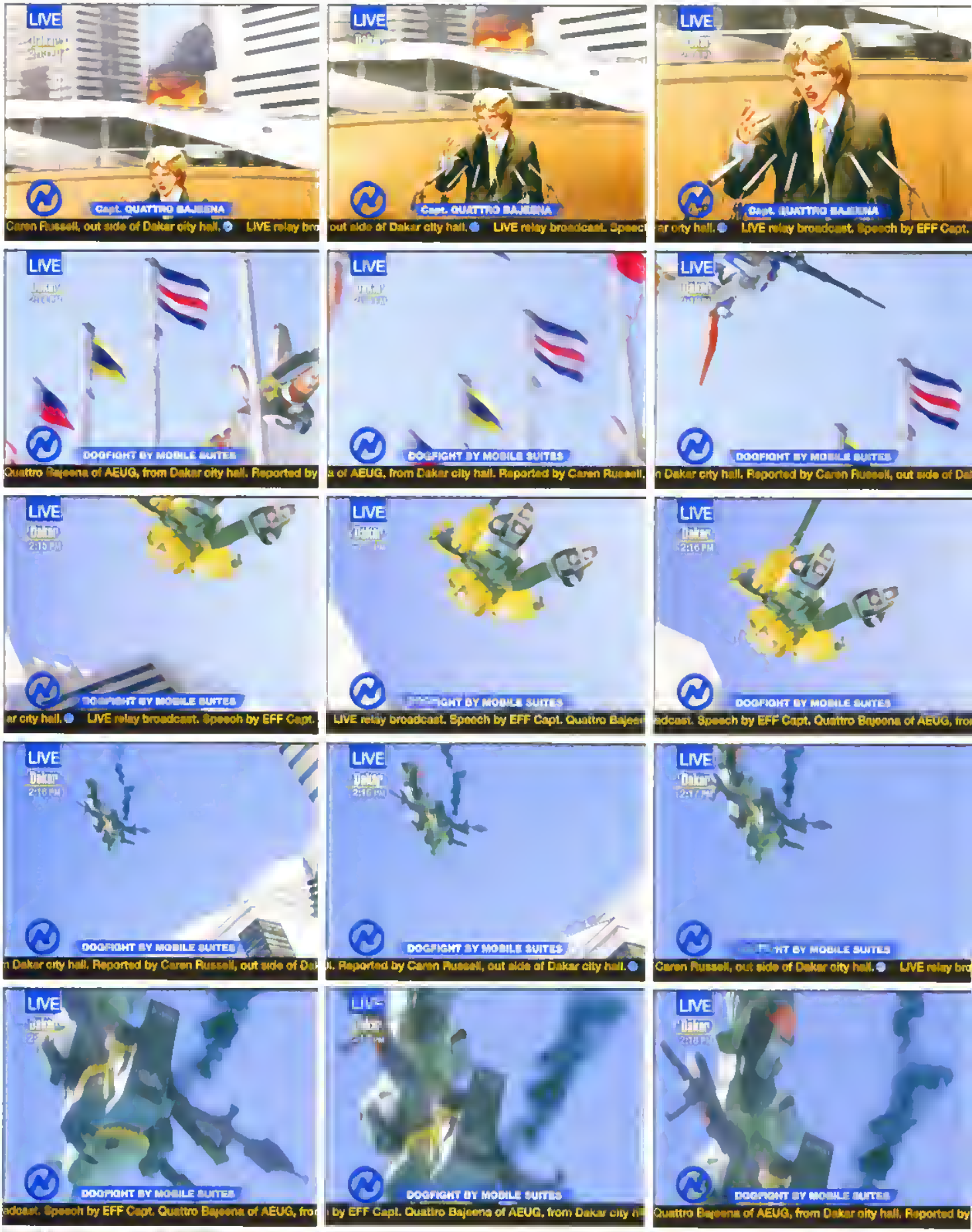




MSとTVの両面バックアップ

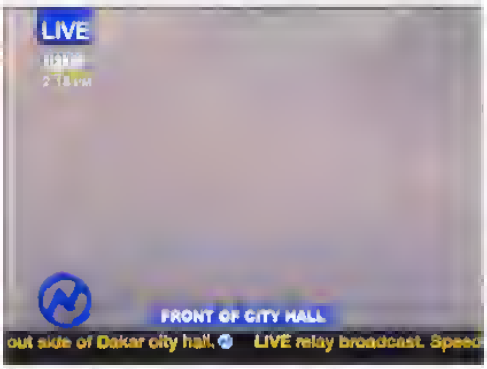
UC0087年11月16日、エゥーゴは、ダカールでの地球連邦議会を占拠した。この作戦の目的は、これまで広く知られているとは言い難かったティターンズの暴力的支配を連邦市民の前にさらけだすことにあった。そして、その主眼は、エゥーゴの実質的指導者であるクワトロ・バジーナ大尉　　シャア・アズナブル、あるいはジオンの息子でもあるわけだが　　の演説に集約されていた。そして、この演説を成功させるため、モビルスーツを動員した武力的側面と、メディアを利用した情報的側面という二方面からのバックアップが行われた。このページに収録した画像は、まさにこの情報的支援の産物である。エゥーゴはカラバと協力して作戦を実行。アウドムラを弾道飛行でダカール近郊へと近づけ、そこからネモ数機とゼータ・ガンダム、ディジェを発進させた。これはクワトロ大尉のダカール入り経路を分かりづらくするための陽動と、演説中に想定される武力的妨害からクワトロを守るための牽制という二つの狙いがあった。ダカール上空では小競り合いこそあったが、エゥーゴ側には戦闘について積極的な姿勢はなかった。

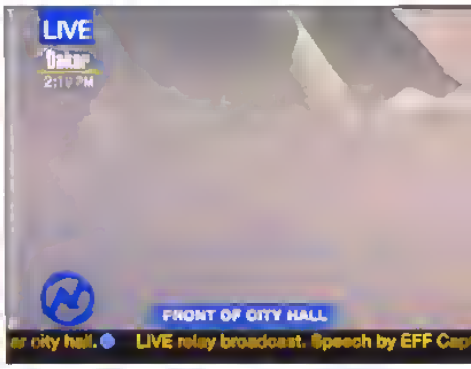
LIVE
ASSAULTS LAUNCHED BY TITANS
Quattro Bajeena of AEUG, from Dakar city hall. Reported by
LIVE relay broadcast. Speech by EFF Capt.
Caren Russell, out side of Dakar city hall.
AIR STRIKES ON DAKAR

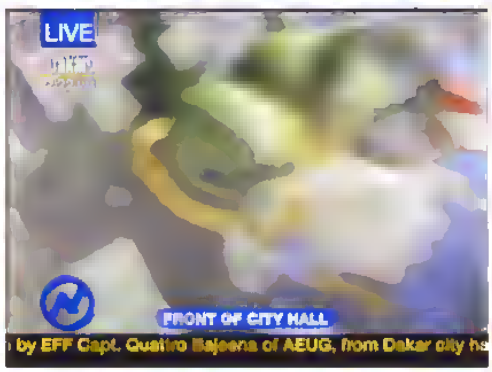

LIVE
Capt. QUATTRO BAJEENA
Caren Russell, out side of Dakar city hall.
LIVE relay broadcast. Speech by EFF Capt.
DOGFIGHT BY MOBILE SUITES
Quattro Bajeena of AEUG, from Dakar city hall. Reported by
Dakar
2:16 PM

from telecast on November

LIVE
DOGFIGHT BY MOBILE SUITES
LIVE relay broadcast. Speech by EFF Capt. Quattro Bajeena of AEUG, from Dakar city hall. Reported by Caren Russell, out side of Dakar city hall.
FRONT OF CITY HALL

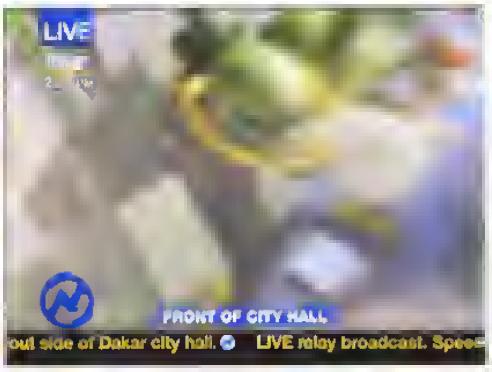


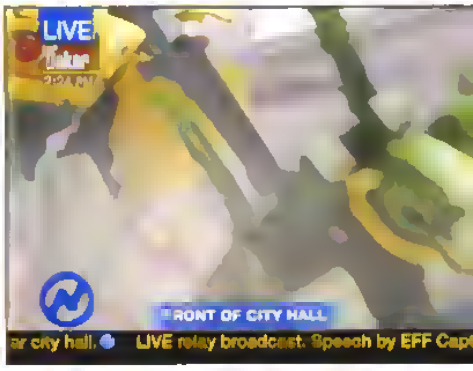




ive telecast on November

LIVE
FRONT OF CITY HALL





rom live telecast on November [illegible] 0087

状況が一変するのは、ティターンズのバイアラン方面撃してからだ。バイアランは、TV放送の要である光ファイバーの中継基地を破壊しようと試み、これをきっかけとして、エゥーゴ、ティターンズ両軍は本格的な市街戦に突入してしまう。

皮肉なことに、このバイアランの戦闘的な姿勢が、エゥーゴに利することになった。エゥーゴのカメラが、横暴なバイアランの行動を捉え、それが全世界に中継されたのだ。さらに、カメラはティターンズのアッシマーが、バイアランを押しとどめる姿も捉え、ティターンズ内部に一種の混乱があることも浮き彫りにした。ハイザックとゼータ・ガンダムが接近して格闘を行うなど、さらに激しく市街戦になるかと思われる状況だったが、TV中継に気付いたティターンズ上層部が、停戦命令を発動、戦闘は停止された。

ティターンズにかかわる報道は、しばしば"電波状態が悪いため"中断するケースが多かった。光ファイバーが普及した現在"電波状態が悪い"という理由は、もちろん政治的な圧力の言い替えに過ぎない。それだけに、ティターンズの市街地を市街地とも思わない悪辣な戦闘ぶりが放送されたという事実は、多くの市民に強い印象を残すことになった。

一方、一年戦争の伝説的機体ガンダムを思い出させる機

体――つまりゼータ・ガンダム　が活躍する姿もまた驚きを持って受け止められた。また市民の多くはその名前を知らなかったとはいえ、青を基調としたトリコロールと、独特のシルエットを持つ機体が、あくまで市民の味方として振る舞っているように受け止めたのである。

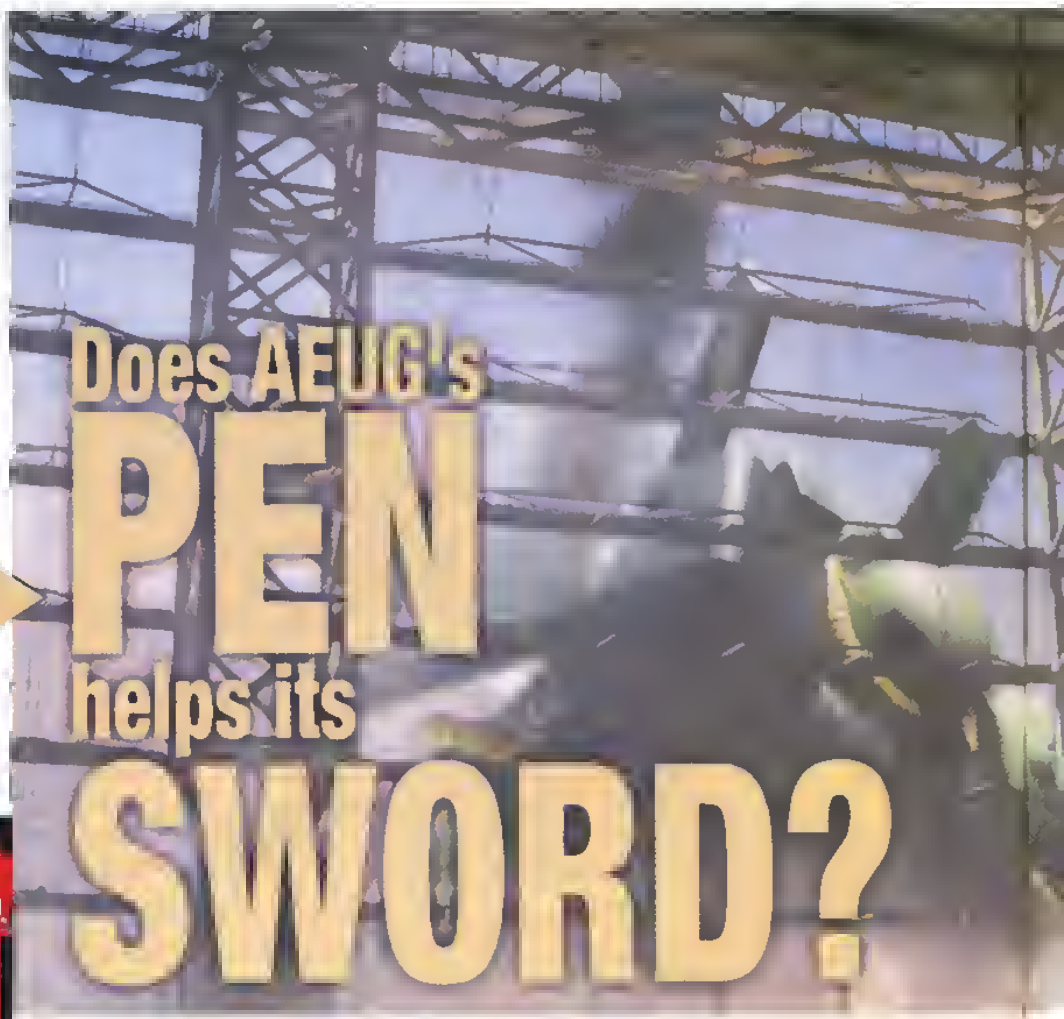
ティターンズとの戦闘は、もちろん偶然の結果である。しかし振り返ってみれば、エゥーゴがダカールにおいて戦術、戦略的に勝利しうるのは、最初からわかりきっていたことでもあった。というのも、カラバは、ルオ商会の財力などを使い、事前にダカール郊外の中継施設を実質的に自らの勢力下においていたのだ。その上で、民間TV会社のスタッフに偽装したカメラマンを、ダカールの議場へと突入させたのである。つまり、ダカールでティターンズが無理を通そうとすれば、それはすべて報道される体制ができていたのである。この状況では、ティターンズが戦闘で勝利をしたとしても、エゥーゴにとってもプラスになってしまう。最初の布陣からしてティターンズは負けていたのである。

かくしてエゥーゴはTVの力によって、広い範囲に自らの正義を印象づけることに成功したのである。

a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

ダカール この戦闘を報じた週刊誌「WEEKLYNEWS」かなり早い段階で、エゥーゴのダカールでの勝利が、情報戦によるものだという本質を指摘、そこに軸足を置きながら戦局予想へと話をすすめている WEEKLYNEWSらしい、硬派な分析記事といえる

たたし突発的な出来事ゆえ、現場にカメラマンを送ることはできなかったようで、写真は通信社経由で、TV中継からのキャプチャ画像を使用している ミノフスキー粒子が濃く残っている地域や、光ファイバーが寸断された地域、それに宇宙などでは、手軽に持ち運べる雑誌媒体にアドバンテージがあり、こうした雑誌も反ティターンズの気運に大きな役割を果たすことになった。



Does AEUG's PEN helps its SWORD?

「WEEKLYNEWS」誌U C 0087年11月21日号より。地球のニュース誌「WEEKLYNEWS」のオフィスはニューホンコンにあり、地球の主要都市のほか月面やスペースコロニーでも買うこともできる。

AEUG, who previously failed their battle of Jaburo, have tried to conquer information warfare at Dakar. AEUG are fighting their battle with a pen in right hand and a sword in left hand. Will NIKE, the goddess of victory, smile upon this tactic?

By FORTY ROUR

42

Photographs for WEEKLY NEWS by Caron Russell

エゥーゴの「ペン」は「剣」を助けるか？

シャプローの戦闘で失策したエゥーゴはダカールの情報戦で勝負を試みた。右手にペン、左手に剣という二丁拳銃に挑むエゥーゴ、果たしてその戦略に勝利の女神ニケは微笑むのか。

戦場は、戦場だけで完結するものではない。それは宇宙世紀以前からの真実であり ミノフスキー粒子が電磁的霧をあらゆるところにかけるようになっても変わることはない。春より本格化したエゥーゴとティターンズの武力闘争において、この原則を深く理解していたのはどちらだろう。少なくとも 徹底した秘密主義のティターンズでないことは確かなようだ。

11月16日 地球連邦軍の検問を通過してダカール市内にTVクルーが入った。目的は議会中継。たか、その時点でこのわずかカメラ1台の小さなグループか、モビルス ツと同等かそれ以上の大きな働きをするとは誰も予想しなかった。彼らは、実はエゥーゴと共同歩調を取るカラハのメンバーであり 狙いは議会中継ではなく 実は彼ら自身によって仕組まれたハプ ングのほうにあった。

エゥーゴは おそらく今回の作戦を「ペン」の仕事と考えていたに違いない、連邦議会をジャ クし エゥーゴのエースパイロットであるクワトロ・バジ ナに、自らの出自（なんと彼は、シオン・ダイクンの息子だという！）を語らせ、ティターンズの暴虐を指摘する。TV中継＝「ペン」こそ、民意という最大の軍事拠点を占拠する最良の兵器というわけた。アウトムラから発進したモビルスーツ部隊＝「剣」は、あくまで支援に過ぎないはずだった。

ところが この関係が逆転する。おそらくカラバ関係者にとっても偶然のことたったはずだ。戦闘が市街地に及ぶに至って カメラマンは、金髪の亡国の王子ではなく 外の戦闘へとカメラを向けることを決意するのである。言葉よりも具体的なティターンズの暴虐を。ここで「ペン」は「剣」を有利に運 ための 援護射撃として働くことになる。そして事実 ティターンズはTVカメラを向けられたことで なしくずし的に拡大してしま た中途半端な軍事行動を、中途半端に終わらせざるを得なくなった

エゥーゴは、ジャプロー攻略時に既にもぬけの殻の基地を攻略させられるという、屈辱的な失態を犯している。その後も、ティターンズに押され気味で、地上でも宇宙でも戦局のイ ニシアチブを握ることができていない。

しかし、「ペン」という武器がエゥーゴの「剣」を変える可能性がある。ティターンズは 古くさい秘密主義とエリート主義にとらわれ、軍事的には優位でも、もっとも重要な民意という「軍事基盤」を無視しすぎている。たが エゥ ゴが今回のように、「剣」を「ペン」で支援する構図を戦場で設定できれば、状況は一気にエゥ ゴへと傾くはずだ。特にエゥーゴは、市民感情と企業献金によって支えられているだけに、自分たちの作戦に関する的確なディスクロ ジャーこそ生命線と考えるべきであろう。

そしてそれは全世界のTV局を味方につけるはずである。彼らはティターンズであろうとエゥーゴであろうと 視聴率のとれる素晴らしいコンテ ツを喉から手がでるほどほしがっているのだから。

<< RMS-100 Hizack
TITANS's mobile-suit

BATTLES DO NOT END just in battlefields. This is one of these truths which exists before the universal century, and does not changes even Minovsky particles are spread all over the place to jam radars. Is it AEUG or TITANS, who remember this very simple truth during conflicts that have been escalating since last spring? At least, it seems not to be secretive TITANS.

On Nov 16th, TV crew has passed EFF security checks and entered Dakar city for the assembly broadcasting. At this moment, no one guessed this small crew with just one camera would play an important role as well or better than battle with mobile suit. They were actually the member of Karaba resistance who ally themselves with AEUG movement. Their real arm was not to broadcast, but the secret surprisewhich they had planned on their own hands.

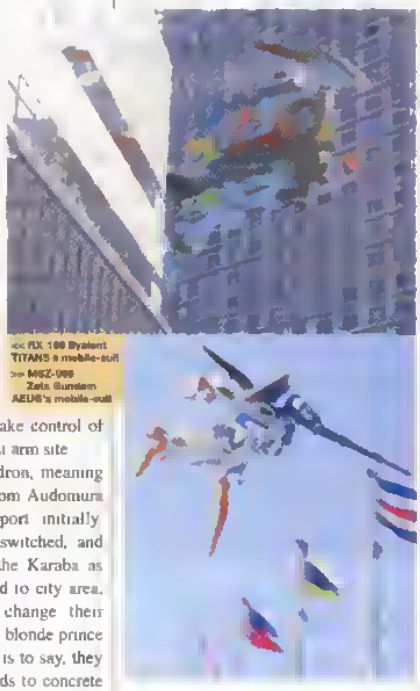
AEUG have probably thought this operation as a work of "pen". By seizing the EF assembly and let Quattro Bajeena, a AEUG's ace pilot who claims to be the son of Zeon Zum Deikun, tell about TITANS tyranny to the world. TV broadcasting, meaning "pen", was the best weapon to take control of public opinion, the greatest arm site.

The mobile-suite squadron, meaning "sword", that took off from Audomura was there just for support initially. Although this roll soon switched, and that probably surprised the Karaba as well. As the battle extend to city area, cameraman decided to change their focus to the fight from the blonde prince without a country. Which is to say, they switched it from just words to concrete example of TITANS tyranny. From this point, "pen" started to work as covering fire for "sword". As a matter of fact, TITANS had to end their premature military operation because of the TV camera.

AEUG had been recently humiliated by making an attack on empty base at Jaburo. Also they have been losing ground to TITANS in space and ground fronts, and not been able to take any military initiative.

But there is a possibility this "pen", the unique weapon, might change the AEUG's "sword". Even with military superiority, TITANS, with old fashioned secretiveness and elite ideology, have failed to pay attention to public opinion, the greatest arm site. To use "pen"with "sword" like this in battlefields will change the military balance in favor of AEUG drastically. AEUG should consider proper disclosure of their operation to public as the lifeblood because they relies on public opinion and corporate donations.

By doing so, they will make all TV stations work for them. After all, TV stations only want to get high rating content, whether from AEUG or TITANS.



<< FLX-100 Byalent
TITANS's mobile-suit
>> MSZ-006
Zeta Gundam
AEUG's mobile-suit

— by Forty Four/ New Hong Kong.
Reported by Caron Russell/ Karaba

a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

A.E.U.G Anti-Earth Union Government

News Release

FOR URGENT NOTIFICATION

Contact:

Regarding an occupation of the Earth Federation Assembly hall in Dakar.

u.c.0087.11.17

1 We, AEUG had occupied the Earth Federation Assembly hall on Dec 16th(EST) with support of Karaba while they are in session. This action was taken in order to make a protest against TITANS domination. This incident was broadcasted by many earth TV stations.

2 This is the extract from speech by Capt. Quattro Bajeena at the assembly. Please contact us if entire transcripts or movie is required.

"My name is Capt. Quattro Bajeena, a pilot of AEUG. also I once was called Char Aznable. And today I am standing here to make a speech as a single man who takes over the will of Zeon Deikun. Right now, the truth which TITANS are controlling the Earth Federation as if they owned it is a vile act much worse than that of the Zabo. Such a calamity must not be repeated again. However, I know that TITANS are a bunch of individuals whose souls are pulled by earth's gravity, and they are going to eat up its environment. Even we are watching it from Dakar, it is clear that the cities getting turned to desert. To avoid this situation, we, humans have to reside at space and back earth to the cradle of nature. Why don't we believe that we can develop our ability, despite we have found our way into space? We have been living in earth the cradle, but it is time for us to leave this nest."

3 TITANS and the Earth Federation Force had took such a foolish act that they let their mobile-suits squadron the assault the assembly hall to stop our protest. This wild folly has widely broadcasted by TV stations, and as a result our appeal was accepted by many of the citizens of earth.

4 A photo of the day is attached for your information. Please contact us if you need more of them.

ダカールで行った地球連邦議会場占拠について

U.C.0087.11.17

1 エゥーゴは11月16日(地球標準時)カラバの協力を得て、本会議中の地球連邦議会場を一時的に占拠し、ティターンズに抗議するための緊急アピールを行いました。この模様は地上各TV局にて放送されました。

2 当日アピールを行ったクワトロ・バジーナ大尉の演説の概要(一部)は以下の通りです。全文あるいは動画などが必要の場合は担当まで。

私は、エゥーゴのパイロット、クワトロ・バジーナ大尉であり、またかつてはシャア・アズナブルという名前で呼ばれたこともあります。そして、この場に立つ私は、ジオン・ダイクンの遺志を継ぐ者として語りたいと思う。

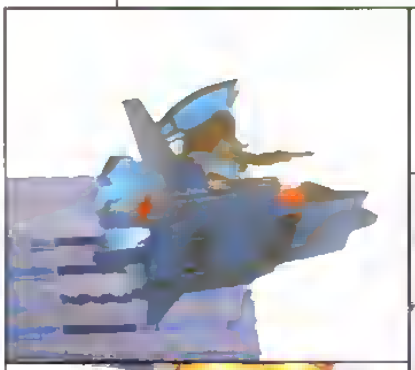
現在、ティターンズが地球連邦政府を我が物としている事実はかつてのザビ家より悪質だ。そのような不幸を再び繰り返してはならない。だが、ティターンズは、地球に魂を引かれた人間たちの集まりであり、地球を食いつぶそうとしている。このダカールであっても、砂漠に飲み込まれようとしていることがそれがわかる。それを避けるには、地球を自然の揺りかごの中へ戻し、人類は宇宙を生活の場とするしかないのだ。

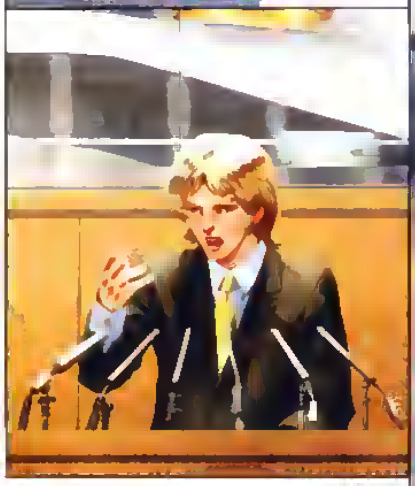
宇宙へ、進出した人類は、その能力を拡張できるとなせることができないのか。人は長い間地球という揺りかごの中で戯れてきたのか、既に人類を地球から巣立たせる時が来たのだ。

3 ティターンズと地球連邦軍はこのアピールを停止させるためモビルスーツ部隊で議会場そのものを攻撃しようとする愚挙に及びました。この愚挙もまたTV放送されたことにより、我々エゥーゴのアピールが結果として正しいことを多くの地球市民の方々に理解していただくことになりました。

4 当日の写真資料を添付してお渡しします。さらに必要な場合は、担当まで。

Photo A.E.U.G

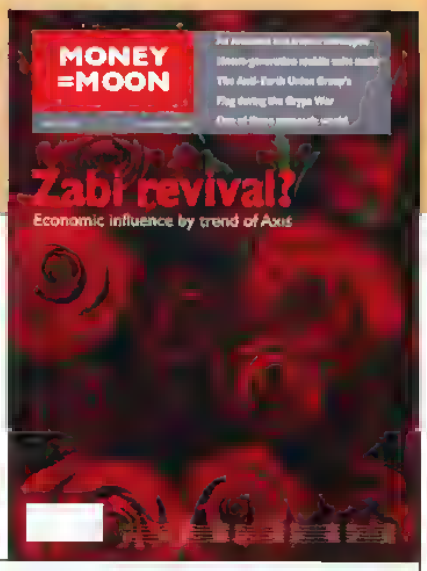




Photo

Photo A.E.U.G

a day of Dakar/ November 16, U.C.0087



思想的側面から語られることが多いエゥーゴとティターンズの内戦だが、経済戦争の側面もある事実を鋭く指摘した記事。無記名の原稿だが執筆者は、宇宙経済学の観点から木星往還船の活用を説いて後に注目を浴びることになるケンサク・ダゲールマン助教授といわれている。コロニーと地球どちらからも精神的な距離がある月面では、メディアの論調も客観的なものが多かった。

「MONEY=MOON」誌U.C.0088年1月号。月面のフォン・ブラウン市で発行されている経済誌。

見えない経済戦争——地球圏内戦の勝利条件

ダカールで起きた地球連邦会議場占拠事件により、ティターンズとエゥーゴの武力闘争は新たな局面を迎えた。最終的にこの戦いの勝者はどちらか。それは経済的対立に注目すると見えてくる。

MONEY=MOON January 0088 Leaders 13

Immigration to the Earth

Unseen economic warfare — The condition for victory in earth civil war.

On occupation incident of the EF assembly hall at Dakar, military conflicts between TITANS and AEUG has embarked on a new chapter. Who will be a winner in the end? We can see the prospect when we pay attention to the economical conflict between them.

SINCE last spring, the military conflicts between TITANS and AEUG has been escalated to actual fight. Just as some official of Luna based corporations noted in the beginning of the war, "they have started the war without knowing where to end", now battle continues without not only clear conqueror, but knowing what condition required to be a winner. It's true that the occupation incident at Dakar with TV camera have reminded both parties of the importance of information warfare, but still the military situation is in state of chaos. However, if we look this incident in a different prospective, the condition for victory in this civil war begin to emerge.

Often conflicts between AEUG and TITANS considered as political opposition, but in fact, by paying close attention, suddenly we notice there are economical conflict as well. As already pointed, the condition for the political victory is vague, but the economical victory is quite simple.

TITANS is taking considerable economic sanctions against all of the space colonies, including moon, under the pretext for hunting down the Zeon renegades. Officially these actions are to break the Zeon renegades money flow, but in fact it also gives them the power and authority over space economy. This is the real reason why the organization like TITANS, which are made up of the earth-born elite members only, requires strategic base in space. There is a fact that, for more than a hundred years, the only transportation between the earth and the space is still by shuttles. This way of transport is the biggest bottle neck for the total economic system. To obtain military supremacy in space means to hold control for every interest of all physical distribution in the palm of their hand.

On the other, AEUG and Karaba are supported by private corporations such as Anaheim Electronics or Luo & Co., Ltd. They are obviously terrified of possibility for losing free trade because of TITANS. We can say this is one of the reasons why they are taking anti-TITANS side.

From these points, we now can see the real occasion why TITANS and AEUG fight over Von Braun moon city. That battle was not just a turf war, but a scramble for "the influence over moon city, the greatest economic strategic point in space."

What now we are worried is the recent situation that the militant factions of TITANS, like the one led by Capt. Bask Om, are concentrating too much on military control of geosphere without concerning about the economic struggles behind their back. They may forge ahead with massive destructive operations in complete disregard of economic efficiency. The question is, Does AEUG have enough military power to withstand such a awful attack?

The economy of moon cities are in military procurement for now, but if the militant factions of TITANS once go wild, the entire geosphere will be thrown into a panic and no stable production will become possible. Ironically, the future economic conditions beareth under the militant factions of TITANS, who have never thought about economy. ■

Zarn and Mua

今春よりついに具体的な軍事行動と発展したエゥーゴとティターンズの対立。開戦当初より「最終的な落としどころが見えないまま戦闘に突入してしまった」(月の企業関係者)と指摘されていた通り、勝者どころか依然なにをもって勝利とするかその条件そのものが見えてこないまま戦闘状態が続いている。ダカールでエゥーゴが行った議会場占拠は、戦闘そのものよりTVカメラを使った情報戦が戦局を含めた政局を左右しうるという重要な教訓を両軍に思い出させたか、しかしそれでもなお状況は混沌としている。たが実は視点を変えるとこの見えない内戦の勝利条件が浮かび上がってくるのだ。

エゥーゴとティターンズの対立は、政治的対立と捉えられることが多いが、かれはその背面には経済的対立が厳然として存在しているのである。そしてすでに指摘した通り政治的勝利条件は曖昧ではあるが、経済的勝利条件は非常にシンプルなのである。

ティターンズはジオン残党狩りを名目に、月面を含む各コロニーの経済的自由にもかなり制限を加えている。これは表向きはジオン残党へと流れる資金源を絶つという目的だが、実際にはティターンズが宇宙経済の利権を押さえるという要素も無視できない。地球出身者だけで構成されたエリート集団がそれでも宇宙に拠点を必要とする理由がここにある。

そこには、宇宙と地球を行き来する手段が100年以上シャトルのままであるという事情が絡んでいる。このシャトルによる運搬が、地球圏経済の最大のボトルネックになっている。宇宙空間における軍事的指導権を確立するということは、この宇宙地球間の物流に関するあらゆる利権を自分の意思によりコントロール可能にするということでもあるのだ。

一方、対抗するエゥーゴ、カラバを支援しているのはそれぞれアナハイムエレクトロニクス社とルオ商会であり、これら私企業はティターンズによって交易の自由が損なわれることを、当然ながら非常に恐れている。それが、者ら対ティターンズの一つの動機といってもよい。

ここから考えると、月面のフォン・ブラウン市をティターンズとエゥーゴが取り合った理由も見えてくる。あれは単なる陣取り争いではなく、「宇宙における最大の経済拠点である月面都市への影響力」を奪い合っていたのである。

今後懸念される事態は、ティターンズのバスク・オム大佐に代表される「武闘派」が背後にある経済的闘争を失念し、地球圏の軍事的制圧にこだわりすぎるという状況である。こうなると、経済性を無視した大規模な破壊作戦を立案してくる可能性がある。エゥーゴに果たしてそれをかわすだけの戦力があるかどうか。

月面都市の経済状況は、現在でこそ戦争特需に沸いているが、どこかの時点でティターンズの「武闘派」が一層暴走すれば、地球圏全体が混乱に陥り、安定した生産などが立ち行かなくなることも考えられる。今後の経済状況は、皮肉なことに、経済のことなど考えたことのないこの「武闘派」に握られているのだ。

a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

SIDE-VIEW」U.C.0087年12月2日号。リーアの写真週刊誌。ダカールで戦闘するゼータ・ガンダムが掲載された(右ページ)。

地球連邦議会でクワトロ大尉が行った演説は驚くべきものだった。クワトロ大尉こそ、ジオン・ズム・ダイクンの忘れ形見であり、かつシオンの赤い彗星だったというのだ。しかしこの衝撃の事実に比べ、新聞報道のスペースがさほど大きくないのは、各紙記者にとって裏取りがまったく不可能だったことと、地球連邦軍上層部への配慮があったためと思われる。当該の新聞記事は、TV中継画像からのキャプチャを使っているだけ、"良心的"ともいえる(内情はどうであれ)中立サイドとして一年戦争を生き延びたリーア(サイド6)にあって、内戦は自サイドの立ち位置を決めるのが難しい題材であると同時に、一種のエンターテインメントでもある。リーア住民にとっては特別の意味を持つガンダム型モビルスーツが公に姿を見せたダカール事件は、さっそく写真週刊誌で大きなネタとして取り扱われることになった

AEUG pilot

Quattro is a son of Zeon!

Speech in Dakar, war situation is unclear than ever.

DAKAR, Senegal (UT)—16th E.F. assembly, which was held in E.F. capital, has turned out to be the unexpected that AE.U.G. has seized E.F. assembly temporarily today. This term, assembly have carried a resolution for "reorganization of the E.F.F. under TITANS control". AE.U.G. and Karaba sent a camera crew into this assembly to point out the TITANS tyranny, and broadcast the speech by Capt. Quattro Bajeena, the AE.U.G.'s pilot to the world.

In the beginning of his speech, Capt. Quattro has confessed that he was a man who had been feared as "Red comet" Char Aznable during the one-year war, and in fact he is a son of Zeon Deikun. With this shocking confession he accused the TITANS tyranny in space, and how their evil is equal to that of Principality of Zeon. In order to interrupt this speech, the E.F.F. and TITANS deployed the mobile-suites together. As AE.U.G. and Karaba fought back with their mobile-suites, the battle temporally expanded to the city limits.

Capt. Quattro Bajeena

リーアで発行されている新聞「DAILY SUNRISE」U.C.0087年11月17日号より。

クワトロはジオンの子だった！

ダカールで演説 戦局は一層不透明に

【16日・ダカール発UT社】地球連邦政府首都で開催中の連邦議会において、エゥーゴにより議会シャットダウンが行われるというハプニングがあった。今議会では地球連邦軍全体をティターンズの配下にするという決議が下されており実に波瀾含みの事件が続く展開となっている。

エゥーゴとカラバは、ティターンズの専横を指摘するためにカメラクルーを議会に送り、エゥーゴのハイロト・クワトロ・バジーナ大尉の演説を全世界に向けて中継した。

クワトロ大尉はその冒頭で、自らがジオン・ダイクンの遺児であり、かつ一年戦争中には赤い彗星のシャアとして恐れられたパイロットであったと告白。その上でティターンズがいかに宇宙なとにおいて専横を極め、その卷は ジオン公国に並ぶほどとと厳しく指摘をした この演説を妨害するため、連邦軍とティターンズは協力してモビルスーツを展開、これに対し エゥーゴやカラバのモビルスーツが応戦して 一時は市街を巻き込む戦闘にまで発展した。

a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

Brand New MS of AEUG?

confidential photo from battle

BY RICHARD LUHLAND

FIRST, LOOK AT THIS PICTURE. This is the shot from the battle between AEUG and TITANS in Dakar, where Earth Federation Council resides. Media previously reported that mid-size battle with several mobile-suites came over this area. We found out that the latest brand new mobile-suite of AEUG was also in the engagement, and here it is.

The most impressive points are blue based coloring and sharp looking body. From the witness, we also learned that this mobile-suite apparently transformed into airplane style in air. It is not known yet the reason or the purpose of [illegible] least say that AEUG must have spent a lot of effort to create this machine.

According to a military analyst, this machine, numbered "MSZ-006", seems to be manufactured by Anaheim Electronics. He told us that it is unknown that how much potential this machine can tap in battlefields because of the possibility that veteran pilots of [illegible] ble RICK-DIAS or NEMO than latest model like this. Further cause for concern is that it looks hard for the mechanic crew of Argama, who are always on board to be ready for warfare, to activate this complex transformation system safely. This analyst conclude his remarks like that "It may turns out to be nothing more then money guzzler."

[illegible] AEUG cause trouble for its entire operation.

これがエゥーゴの最新鋭MS!? 極秘戦闘写真を入手

まずこの写真を見てほしい。先日 地球連邦議会のあるダカールにおいて行われたエゥーゴとティターンズの戦闘の様子である。新聞報道などでは、モビルスーツが十数機入り乱れる 中規模の市街戦が繰り広げられたと報じられているが 実はその中の一機が エゥーゴの最新鋭モビルスーツであるらしいことが発覚。本誌は その戦闘写真を入手した。

一目見て印象的なのは シャープなシルエットと フルー基調のカラーリング。しかも戦場で目撃した人の談話を総合すると とうも空中で変形し 飛行形態へと変わることもできるというのである。そもそも何の目的で どのようなプロセスを経て変形するかは 現時点ではまったく不明だが エゥーゴが並々ならぬ力を注いで完成させた機体であることは間違いないだろう。

専門家によると この機体の型番は「MSZ-006」。アナハイム エレクトロニクス社が開発を手がけた機体のようだ。ただし、この機体が戦場でどこまでその実力を発揮するのかは未知数だという。理由として エゥーゴのベテランパイロット勢は信頼性の高いリック・ディアスやネモなどの機体を選ぶ傾向が強く 新型のような未知数の機体には搭乗しない可能性が高い。また変形という複雑な機構を 常に戦闘状態にあるアーガマの整備クルーが、どこまで安定した稼動状態に持ち込めるか、という点も不安材料だという。「へたをすると 金食い虫のお荷物にもなりかねない」とその専門家は指摘する。

反撃の切り札が 逆にエゥーゴ全体の足を引っぱるなんてことにならなければいいのだが。

A.E.U.G. NEWS RELEASE

エゥーゴのプレスリリースは、この速報を出した後に、急激に発行ペースが乱れはじめる。これはひとえにティターンズとの決戦が近くなり、戦場が混乱して、広報サイドに正確な情報が集まらなくなったことが原因と思われる。また、戦死者の数も多く、それらの事実を公表するのがエゥーゴにとってはマイナスであることも理由の一つだったのだろう。それだけに、エゥーゴとティターンズのグリプス2をめぐる戦闘で何が起こったのかは不透明な部分が多く、多くの研究者が現在もなおさまざまな角度から検証を続けている。

広報の不在は、多くの地球連邦市民にとっても面倒な状況を引き起こした。というのも、正式な発表がないため、エゥーゴとティターンズの内戦がいつ終わったのか、なかなか掴みづらかったということだ。もちろん最終的には地球連邦政府の発表があった。しかし、それより先に望遠鏡で戦闘を観察していた一部の市民を出所とするウワサが流れ、メディアはそれを後追いする形でしか、内戦の終了を伝えることができなかった。エゥーゴの広報がもっと具体的に情報宣伝を行っていれば、このあたりの状況はかなり変わっていただろう。

知られている通り、その後の地球圏はハマーン・カーン率いるネオ・ジオンがその多くを支配した。ネオ・ジオンが広報に力を入れなかったこともあり、UC0088年は前年よりも人々はウワサに身を任せながら、戦局の行く末を静かに見守ることになったのであった。

Photo A.E.U.G.

Photo A.E.U.G.

A.E.U.G. Anti-Earth Union Government

News Release
FOR URGENT NOTIFICATION

Contact [redacted]

About the TITANS Colony Laser "Grips 2".
u.c.0087.12.01

1. From our surveillance mission WE, AEUG, have concluded that TITANS have completed the construction of Grips-2 as a Colony Laser on Nov 30th(EST). Colony Laser is a weapon for multicide which the Zeon army had used during One-year war.

2. Originally, Grips-2 was one of the closed space colony of Side-7 named Green-Nash 2. "Grips" was its nickname. For some time "Grips" had been practically used as TITANS's military plant. We already confirmed that the RX-178 "GUNDAM Mk-II" or a space battle ship "Degosse Gua" were in production at this colony in last March. They have converted a half of this closed space colony into Colony Laser, Grips 2.

3. We intend to keep our eyes on this Colony Laser when and where they will be used.

4. We have attached a photo of the AEUG's finest squadron who have joined this surveillance mission for your information.

[redacted]

ティターンズのコロニーレーザー(グリプス2)について

U.C.0087.12.01

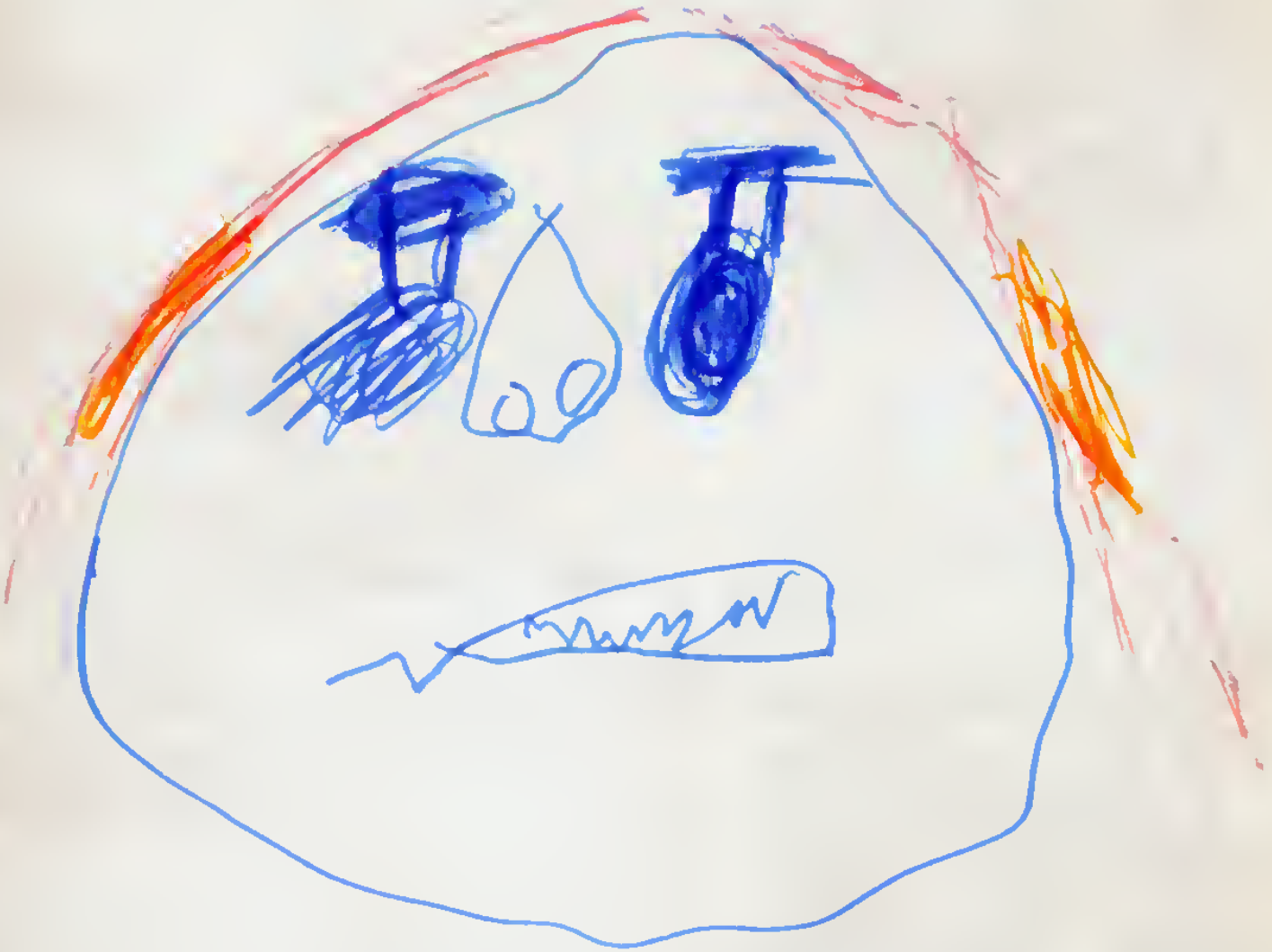
1. エゥーゴは11月30日(地球標準時)に行った偵察活動の結果、ティターンズがグリプス2をコロニーレーザーとして完成させた、という結論に達しました。コロニーレーザーは一年戦争時にジオン軍が使用した大量殺戮兵器です。

2. グリプス2はもともとサイド7グリーンノア2と呼ばれた密閉型コロニーでした。グリプスはその愛称です。グリプスは以前より実質的にティターンズの軍事工場として機能しており、エゥーゴは本年3月の時点でRX-178(ガンダムMk-II)や戦艦トゴス・キアなどが建造中であったことを確認しております。この密閉型コロニーの半分をコロニーレーザーへと転用したのが、グリプス2になります。

3. コロニーレーザーがどのようなタイミングで、どこにめがけて使用されるのか、今後も注意を払い続けていきたいと思います。

4. 資料として、偵察に参加したエゥーゴの精鋭チームの写真を貼付しました。

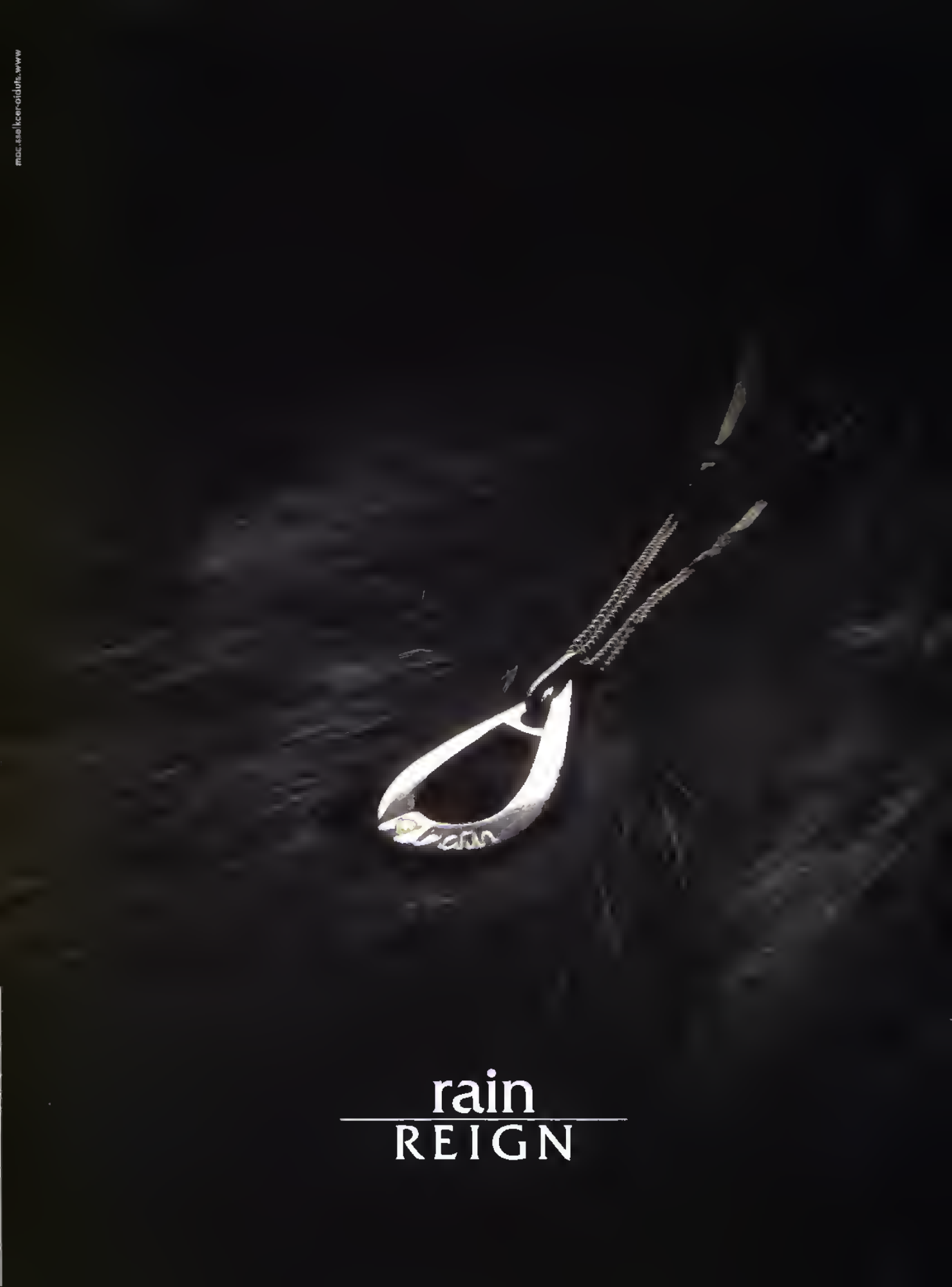
SINCE U.C.0093 REAH



OPEN TO THE PUBLIC

moc.raegreppep.www

mac.ssa|kcer-oiduts.www



From [Report to Anaheim Electronics stock holders]

PROPOSAL

C.0088年上半期のアナハイム・エレクトロニクス社株主向け報告資料より。ゼータ計画の出資者たちにカラバ空軍で行われたゼータ ガンダムの採用評価試験の模様を伝えている。これはアナハイム エレクトロニクス社がカラバ空軍に機体を貸し出す形で実行された。ハイパー メガ・ランチャーとミサイルベイを内蔵した大型のサブ ユニットや可動式ビーム キャノン フライングアーマーなど部分的に仕様変更されている。機体そのものはセータ ガンダムのままのようだが、報告資料ではこれを ストライク・セータ」と呼んで、出資者たちにさらなる協力をよびかけている。095~109ページの写真は全て同報告資料より。

IN THE SECOND HALF OF U.C.0087, *Strike Zeta* is the one of the main pillar for the mobile suit technology research section of *Anaheim Electronics*. This model which is now under evaluation test has been researched and developed at the request of *Karaba Air Force* and received investment from *Luo & Co.,Ltd.* in New Hong-Kong. This is the new model of our latest transformable mobile suit, *Zeta Gundam*. As you may already knew from the media report, *Zeta Gundam* is recognized as a symbol of spacenoid sovereignty for its impressive achievement.

Strike Zeta has overcome several problems which *Zeta Gundam* previously had. We simplified main wings mechanism from 3 steps to 2 steps and changed main thruster to thermonuclear ramjet engine from thermonuclear jet/rocket engine by limiting its usage inner space only. By these modification, we have succeed in reduce costs, get productivity increases, increase body strength, and ease maintenance.

Also the sub-unit and the flying armor is equipped for anti-radar stealth effect which will decrease hit rates from enemy and enhance pil surv vability, that had been getting worse since "the regulation on splaying of minofs ky particles" Ad t ally we h ve suc eded in increase of anti-air capability by equipping the *Mega Lau her* and extra weapon , which were very

transf support

specific we *Strike Z*

be

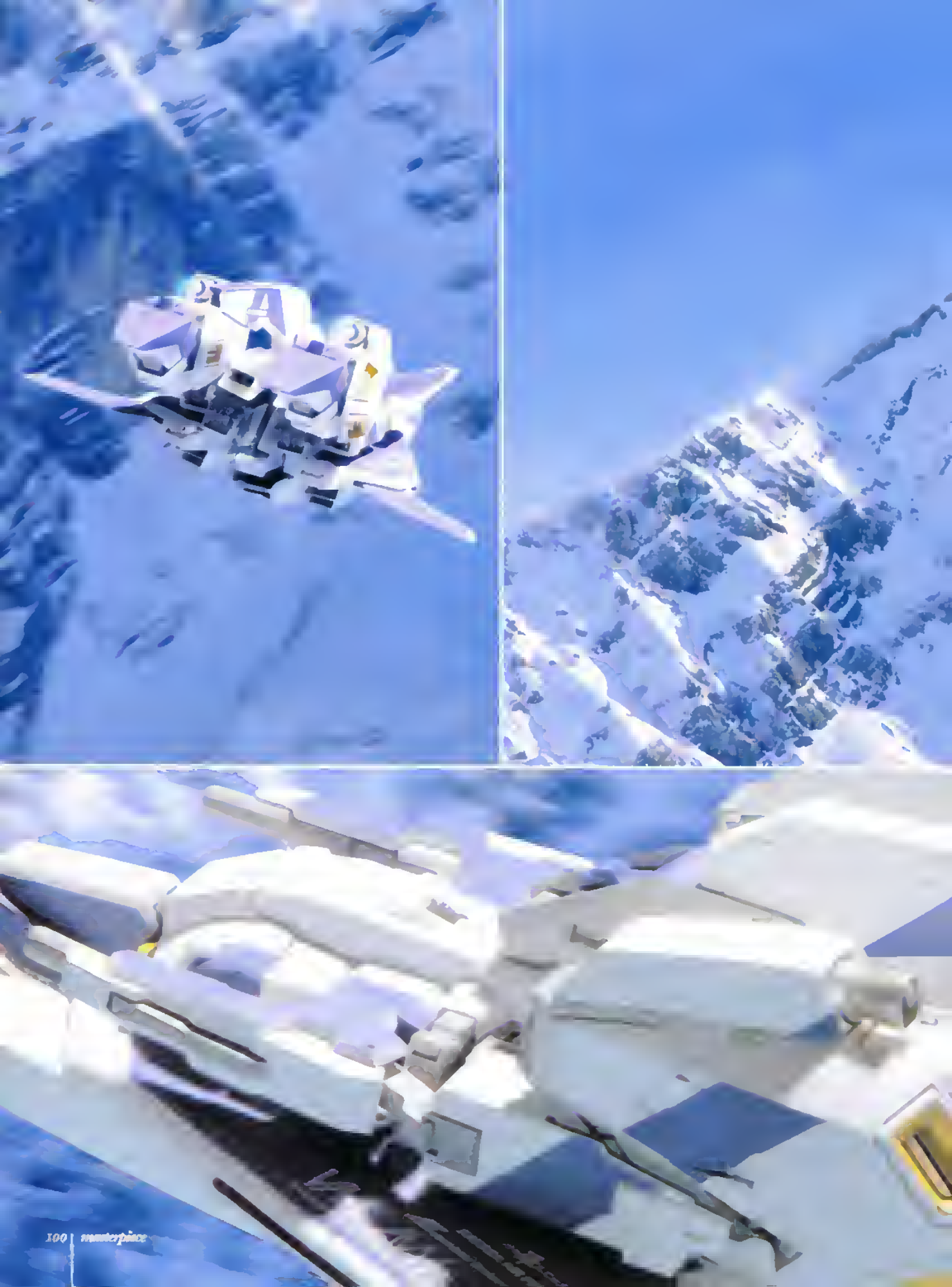
AE
ANAHEIM ELECTRONICS

スペックから読み解ける上位構想

By SIG-N シグ・エヌ

モビルスーツは本来、敵基地や艦艇攻撃などにおけるクローズド・コンバットで各個撃破を任務とする戦術戦闘兵器と考えられている。しかし、ゼータ・ガンダムのスペックや戦闘記録などを分析していくと、当時のアナハイム・エレクトロニクス社の開発チームにはもっと上位の構想があったのではないかと思えてならない。確かにアーガマに搭載されていた実戦経験を持つ唯一の機体の戦闘記録は他のモビルスーツと同様、対モビルスーツ戦闘に始終していたことを示しているが、そういった戦闘をするだけではゼータ・ガンダムの能力はオーバースペック過ぎるのである。例えばゼータ・ガンダム最大の武器ともいえる大気圏再突入能力および、突入後に発揮される高いポスト・リエントリー性能はモビルスーツが本来持つべき能力を大きく超えている。

攻撃、防御、空間機動において大きく制約を受けるバリュートシステムなどを使ったモビルスーツの大気圏再突入はリスクの極めて大きな作戦であったとも言える。事実、降下したモビルスーツのうち、相当数が地上からの攻撃により撃破された。また訓練を受けているとはいえ、無重力下から重力下への急激な環境の変化や降下の際にかかるGによるパイロットの体力の消耗は激しく、降下後の戦闘時間も限られてくる。しかしゼータ・ガンダムの場合はウェイブライダーを用いた突入方式により、攻撃、防御、空間機動に大きな制約を受けることなく作戦の継続が可能で、パイロットの負担も軽くしている。また降下後の空中では敵戦闘機とも渡り合えるほどの高機動性能を持った航空機として、対地攻撃などをそのまま行えることが判明している。ゼータ・ガンダムの高機動性能を振り返ると、このモビルスーツが持つ本来の姿は、前世紀の戦略攻撃機そのままに「単機」ではなく、複数機が編隊を組み、大規模な戦略基地を大気圏外から降下・攻撃し、上空を制圧後そのまま地上に降りて残存兵力を各個撃破し、完全に基地を掃討して制圧するための総合的な戦略兵器として開発されたと推測できないだろうか？



The siblings darling reentry to the atmosphere

Satellite orbit —— 310kilometers above Dakar

DAKAR, Senegal (UT)—Siblings were rescued by 91st rescue squad of EFF Dakar base on December 7th. They had been missing since the accident of luxury space liner "Prospero" of Faluna Aero-space Liner, at satellite orbit, on December 6th. Asagi Briggs (15) and Takuya Briggs (10) both had just minor injuries when the reentry to earth's atmosphere all by themselves.

EFF's rescue plane was dispatched right after the call from the captain who escaped from Prospero. On the next day, Briggs siblings were found and transported to A.C. Clarke base. While being carried on a stretcher, Miss Asagi answered to medies and the press "I'm fine" in a weak voice with her eyes shut tight. To the press's question "How did you two managed to get into the rescue capsule without normal space suit?", she smiled and answered "With my brother, I just could jump calmly."

Reentry Pod "Arthal" which Briggs siblings used had mechanical failure and likely to made an reentry in the manual mode. Burn marks left on the pod indicated that the second attempt had worked although the first reentry had failed. Another accident that the broken parachute caught in the pod occurred after reentry, but the Karaba and the TITANS transformable mobile suits came for rescue. They cut off the troubled parts by their beam-saber and saved the pod. The two transformable mobile suits flew away after they handed reentry pod to 91st rescue squad.

Miss Asagi found bruised on her right arm when she was rescued, but there was no bone fracture. They are planning to go back to the New Hong Kong after a close examination at the hospital in A.C.Clarke base.

新聞記事「姉弟 決死の大気圏突入」=U.C.0087年12月6日の豪華客船プロスペロー号落下事件で子供たちだけで大気圏突入に成功し、生存者がいたというもの。記事によると「カラバの可変モビルスーツが救出に現れた」とある。しかしU.C.0087年時点でカラバには可変モビルスーツは配備されていない。おそらく同時期にカラバで評価試験中だったこのゼータ・ガンダムが緊急発進したと思われる。

時代を作るモビルスーツ

Mobile Suit shape the next generation

By ISAKU OKABE イサク・オカベ

兵器はそれぞれの時代の産物であり、歴史が兵器を作ってきた しかし稀に時代の常識を超える兵器が突然現れることがある 旧世紀の地球の戦争に用いられた弾道ミサイルや、シオン独立戦争、いわゆる一年戦争に出現したモビルスーツがその例といえよう。それらの兵器は後の戦争のあり方だけでなく、世界そのものの様相すら変えてしまった その意味では兵器が歴史を作ったのである。

そのモビルスーツの開発の歴史の中から、おそらく戦争と世界の歴史も変える可能性を秘めた機体が、かつて現れたことがあった。ゼータ・ガンダムである

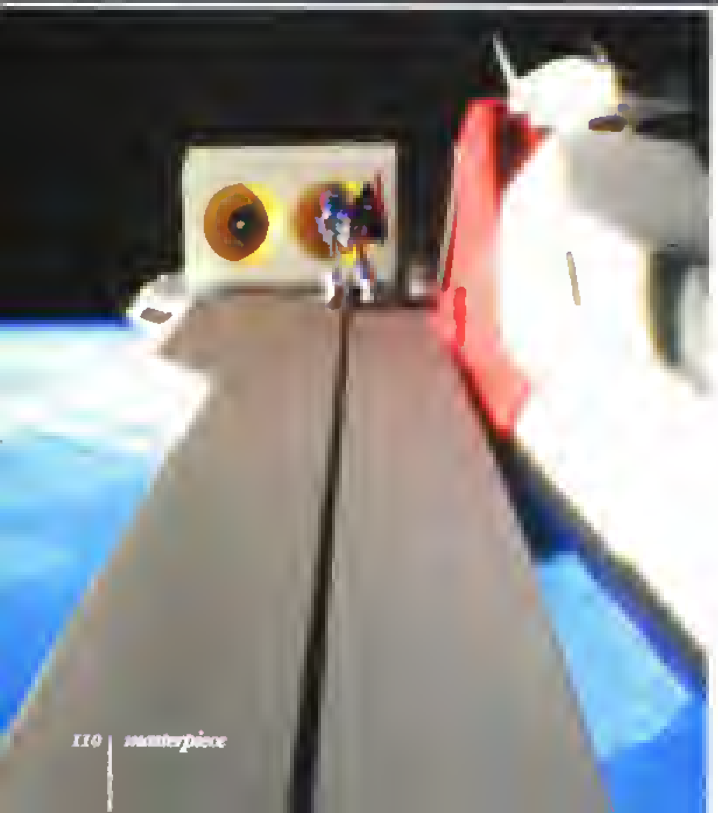
ゼータ・ガンダムは可変形態モビルスーツとして、ウェイブライダー形態に変形することによって単独での地球突入が可能であった つまり宇宙からのモビルスーツによる直接の地球強襲を可能とする機体だったのである 一年戦争後数年を経たUC 0080年代中期においては、エゥーゴやアクシズなど、宇宙の反地球勢力が割拠していたのだが、それらの勢力のモビルスーツをはじめとする機動兵器の中で、このような先進的な戦略を可能とする能力を有するのは、ゼータ・ガンダムだけであった

さらにゼータ・ガンダムは武装の面でも画期的な機体であった ゼータ・ガンダムの武装は、中距離のビーム・ライフルや近接戦闘用のバルカン砲とビーム・サーベルに加えて、短距離戦闘用の実体弾武器であるグレネード・ランチャーを装備し、対モビルスーツ戦に隙のないものであった。しかしそれ以上に、ハイパー・メガ・ランチャーを運用することによって、大遠距離戦闘や対艦船戦闘にも強大な破壊力を発揮することが可能だったのである。

もちろんゼータ・ガンダムはモビルスーツの技術的発展においても時代を画する存在である。ゼータ・ガンダムはUC 0080年代中期の可変モビルスーツとして最も高性能な機体であったが、同時代のティターンズのアッシマーやギャプラン、ガブスレイ、ジュピトリスのメッサーラが、いずれもモビルアーマーに変形能力を与えるものとして開発されたのに対して、ゼータ・ガンダムはあくまでもモビルスーツの可変形態化を目指したものであった そのためそれら同時代の可変モビルスーツの中でもコンパクトにまとまった機体となった

可変形態と小型化という、両立し難い要求を同時に満足させるため、ゼータ・ガンダムではジェネレーターを胴体内ではなく脚部に置くなどの、機内配置の抜本的な見直しが行われている 加えてグリプス戦役の後期では、バイオセンサーを装備することによって、操縦者の意思や操作により敏感に反応しうる機体となっていた このようにゼータ・ガンダムは革新的な技術を積極的に導入して、全く新しい戦略構想を可能とするモビルスーツとなったとともに、戦術面でも従来のモビルスーツを超える能力を有していたのである。▶▶

イサク・オカベ 1[illegible]4年[illegible]生まれ 軍事評論家。コレートヤマダ名義で、軍事雑誌『MS[illegible]ト』の編集長などを経てフ[illegible]、各種軍事雑誌や模型雑誌に軍事[illegible]ムを寄稿。代表[illegible]オ MS部隊[illegible]干[illegible]オ M[illegible]な[illegible]著書に『傑作MS列伝』『ムキャノンII』な[illegible]ど多数。[illegible]ス番組、軍事、安全保障問題の解説も[illegible]。



ゼータの戦場

Battlefield of Zeta

しかしながら実際の戦闘の局面において、ゼータ・ガンダムはその卓越した能力を発揮することはできなかった

ゼータ・ガンダムの最大の戦略的革新性である単独地球降下能力は、地球連邦軍とその権力を簒奪したティターンズの中枢であるシャアブローへの奇襲、もしくは強襲を第一の目的として求められたものであるが、実際には連邦軍・ティターンズはエゥーゴの強襲降下作戦を察知して、早々にジャブロー放棄の方針を決定しており、エゥーゴのシャブロー強襲は徒労に終わっている

しかもその地球降下に際しては、エゥーゴも迎撃のティターンズ部隊も、最新の装備であるバリュートを初めて実戦に使用した 特にエゥーゴはフライングアーマーと呼ばれる補助機体を導入することによって、ガンダムMk IIでも自力での大気圏突入と大気圏内飛行を可能にした ゼータ・ガンダムはウェイブライダー形態に変形しても自力での大気圏

・カイと部下パチのセ
メガ・ランチャーを装備して
マのカタパルト上で発進待機中のゼー
ノヌム インヨアーガマの前に展開しているゼー
タ・ガンダムとリック ディアス 写真ニエウー

脱出は不可能であり、その意味では結果的にゼータ・ガンダムの変形能力は不要だったのである。

もちろんゼータ・ガンダムは変形することによってモビルスーツ単独で大気圏内を飛行でき、フライングアーマーを用意しなければならない非変形モビルスーツよりも、運用上の柔軟性が大きいことはいうまでもない しかし実際の戦況の推移の中では、エゥーゴがあまりにも早期にジャブロー強襲作戦を実施し、しかも連邦軍・ティターンズがジャブローを放棄してしまったことで、ゼータ・ガンダムの変形能力と大気圏突入能力はその戦略的な意義を実証する機会を得られなかったのである。

ゼータ・ガンダムの宇宙での戦術的な能力もまた、実戦において存分に発揮されたとはいい難い。ゼータ・ガンダムはただ1機が完成した段階で、早々に実戦に投入され、その技術的な先進性と画期的な性能によって、エゥーゴの象徴ともいうべき存在となった。ゼータ・ガンダムという名称も、一年戦争当時の連邦軍のRX 78ガンダムの名声に 開発経緯や技術的な関連はむしろ希薄であるものの あやかり、地球連邦や各コロニーの 般大衆への知名度を高めることとなったであろう。視点を変えれば、ゼータ・ガンダムはエゥーゴにあっては、むしろプロパガンダのスターとしての価値を重んじられた、と考えることもできよう。

それがためにゼータ・ガンダムはティターンズのモビルスーツ部隊の主敵と目され、集中的に戦闘を挑まれることとなった。その結果、ゼータ・ガンダムは主に敵モビルスーツとの格闘戦に従事することとなり、実際に対モビルスーツ戦で大きな戦果を挙げている。それはもちろんゼータ・ガンダムの性能に負うものでもあるが、それ以上にパイロットの能力によって、運用が格闘戦に傾いてしまったことにもよるといえるだろう。しかし本来、ゼータ・ガンダムの高速と高機動性は、敵艦隊に対して有利な位置に迅速に占位して、ハイパー・メガ・ランチャーの強大な火力で対艦攻撃を行うといった戦術も可能とするものであったが、そのような任務に就くことはついになかったのである。

1＝破損や不具合のある箇所は、そのブロックごと交換されることが多い。写真はゼータ・ガンダムのスペアパーツの納品風景。各ブロックとの接合箇所にはカバーが付けられている。／2＝推進材タンクを兼ねているフロントアーマーや装甲板としてのフロントアーマーなどがあり、作業によって装備交換をしていたようだ。写真＝エゥーゴ

ゼータ・ガンダムの発展

Development of Zeta Gundam

ゼータ・ガンダムは前述のように多くの革新的技術を実現したが、それは同時に製造コストの高騰を招き、整備や保守にも多くのマンパワーや経費を要することとなった。ゼータ・ガンダム自体は多分にアナハイム・エレクトロニクス社の技術デモンストレーターとしての性格を有していたために、コストが高く、整備・保守が困難であることは致し方ないともいえる。しかしゼータ・ガンダムの新技術を生かしつつ、低コストで運用の容易な量産型を開発することは多くの困難を伴ったものと考えられ、量産型の開発自体も当然多額の経費を要することとなったであろう。グリプス戦役後の弱体化した地球連邦軍には、高性能で高度な機能を備えてはいても高価なゼータ・ガンダム系可変形態モビルスーツを採用する余裕はとてもなかったはずで、ゼータ・ガンダムは量産機として採用されることはなかった ▶▶

Anaheim Electronics MSZ-006 ZETA GUNDAM

所属:不明　建造:アナハイム・エレクトロニクス社

ゼータ・ガンダムの電子機装備テストの模様と思われる写真
型式番号、所属、スペックなどの詳細は不明

U.C.0087

もちろんアナハイム・エレクトロニクス社としても連邦軍の状態は承知しており、他の軍事組織にもゼータ・ガンダムの量産型・派生型を提案したようである。エゥーゴに近い関係にあった地球の反地球連邦組織カラバに対しては、高速と優秀な飛行運動性を持つ機体として、ゼータ・ガンダムを基にした地球大気圏内専用型が試作され、デモンストレーションが行われたとする資料もある。しかしティターンズの壊滅と連邦政府の弱体化・政策変化に伴ってカラバの運動も発展的に縮小され、ゼータ・ガンダムそのものはカラバにも採用されずに終わったようだ。

しかしながらゼータ・ガンダムが実現した可変形態技術は、エゥーゴ以外のモビルスーツ開発に多大な刺激を与えている 特に旧ジオンの系統であるアクシズでは、作業用モビルスーツから発展した戦闘用可変モビルスーツのガザ系列とは別個に、可変形態と大気圏内飛行能力に加えて、機体の分離機能まで盛り込んだバウが開発されており、ゼータ・ガンダムからの影響を窺わせている。バウについては、あるいはアナハイム・エレクトロニクス社からの何らかの技術協力があったことも考えられる。

1、2、3＝ゼータ・ガンダム電子戦装備のテスト風景。詳細不明。アナハイム・エレクトロニクス社株主向けパンフレット（U.C.0088）より

Earth Federation Forces RGM-86R GM III

所属：地球連邦軍　建造：地球連邦軍（アナハイム・エレクトロニクス社）
全高：18.6メートル（61.0フィート）　頭頂高：18.0メートル（59.0フィート）
本体重量：36.6トン（35100ポンド）　全備重量：56.2トン（123900ポンド）
ジェネレーター出力：1560キロワット
スラスター総推力：31200キログラム（179000ポンド）
センサー有効半径：11960メートル（7.4マイル）
装甲材質：チタン合金、一部ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、80ミリバルカン砲×2、
肩部ミサイルポッド×2、腰部大型ミサイルランチャー×2、シールド

グリプス戦役後の地球連邦軍の主力モビルスーツ
ミサイルポッドをはじめ多くのオプションを装備できる

U.C.0088

1、2、3＝地球連邦軍の各基地に配備されたジムIII 肩とシールドに入った「041」のナンバーは この基地における「第4小隊1番機」を示している。

ゼータ・ガンダムの量産機としての採用を阻んだのは、その高い価格や整備・保守の難しさばかりではなかった。ゼータ・ガンダムの基本操縦はともかく、その高性能と高度な機能を十分に引き出すことは、普通のパイロットには容易ではなかった。逆に言えば、ゼータ・ガンダムを乗りこなせるパイロットは少なく、その能力を訓練や教育によって育てるには多大な手間と経費が必要とされた。

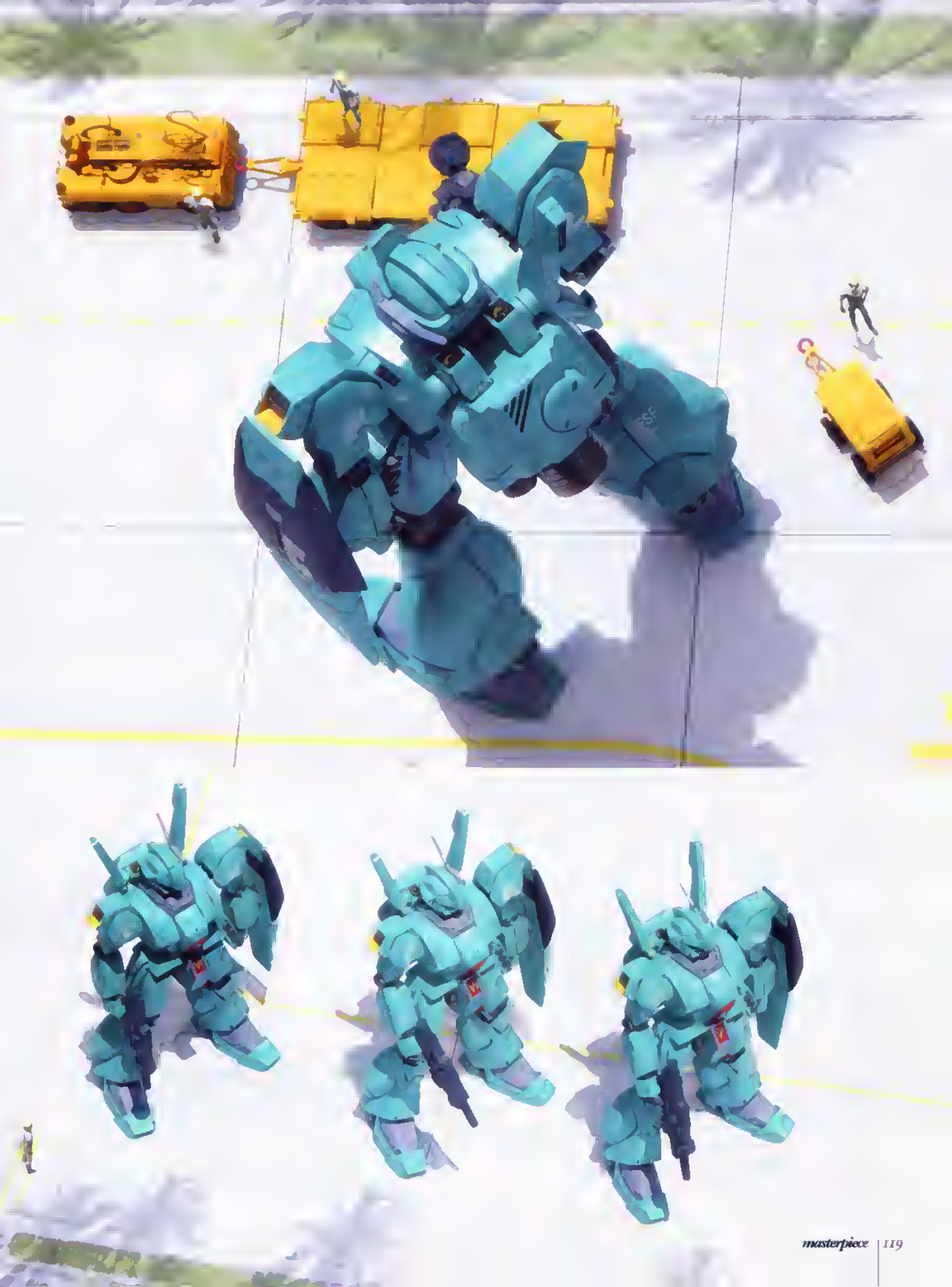
しかも連邦軍やエゥーゴ、カラバには、生産コストが安く、操縦も容易な主力モビルスーツとして、ジム系列のネモやジムIIIが行き渡っており、それが洗練・改良されてジェガンへと発展していった。これらの量産機、もしくは一般パイロット向けの機体は、特殊な高性能機との戦闘ならばいざ知らず、相手側の量産機との戦闘には十分な性能を有しており、調達価格も安く、整備性に優れ、パイロットの養成訓練にも特別な配慮が必要ないなど、多くの面で実用性に優れ、実質的に各勢力の主力機となったのである。

Anaheim Electronics RGM-89 JEGAN

1、2、3ージェガン。地球連邦軍がジムシリーズに代わる主力機として制式採用したアナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ。写真の面に入った「93」のナンバーは「第3小隊3番機」を示している。

[illegible]：アナハイム・エレクトロニクス社
全高：20.4メートル（66.9フィート）　頭頂高：18.8メートル（61.7フィート）
本体重量：21.8トン（47,900ポンド）　全備重量：41.8トン（91,700ポンド）
ジェネレーター出力：1870キロワット
スラスター総推力：[illegible]
センサー有効半径：14300メートル（地上目標）
装甲材質：チタン合金セラミック複合材
武装：[illegible]ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、
グレネード・ランチャー、シールド

U.C.0093



Anaheim Electronics MSZ-010 ZZ GUNDAM

所属:エゥーゴ　建造:アナハイム・エレクトロニクス社
全高:22.11メートル(72.5フィート)　頭頂高:19.66メートル(65.2フィート)
本体重量:32.7トン(72002ポンド)　全備重量:66.4トン(150797ポンド)
ジェネレーター出力:7340キロワット
スラスター推力:21700キログラム(47800ポンド)×2
14400キログラム(31700ポンド)×4
(前推力)101000キログラム(222700ポンド)
センサー有効半径:16200メートル(10.0マイル)
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ダブル・バルカン×2、ハイ・メガ・キャノン、ハイパー・ビーム・サーベル×2、
ダブル・キャノン、21連装ミサイル・ランチャー×2、
ウイングシールド、2連装メガ・ビーム・ライフル

分離合体変形を実現させた大型モビルスーツ
グリプス2争奪戦で戦力を失ったアーガマに配備される

U.C.0088

1、2=ダブルゼータ ガンダム 写真の詳細は不明であるが、一時期エゥーゴの旗艦を編成していたアーガマ隊に配備されていたものと思われる。民間人パイロットが搭乗していた 写真=UT社

方、アナハイム・エレクトロニクス社はゼータ・ガンダムに続いて、さらに高度な機動力と強大な火力を持つ、可変形態型重モビルスーツともいうべき機体を開発している。それがダブルゼータ・ガンダムで、機体は3部分に分離して独立して操縦が可能。武装にはハイメガ粒子砲を固定装備し、携行武器のビーム・ライフルも2砲身型のメガ・ビーム・ライフルに強化され、モビルスーツでありながら戦艦並みの火力を持っていた。しかしながらダブルゼータ・ガンダムは機体価格など量産性をほとんど度外視して、技術的な限界に挑戦した機体であり、火力を重視したためにエネルギー消費が大きく、運用性にも制約があり、エゥーゴに試験的に提供されて実戦に使用されたが、制式採用されることはなかった。

ダブルゼータ・ガンダムの後、アナハイム・エレクトロニクス社でのゼータ・ガンダム系列の開発は、実用性の向上に重点を移すこととなる。その成果が"洗練されたガンダム・ゼータ"、すなわちリ・ガズィである。リ・ガズィではゼータ・ガンダムの基本機体の良さを生かしつつ、コスト低減と運用性を目指して可変形態機能を廃して機構を簡略化し、機動力と火力は背負い式のブースターともいえるバックウェポン・システムに集約させている。

Anaheim Electronics RGZ-91 Re-GZ

所属：地球連邦軍　製造：アナハイム・エレクトロニクス社
全高：21.5メートル(70.5フィート)　頭頂高：20.5メートル(67.3フィート)
本体重量：24.7トン(54400ポンド)　全備重量：55.2トン(121700ポンド)
ジェネレーター出力：2550キロワット
スラスター総推力：67600キログラム(148000ポンド)
センサー有効半径：14200メートル(8.82マイル)
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：バルカン砲×2、2連装グレネード・ランチャー、ビーム・サーベル、
ビーム・ライフル、ハンドグレネード×2、シールド、
バックウェポン・システム(ビーム・キャノン、ミサイルランチャー)

低コストなゼータガンダムを目指して開発された
可変機能を省略した非変形モビルスーツ

U.C.0091

リ・ガズィの運用構想は、バックウェポン・システム装着形態で高速進出して、大火力で先制攻撃を加え、格闘戦が必要とされる戦術的状況になれば、バックウェポン・システムを投棄してモビルスーツ本体で戦闘するというもので、限定的な可変形態モビルスーツであったともいえようゼータ・ガンダムのような完全可変形態に比べれば、戦術的な柔軟性には多少欠けるが、機構の簡略化による運用性の向上とコストの低減は、それを補って余りあると考えられたのである。

ゼータ・ガンダム系列では、このリ・ガズィが最も実用性の高い、言い換えれば量産化に最も近づいた機体であったといえる。リ・ガズィはいわゆる"シャアの反乱"の際に、エゥーゴの後身ともいうべき、連邦軍の外郭部隊"ロンド・ベル隊"で試験的に実戦投入され、良好な成績をおさめたといわれるが、"シャアの反乱"で疲弊した連邦軍では、ジェガン系列以上の高性能機を導入することは困難で、リ・ガズィも試作のみで終わっている。

ゼータの歴史的意義

The historic significance of Zeta

ゼータ・ガンダムはUC0087年に完成した直後から、グリプス戦役に投入され、翌年のいわゆる"第1次ネオ・ジオン紛争"の終末まで第一線で使用され、ティターンズやネオ・ジオンの高性能モビルスーツの多くと戦い、互角以上の戦績を示した。その基本構想はリ・ガズィに引き継がれ、UC0092年の"シャアの反乱"の勃発時にはロンド・ベル隊最強モビルスーツの地位にあった。

モビルスーツの技術や装備が急速に進歩し、ニュータイプや強化人間専用の機能も実用化され、各勢力で次々に新型のモビルスーツやモビルアーマーが出現したこの時代に、同じ基本構想の機体がこれだけの期間にわたって有力なモビルスーツとして使われ続けたことは、ゼータ・ガンダムがその時代を突き抜けた性能と機能を備えていたことの証左であろう。

ゼータ・ガンダムは実戦において、ついにその真価を発揮する機会を得なかったが、それも裏を返せばゼータ・ガンダムが当時のエゥーゴの戦略構想や戦術的要求すらも超越した機体であったから、と考えることもできるかもしれない。ゼータ・ガンダムの性能が十分に生かされなかったことは、ティターンズの横暴で残酷な対コロニー政策に端を発したグリプス戦役が、愚劣で無益な展開をたどったことを物語るものともいえよう。

ゼータ・ガンダムの系列はリ・ガズィで終わったが、脳波操縦兵器を搭載する特殊なモビルスーツを別にすれば、ゼータ・ガンダム系列を上回る性能と機能を持つ機体は現れていない。現在、モビルスーツの技術的な開発は、ダブルゼータ・ガンダムから"シャアの反乱"当時のνガンダムへとひたすら大型化していったことの反省から、小型化と高機動性の実現の方向を模索しつつあるといわれる。このような開発計画の中から、いずれはゼータ・ガンダムをしのぐ機体が出現することがあるかもしれない。しかしそんな将来の新型機といえども、時代に対してゼータ・ガンダムほどの超越性を示すことは、おそらくできないのではないだろうか。

1/100 ガオォのロールアウト式典で御披露に展示されていたゼータ・ガンダム 詳細は008〜033ページ 写真＝ユウヌケ ノリミ

EFSF

Resources.

Black Pepper
Makabi Koga

SOFTBANK Creative
Makoto Kushida
Takahiko Hara Ryuma Koshiba Hajime Murakami

008 ZETA GUNDAM in U.C.0091

MSZ-006 Zeta Gundam [restore model]
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Modeler's assistants; Hiroshi Hayakawa [studio RECKLESS]
Makoto Komatsubara [studio RECKLESS]
Makoto Ishikawa [studio RECKLESS]
RGZ-091 Re-GZ
Modeler; ayujyu
Anaheim Electronics's hangar
Set designer and set builder; Manabu Koga [Pepper Shop]
MSZ-006 Zeta Gundam [CG]
Computer graphics, Galaxy Polygon

Photographer; Yusuke Tsurumi [studio gambo]

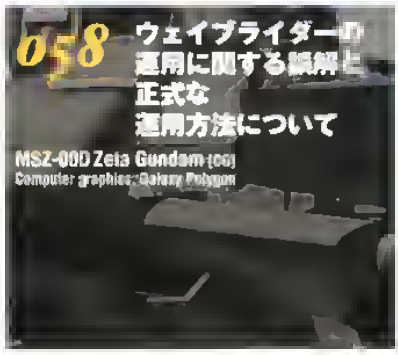
035 Fadeless souls 色褪せぬ魂

MSZ-006 Zeta Gundam [for Kamille Bidan]
Mobile Suit mode and Waveridar mode
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Modeler's assistants; Hiroshi Hayakawa [studio RECKLESS]
Makoto Komatsubara [studio RECKLESS]
Makoto Ishikawa [studio RECKLESS]
Garuda class Audhumla
Modeler; Eisuke Hino
Dodai Kai [1/400] and MSA-003 Nemo [1/400]
Modelers; Kazushi Kobayashi
Osamu Tsunoda
NRX-044 Asshimar
Modeler; Takuya Kanamori [WORKS]
RX-178 Gundam Mark II [Titans colors]
Modeler; Katsumi Kawaguchi

MSN-00100 Type-100
Modeler; Bobby Kanai
RMS-099 Rick Dias
Modeler; Sotra Sato
MSA-003 Nemo [for Argama]
Modeler; Osprey
MSA-005 Methuss
Modeler; ayujyu
Flying Armor
Modeler; Kazushi Kobayashi
RX-178 Gundam Mk-II [AEUG colors]
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Argama
Modeler; Kazunori Kuwabara
Argama's dock
Set designer and set builder; Manabu Koga [Pepper Shop]
Mechanic crew
Computer graphics; Galaxy Polygon

Photographer; Yusuke Tsurumi [studio gambo]

058 ウェイブライダーの運用に関する見解と正式な運用方法について



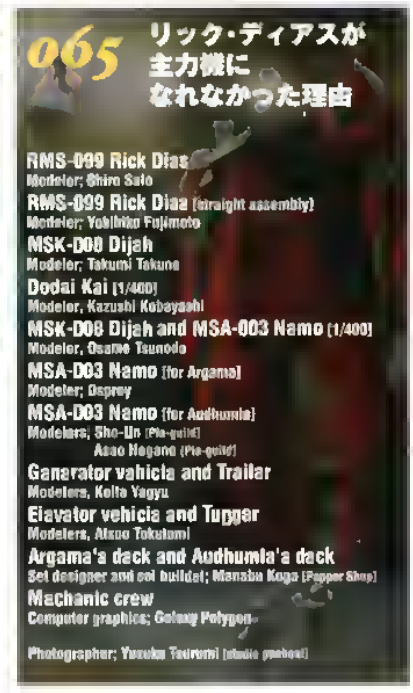
MSZ-006 Zeta Gundam [CG]
Computer graphics; Galaxy Polygon

062 ゼータ・ガンダムはなぜトリコロールに塗られたのか？

MSZ-006 Zeta Gundam [unpainted]
Modeler; Shigeyuki Hinomiya
Anaheim Electronics's factory
Set designer and
Computer graphics; Shinichi Hagihara [numbers graphics]

Photographer; Manabu Koga [Pepper Shop]
Hajime Sato [SOC]

065 リック・ディアスが主力機になれなかった理由



RMS-099 Rick Dias
Modeler; Shiro Sato
RMS-099 Rick Dias [straight assembly]
Modeler; Yoshiko Fujimoto
MSK-008 Dijah
Modeler; Takumi Takuno
Dodai Kai [1/400]
Modeler; Kazushi Kobayashi
MSK-008 Dijah and MSA-003 Nemo [1/400]
Modeler; Osamu Tsunoda
MSA-003 Nemo [for Argama]
Modeler; Osprey
MSA-003 Nemo [for Audhumla]
Modelers; Sho-Un [Pla-guild]
Asao Hagano [Pla-guild]
Ganerator vahicle and Trailer
Modelers; Keita Yagyu
Elevator vehicle and Tugger
Modelers; Atsuo Tokutomi
Argama's dock and Audhumla's dock
Set designer and set builder; Manabu Koga [Pepper Shop]
Mechanic crew
Computer graphics; Galaxy Polygon

Photographer; Yusuke Tsurumi [studio gambo]

002 Fake AO; Francheska
007 Fake AO; Wonder Land,co.
034 Fake AO; Jr MS Championship
061 AO; WING CO.,LTD
064 AO; NAMI CORPORATION
075 AO; OTSERPNAB CO.,LTD
094 AO; OPEN TO THE PUBLIC
093 AO; rain/REIGN
131 Fake AO; Colony Life
132 Faka AO; Air UNA

070 AEUG NEWS RELEASE U.C.0087

Kamille Bidan
Blex Forer
Quattro Bajeena
Illustrator; Kouji Nakakita

News Releases and News Papers
Fake writer; Ryota Fujitsu
Fake designer; Manabu Koga [Pepper Shop]
Translator; Genkae Mai
Yumiko Obara

077 a day of Dakar/ November 16, U.C.0087

MSZ-006 Zeta Gundam [for Kamille Bidan]
Mobile Suit mode and Waverider mode
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Modeler's assistants; Hiroshi Hayakawa [studio RECKLESS!
Makoto Komatsubara [studio RECKLESS]
Makoto Ishikawa [studio RECKLESS]

NRX-044 Asshimar [straight assembly]
Modeler; Yukihiko Fujimoto

Dodai Kai [1/400] and MSK-008 Dijah [1/400]
Modelers; Kazushi Kobayashi
Osamu Tsunoda

RX-160 Byalent
Modelers; Keita Yagyu

NRX-044 Asshimar
Modeler; Takuya Kanamori [ORIGINAL WORKS]

RMS-106 Hizack
Modelers; Keita Yagyu

Photographer; Manabu Koga [Pepper Shop]

095 PROPOSAL

MSZ-006 Zeta Gundam [Strike Zeta]
Mobile Suit mode and Waverider mode
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Modeler's assistants; Hiroshi Hayakawa [studio RECKLESS]
Makoto Komatsubara [studio RECKLESS]
Makoto Ishikawa [studio RECKLESS]

Weapons bay
Designer and Computer graphics; Galaxy Polygon

Apron of air force base
Set designer and set builder; Manabu Koga [Pepper Shop]

Photographer; Yusuke Tsurumi [studio panbeat]
Hajime Sato [KBC]
Fake writer; Gohsuke Suzuki

109 Mobile Suit 時代を作るモビルスーツ shape the next generation

MSZ-006 Zeta Gundam [Strike Zeta] Mobile Suit mode
MSZ-006 Zeta Gundam [for Kamille Bidan] Mobile Suit mode
MSZ-006 Zeta Gundam [restore model]
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Modeler's assistants; Hiroshi Hayakawa [studio RECKLESS!
Makoto Komatsubara [studio RECKLESS]
Makoto Ishikawa [studio RECKLESS]

Argama
Modeler; Kazunori Kawabara

MSZ-006 Zeta Gundam [FW suit mode]
Modeler; Toshinobu Matsumiya [Ma-guild]

RGM-96R GM III
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

RGM-89 Jegan
Modeler; Hirami Ioukai

MSZ-010 Gundam Double Zeta
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

RGZ-091 Re-GZ
Modeler; syujyu

Generator vehicle and Trailer
Modelers; Keita Yagyu

Elevator vehicle and Tagger
Modelers; Atsuo Tokutomi

Apron of air force base
Argama's deck
Anaheim Electronics's hangar
Set designer and set builder; Manabu Koga [Pepper Shop]
Mechanic crew
Computer graphics; Galaxy Polygon

Photographer; Yusuke Tsurumi [studio panbeat]
Hajime Sato [KBC]

masterpiece of HUGE ARMS
Anaheim Electronics MSZ-006 Zeta Gundam

マスターピース セータ・ガンダム
2006年10月13日　初版発行

企画 構成　Black Pepper
小松原博之
古賀 学
佐藤 元(SOFTBANK Creative)

執筆　高橋昌也
岡部いさく
水川竜介
藤原亮太
二宮茂幸
小倉信也

デザイン　古賀 学(ペンハーンショップ)

模型製作　小松原博之(studio RECKLESS)
川口克己
二宮茂幸(NYASA)
Syujyu
松村年信(プラギルト)
柳生圭太
早川広志(studio RECKLESS)
小松原 誠(studio RECKLESS)
石川 誠(studio RECKLESS)
銀之助 日野
徳富厚雄
小林和史
ホビー金井
さとうしろう
桑原憲徳
金城拓也(ORIGINAL WORKS)
西村友一(オスプレイ)
高嶺拓海
大鋼広海
Sho Un(プラギルト)
長野麻男(プラギルド)
角田 治
藤本幸彦

イラスト　中北晃二

撮影　鶴見祐輔(studio panboat)
古賀 学
佐藤 元

CGワークス　キャラクノーポリゴン
ハギハランンイチ(number4 graphics)

特撮監督
写真合成　古賀 学

別冊執筆　楠見 鼎
齋藤貴義
井上幸一
野田真外
岡野 勇

別冊イラスト　柳瀬敬之
ノンホルト
みなつきふたご

翻訳　玄関マット(アキバネットバンク)
小原由美子(SOFTBANK Creative)

製作補佐　原 睦彦(SOFTBANK Creative)
小芝龍馬(SOFTBANK Creative)
村上 元(SOFTBANK Creative)

企画協力　井上幸一
齋藤貴義

協力(50音順)　株式会社ウイング
株式会社ウェーブ
株式会社サンライス
株式会社バンプレスト
鈴木豪介
Hatula
大和真実

印刷 製本　共立印刷株式会社
発行人　若井卓実
編集人　豊田 稔
販売　浦島弘行　佐藤公昭　正本幹男　夏井義祥
制作業務　植草光男
編集　佐藤 元　串田 誠(G アミューズ編集部)
発行所　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052 東京都港区赤坂4-13-13
TEL 03-5549-1201(販売)
TEL 03-5549-1340(編集)

© 創通エージェンシー・サンライス
© SOFTBANK Creative Corp

ISBN4-7973-3462-2
Printed in Japan

落丁本、乱丁本は小社販売局にてお取り替えいたします
定価はケースに記載されております
禁無断複製

http://isbn.sbcr.jp/34622/
本書をお読みいただいたご感想、ご意見を上記URLからお寄せください

SoftBank Creative　studio RECKLESS

masterpiece
of HUGE ARMS
liner notes
2006←u.c.0106
Black Pepper SOFTBANK Creative
studio RECKLESS Pepper Shop
マスターピース・ライナーノーツ
SoftBank Creative
studio RECKLESS
©創通エージェンシー・サンライズ

リアリティの皮膜で模型をラッピングする

いまあなたが手にしているこの本『masterpiece』とは、いったい何なのか。U.C.0106年、サイド6・リーアで出版された書物、という設定でA.D.2006年の日本でつくられた書物――それは入れ子構造のメタフィクションというよりは、宇宙世紀(U.C.)と現実の西暦(A.D.)のパラレルな時間軸において生成されるガンダム・プロダクトのひとつというべきだろう。1979年にテレビ放映された最初の(ファースト)ガンダムの劇中人物たちが、現実の西暦になぞらえて設定された「U.C.0079年」に置かれて以来、ぼくたちのこころはいまも並行時間を生きている。

本書は、その並行世界を眺めるための覗き窓なのだといってもいいだろう。A.D.世界の人間がU.C.世界の分身をマニピュレートすることで、あちら側で組み上げ、こちら側で出力した対現実輸出商品。そう、あらゆる創造物はつねに現実に相対する真形の産物である。プラトンのイデア論に倣っていうなら、ここでいう「あちら側」とは、創造の源となる完璧な美が存在するイデア界のこと。いや、そもそも本書が主題とするモビルスーツMSZ-006こそが、プラトン的(まさにプラトニック=純粋な)理想世界で生まれた字義通りの名作(マスターピース)なのではないか。

ここからは、本書をあえて「こちら側」たる表層世界に出現したひとつの表現物として位置づけを試みたい。

先に、ぼくはこの書物を覗き窓にたとえたが、それは望遠鏡あるいは顕微鏡といったスコープの類――細部を大きく見せるための装置に似た機能をもっている。それはビジュアル面だけの話ではなく、テキストにおいても。ここでは「Zガンダム」の設定、ストーリー、デザインといったすべてを細部にわたって検討するなかから、MSZ-006という兵器開発の背景となる戦争、国際情勢、テクノロジーやメディアまでもが深読みされ、微細に掘り下げられていく。それらは、さらにアートディレクターの古賀　学によって模造デザインされた新聞記事やTV映像のカットの類、いうなれば「情報の小道具」となって見る者のリアリティを喚起していく(ここで筆者が用いる「情報の小道具」とは一般的な呼び名ではないが、たとえばポール・ヴァーホーヴェンが「ロボコップ」や「スタープ・トゥルーパーズ」で見せた劇中未来のニュース番組やコマーシャル映像、あるいはロバート・ゼメキスの「バック・トゥ・ザ・フューチャー」で劇中過去の落雷日時を示す古新聞や「フォレスト・ガンプ/一期一会」で主人公と実在人物との会見シーンを合成して見せたフェイク映像など、昨今の映画において主に時間的なリアリティを持たせる上で欠かせない仕掛けのひとつといえる)。

その意味では、宇宙世紀世界の出版物を模したこの本そのものが、ガンダム・シリーズという巨大なフィクションに対するフェイク小道具を、現実の西暦世界で大量に複製化した「書物の模型」なのだといってもいい。

あえて比較をしておくならば、これまでガンプラの造形的探求から派生した新設定は、その意味ではオリジナルの絵にキャンバスを継ぎ足して新しい絵を描くようなものだったといえるのではないか。それは一般的にはあくまで文字通りの蛇足にすぎないのだが、たとえばガンプラをメディアとしてイメージの読み書きをするガンダム・ファンにとって共通のトラウマと称される『ガンダム・センチネル』とは、「蛇」にどれだけ魅力的な「足」をいかに描き足せるかという究極の思考と創造の場であったはずなのだ。

あるいは一方、ガンダム20周年を記念して刊行された雑誌『G20』は、ガンダムのサブカルチャーへのエフェクトまでをも取材することによって、我々の視野を社会学的な領域にまで拡張する広角レンズのような役割を果たした。

それら補完的な動向とは対照的に、『masterpiece』はオリジナルの「Zガンダム」に新たな脚や羽根を描き足すことはしない。リアル社会との関わりも指摘されない。ここにおいて加筆されるべき余白はオリジナル・ストーリーの周囲にではなく、その行間にある。オリジナルのフレーム・サイズはそのままに、ただひたすら描かれえなかった細部を描き込んでいく。あるいは、歴史の解像度を高めていく。それは既存(=オリジナル)の情報の高品位化、ないしはリマスタリングといえるのではないか。

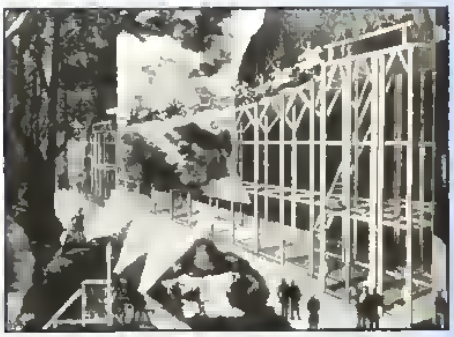
とはいえ、視覚的表層においては『masterpiece』の写真は、いわゆる高解像度的なシャープネスやクリアネスは有していない。ここでフィクションのリアリティやクオリティを高めるのは、写真のもつ真実を映す力ではなく、むしろ嘘をつくほうの力だ。鷲見祐輔の自作による「虫の目レンズ」とは、昆虫の視点を意識した接写レンズの一種と思われるが、このバグズ・アイが被写体の模型を縮尺1/144とは思えないほどのスケール感でそびえ立つものに見せている。

さらに驚かされたのは、今回の模型がC面(=チャンバー面。ガンプラを大きく見せるため、直角の接辺を45度で面取りして生まれる細長い台形の平面のこと)をあえてなくすと同時に、マーキングも極力少なくしてあるということだ。ガンプラの美学的なお約束ともいえるC面とマーキングはいずれもスケールモデルとしてのモビルスーツを肉眼で愛でる上では欠かせないギミック的要素であり、むしろ本来はカスタム・モデリングの腕の見せ所なのだが、本書の模型製作に携わった小松原博之はそれらをあえて排除することで、模型の側から写真というメディアに対して届くべき接近を果たしている。C面やマーキングのない機体がソフト・フォーカスぎみのレンズを通して見られたときの新新性――本書のリアリティとクオリティは、写真そのもののピントや情報量にではなく、むしろ見る者を驚嘆させるその視覚体験の鮮明さから生まれている。

そもそも写真というメディアがカメラのレンズを通して世界をある断片に切り取るという行為であるとすれば、写真家がいかなるレンズを選択するかはつねに意図的であり、意識的に行われる。被写体と記録媒体(銀塩フィルム、あるいはCCD)の間に存在するレンズは、カメラを手にした人間が視覚を通して世界といかに向かい合うかという意識の在処ともいえる。

模型同様にレンズを小さくするということは、カメラと撮影者をも模型の一部としてジオラマ内に組み込んでしまうことだ。それは従来の「模型写真」とは似て非なる「写真の模型化」と呼ぶにふさわしい。

さらにジオラマの源流をたどるなら、19世紀の見世物小屋としての「ジオラマ」の命名者が、ダゲレオ・タイプにその名を残している画家・写真家ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールであることをここで特筆しておく必要がある。伊藤俊治の『ジオラマ論』(リブロポート、1986　ちくま学芸文庫、1996)によれ



19世紀末のパリのオペラ座の光学的舞台装置の図解　背景画のスクリーンと機動にさまざまな光があてられ　リアルな情景を合成して浮かび上がらせる仕掛けと思われる。

楠見 清

ば、1822年にダゲールとシャルル・マリー・ブートンが制作した初期のジオラマは、透過性の布地に描かれた風景画にさまざまなライティングを行って情景を変化させる視覚体験装置、いわば新しい見世物小屋としての「映画の原型」だったという。19世紀のジオラマ館はさらに投影のリアリティを増すために前景に実物の岩や立体模型を導入し、第1回パリ万博(1855)の人気展示となりながらも、やがて写真術の発明や映画館の普及とともに大衆的な娯楽の座を新たな光学メディアに明け渡し、いつしか博物館展示やホビーに見られるミニチュア情景模型としてのジオラマ(ダイオラマ)に帰着していったことはおおよそ推察できる。

写真と模型は意外にも根源的なところで結び付いている。二次元と三次元の差はあるが、それらはともに世界を縮小サイズに模し写すための装置なのだ。とくに写真機のメカニズムとは、レンズから採り込んだ光像を交差反転し、フィルムの幕面に縮小して定着を行うものだから、その意味では、写真は光の模型である。ネガから焼き増されるプリントと、雌型から成型されるレジンキャストキットは、製造工程においても共通した複製技術に支えられている。

このように考察を進めていくと、縮小、定着、複製といった特性に加えて、手作業による着彩(人工着色/カラーリング)、細かな修正(レタッチ/リファイン)、さらには展示・保存方法(額装　ケース)に至るまで、写真と模型はじつに取り扱いかたのよく似た技術なのだということに気づかされる。さらに現代においては、デジカメや三次元スキャナの出現によって、それらは同様にデジタルデータとして加工処理の可能な情報になったといってもいい。

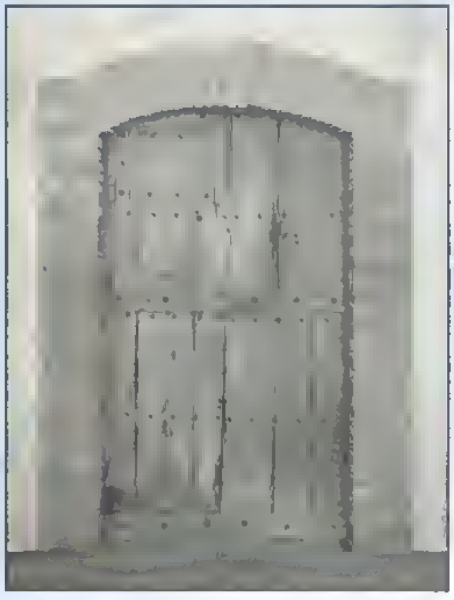
実際『masterpiece』のビジュアルは、1/144スケールのZガンダムの模型に対して同スケールのフィギュアではなく、3D-CGでモデリング、レンダリングされた画像を合成するという手法でつくられている。

旧来のジオラマの模型技術やそのイメージが現代ではSF映画の特殊撮影に援用されていることは前述の「ジオラマ論」でも指摘されているが、本書に至っては模型制作、撮影、CG制作、画像加工といった一連のプロセスを通じて、あたかも『Zガンダム』の実写版映画の特撮パート(正確にはそのスチル)を作るかのような作業が展開されたといってもいい。たとえば、表紙にも使われているアナハイム・エレクトロニクス社・グラナダ工場のカットにおいては、室内照明の並ぶトラス天井はじつはテクスチャーを施した平面に小さな窓を開けて、その上から本物の室内灯を照らして複数の光源に見せかけたものなのだという。従来の模型、あるいは模型写真の常識からすればフルスクラッチのトラス柱に豆球をひとつずつ取り付けて完成させられるべきところだが、ここでは照明効果も含め、むしろリアルな写真映りという着地点から逆算して、もっとも効果的な撮影セットが、まるで3D-CGでテクスチャー・マッピングを施すように薄っぺらな張りぼてで組まれているというのだ。

張りぼての建物のセットや背景画は、映画界では広義での「絵」(描かれたもの)を指すものとして「美術」と呼ばれるが、ここでぼくはその「美術」をあえて狭い意味での「美術」と誤読することで、「美」(美的なるもの)に接続したい気持ちにかられる。たとえば、20世紀美術史における最大の謎のオーラにいまも包まれるマルセル・デュシャン。彼の遺作は、覗き穴を通して扉の向こう側を覗き込むと、ミニチュアの山や森を背景に裸体の女性の造りものが横たわっているという怪しげなジオラマ＝見世物小屋だったではないか。

そのデュシャンが遺したものに「アンフラマンス」(フランス語で極薄を意味する造語)という謎めいた言葉があるのだが、『masterpiece』のビジュアルを支えている限りなく薄っぺらなリアリティとは、まさにアンフラマンスな様態なのではないかとぼくは思う。物質と非物質(＝意識)、あるいは絵画(＝二次元)と彫刻(＝三次元)といった領域間を、「美」(美的なるもの)が横断する際にかろうじて存在が確認されるその仮想概念の皮膜は、ここにおいてはあちら側をこちら側に映す表層の皮膜として、物質としてのガンプラを包み囲むとともに、パラレルなふたつの時間宇宙の間を行き来するぼくたちの恍惚と愉楽をそっと――しかし、それは確実に――宿している。

楠見 清(くすみ・きよし)　1963年生まれ。美術評論家。「コミッカーズ」「美術手帖」編集長を経て 現在Art-on Research and Strategy主宰。ガンダム関連の仕事として 住吉雅恵のペンネームで「G20」に巻頭エッセイを連載していた時期がある。



マルセル デュシャン「(1)滝ちる水、(2)照明用ガス、が与えられたとせよ」1946-66年、フィラデルフィア美術館蔵
デュシャンが晩年秘密裏に制作し 死後遺言によって公開された傑作。写真(左)の扉にある覗き穴から見ると、写真(中)のような情景が見られる。逆に言えば、観覧者はこのアングルでしか作品を見ることはできないわけだが 制作中のアトリエの写真(右)からその全体像はミニチュアやオブジェを地形的に配置した一種のジオラマ装置であったことがわかる。

ガンダム最強王座決定戦「Black-Pepper」

ブラックペッパー
小松原博之×古賀 学のユニット名

斎藤貴義

はじめに言っておきますが、この本を世界で一番楽しめるのはオレです。

今やガンダムの造形を手がけたら「世界のトップランク」に位置するであろう造型師、小松原博之と、ポップアートの文脈から数々のオタクメディアをプレゼンし続けてきたペッパーショップこと古賀 学。オレにとってのビッグスターの2人がユニットを組んで「ガンダム」?!! いや、個人的な思いなんてすっ飛ばしても、これは相当な事件です。もう、本書をご覧になったのであれば、そこのところは充分に感じていただけるはずです。もちろん、豪華ライター陣のテキストも発見に満ちあふれ、読み応えは十分！

今やとてつもない規模に成長した「ガンダム」というカルチャー(と、言ってもいいでしょう？)に、新しい基準をもたらす衝撃作だと断言しちゃいます。

そもそも、この本のことを聞いた時のシチュエーションっていうのも衝撃的で、とある席で、お2人がオレを挟んで互い違いに語りかけてくるワケです。もう興奮しましたよ。本の企画がどうこういう以前に。何しろ、オレのマイヒーローのご両名ですから。ただ、その中で感じたのは「この2人が組むの？」という違和感でした。だって、ストイックに「シャープ」さを追い求める造形の求道師と、バスティーシュ的手法(いわば反則技？)で、どんな物でもポップに「可愛く」作り上げてしまうデザイナーですもん、正反対じゃないですか。

お付き合いさせていただいた中で分かったことですが、両名の間に人間同士の信頼感や友情があることは本当です。ただ、この「マスターピース」という作品に関して言うなら、ふたつの才能は、現時点で「歩み寄ろう」なんてなれ合いは全くありません。格闘技に例えるなら、2人はタッグを組んだワケではなく、対戦相手としてお互いを選んだのだと、オレはそう確信しています。

現実にはない物の模型(矛盾したジャンルです)を、いかに本物っぽく見せるかというレースで先頭を走り続けるランナーである小松原博之が、そのガチすぎる造形の凄みをよりインパクトをもって伝えるのには、模型雑誌に圧倒的に欠けている「ポップさ」が必要だったのでしょうし、「ガンダム占い」や「G20」を始めとする作品で「オシャレガンタム」というジャンル(下世話なカテゴライズですみません)を生み出してきた古賀 学が、ガノタデザイナーとしての思いを昇華させるには、生半可な造型物では満足しきれなかったのでしょう。

このユニットは、お互いが助け合ったり、補填しあったりすることを目的にした物ではないはずです。「自分の作品をベストな形で表現するため」いわば「利用するため」にお互いが選んだ「最強の敵」なのだ！ というのがオレの見解なのです。

撮影の現場に呼んでいただき、うきうきと出かけていったスタジオでは、凄まじいクオリティの造型物に出会いました。例えば、ゼータのメインスラスターに仕込まれた1/144の極限とも言える超絶スラスターベーンのディテール。それはまさに、小松原サイドからの必殺パンチです。普段の相手なら、このパンチを綺麗にくらうことで「造形」主導のワンサイドゲームになるところですが、今回ばかりは相手が違います。迎え撃つ古賀サイドは、その造形に負けじと、数日後には想像を超えたビジュアルプランを作り上げてくるのです。スラスターベーンを大胆に据えた紙面デザインは、最強のカウンターパンチです。とはいえ、いつものようにペッパーショップワールドに簡単に引きずり込める相手でないことはわかっています。それぞれが持つスキルとセンスを注ぎ込まなければ「負ける！」。目の前で繰り広げられる必殺技の応酬。そんな贅沢きわまりない夢のタイトルマッチを、オレは、ほぼ半年にわたって観戦してきたのです。こんな贅沢なリングサイドがあるでしょうか?!(ひょっとして、オレは幸運にもレフェリーの位置にいられたのかもしれません)造型サイドから見れば、圧倒的なメカの質感と、それを支える驚く程の精度を堪能できますし、デザインサイドから見れば、フォントの美しさに至るまで洗練されたグラフ雑誌のような気持ちよさが味わえます。何という至福の一冊！ 冒頭で書いた「オレが一番楽しめる」という理由はソコにあるのです。

あ、楽しみ方の奥義をバラしちゃいました(笑)。これで、読者の皆様も同列ですね。オレが楽しんだように、二度、三度と、存分にお楽しみください。

そうそう、このファイトの勝敗ですか？ まだ決着はついていません。「Black-Pepper」は、第一ラウンドを終えたばかり。激戦は、まだまだこれからです。

斎藤貴義(さいとう・たかよし) 1965年8月生まれ 1988年より構成作家として「笑っていいとも！」「ごきげんよう」などバラエティ番組をメインに担当、2006年8月より、雑誌あって休業。ぬいぐるみと、プラモデルと おしゃれカフェを愛する なんだかよくわからないジャンルの人「マスターピース」のタイトル名付け親

masterpiece crews & contributors

参加スタッフを50音順に並べました。
■プロデュース ■メッセージ ■担当したお仕事です

石川誠(studio RECKLESS)

■たまたま見かけた小松原氏の作品がきっかけで模型をはじめ イベントで小松原氏に作品を持ち込みで見てもらいそれがきっかけでstudio RECKLESSに入れていただきました
■自分では出来ているつもりでいた仕上げなども実はまだまだ甘く基本からやり直しています。プロの技術とはどういうものなのかを間近で見ることで実感できました この本でも細々お手伝い等をさせていただきましたが凄く勉強しました
■模型製作アシスト

studio RECKLESS

犬飼広海(無名)

■たた模型が作りたくてひたすら箱を書き続けて感激った。やっとの思いでデビューを果たすも業界の重たい空気に絶望し業界から姿を消す しかし模型への情熱がなくなったわけではなく 2005年小松原氏との出会いをきっかけに復活を決意！
■新潟の地で抜け殻のような生活をおくっていたところを小松原氏に救われた。小松原氏は扉の右手の「ナイフ」を見逃さなかった。「お前 モテラー なんだろう？ この扉はお前の生きる地じゃない。こっちに戻って来いよ」と。扉はまたあの世界に扉れるのか？ そう思うと目がとめどなく涙があふれた。今回の扉組に参し 恐縮とはいえこんなチャンスをくれたことを心から感謝したい
■模型製作
1 144ジェガン×3体(バンダイキット改造)

岡部いさく

■1954年生まれ みずかめ座でA型 埼玉県で生まれた東京育ち。あと"創作家"にもなるし 絵も描くし(ヘタだけど) F1とかクルマのことにも口を出したりして、もう何なんだろう？ ガンダムについては模型雑誌にちっぽら書いたのが始まりで とうとうサイト6のゼータ ガンダム創造原理主義系」という仮人間になってしまいました
■ガンダムの名前は1978～79年ころから聞いていたけど 思えば10何年か前に幼い子供に初めてガシャポンをさせたら 出てきたのが緑色い(ガ ノウム飛行形態)とおもう一つ何だったか、それがガンダム世界との出会いの本質的原稿だったのだなあ(違い目) そういえば"元祖SDガンダム"の ナイト百式"を百式に改造して作ってやったこともあったっけ、なんか子供をダシにして趣味を強めていったような
■テキスト(イサク オカベ様)

小倉信也

■1965年生まれ ニメ「プラネテス」の設定考証 コンセプトデザインを手がける。ガンダムでは「ガンダムザ ライド」のCGアートワーク、「ガンダム グリーンダイバーズ」「GUNDAM EVOLVE」シリーズで設定考証とグラフィックデザイン(モニターCG)を担当した。また実書房刊「ガンダムTHE ORIGIN」に宇宙艦隊の監修として参加 デザイナーからSF考証と 活動の幅は広く数多くの作品を手がけている。近作は「交響詩篇エウレカセブン」「タクティカルロア」「ウィッチブレイド」
■「グリーンダイバーズ」でゼータ-ガンダムの大気圏突入の監修をやっていた縁での参加です。扉は小扉 ガンダム的にはかなり"ポスト一年戦争"の考証担当で、グリーンダイバーズやイボルブ2は「Zガンダム」ですからね「Zガンダム」はその意のSFアニメの宇宙開発描写に大きな影響を与えたと思います ＡＣクラークの「地球光」を思わす独特の雰囲気に 南北戦争に対する深刻な洞察 加えて80年代ハードSFテイストに溢れた宇宙開発の未来技術描写 この本は そんな作品世界の中のトキュメンタリーです！ ガンダム創中派のあなた！ こりゃあ、たまりませんよ、まだまたガンダムやめられませんね！
■ウェイブライダー運用考察(ノンヤ オグラ様)

金重拓也(ORIGINAL WORKS)

■1984年富山県魚津市生まれ 高校の頃から模型作りに真剣に取り組むようになり、2004年からORIGINAL WORKS(オリジナルワークス)のディーラー名でワンフェスに参加 夏のキャラホビではPROJECT GXでガンダムX最盛のMSを発表中。
■よくガンダムの模型を製作するときにリアリティを高める工作をやりますが、何を指して"それ"がリアルなのかを考えながら工作をすることは扉さん扉はあまりないのではないでしょうか？ "それ"が存在する理由だとか動かいことを自分なりに考えながらの扉型も楽しいですよ～。今回はそんな扉しを満喫しました。
■模型製作
1 144アッシマー(バンダイHGUC改造)

マスターピースの製作にあたって成員人から見たグリプス扉役を「執金で逮捕されているディ と「企画扉金で扉営されているエゥーゴ(およびカラバ)」の扉突と扉扉してみました。

夢中で眺めた“模型”

井上幸一

青々、自分がいまだ小学校にも上っていなかったころのこと … 親戚のうちに遊びに行った折に、もうすでに中学生になっていた年上の従兄弟の部屋で、赤いレーシングカーのプラモデルを、夢中になって眺めていたことを覚えている。塗装はなされていなかったが、丁寧にデカールを貼って仕上げられていたその車体は、差し込む西日を受けて、木の本箱の上で輝いていた。いま思えば、素組にマーキング程度の仕上げだったと思われるが、おそらく自分が、オモチャではなく、“模型”という物を意識した最初の記憶なのだと思う。

あれから40年ほど経た今年2006年の初夏、再び”模型”を強烈に感じさせてくれた出来事があった。1年ほど前から密かに進行していたプロジェクト。その、大詰めが近づいていると、小松原、古賀の両氏から連絡が入ったのだ。
そして新宿の某所での邂逅。

その白いボディにブルーのマーキングが施された華麗な機体は、その姿を目にする者に対して強烈な存在感を訴えかけてくる。伸びやかで、且つ、切れのよいシルエット 計算されたディティールは余分な煩さを感じさせない。しばらく … 本当にしばらくの間、ただただ、じっと眺めさせてもらう。
「感動です」
どんな格好の良い言葉も、ウソになるように思える瞬間だった

そしてとうとう、本が完成を向かえようとしている。「マスターピース」——気負いや飾り気のない良いタイトルだと思う。読者の方よりちょっとだけ先に中を覗かせてもらったとき、新宿での初見の際に感じていたイメージが、そのままの記録写真となって目に飛び込んできた。記憶がまるで停まってしまったかのような錯覚 蒼空を切り裂くあの機体の姿が見事に切り取られ、記録されているのだ。

「機動戦士ガンダム」から5年後の1984年。ガンダムのシリーズ化を意識し製作された、起点とも言える「機動戦士Zガンダム」の放映からすでに22年の年月が流れた。一人の人間であれば社会人として世に出る時間を経たこのとき、新たな可能性を現出させてくれた小松原氏に。そして、その立体に刻まれたメッセージを、見事に誌面に反映させた古賀氏のセンスにエールを送らせていただきたい。

井上幸一（いのうえ・こういち） 1960年生まれ 山形県出身 玩具メーカーを経て 1983年 株式会社日本サンライズ（現 株式会社サンライズ）に 社名は（太陽の牙ダグラム）から始まり、80年代から90年代までのサンライズ作品で 企画 文芸 設定制作 などを担当 95年サンライズのデジタル部門「D1D」を立上げ 初代部長に就任 同時に「サンライズステーション」（旧 スティ サークル内）を設立 初代シスオペも務める。98年 最新鋭士ガンダム ズを基準 した 初のCG実写合成のテレビスペシャル単品「G SAVIOUR」の 企画 サ と て 最先端オ アメリカハリウッド映画制作会社を指揮する 近年では フルCG作品「機動戦士ガンダム MS IGLOO のプロデ サーを担当する傍ら ハンドメイドの二足歩行ロボットを通して 新たな科学技術開発者の育成を目指す「ROBO ONE」の公式単独興行なども担当。現在の肩書名は「企画開発室室長」
■プロデュ サー担当作品「G-SAVIOUR」「機動戦士ガンダム MS IGLOO」
■企画 制作参加作品「太陽の牙ダグラム」「装甲騎兵ボトムス」「機甲創紀ドノナ 」「銀河 イトル 」「機動戦士ガンダムF91」「同 0083」「同 Vガンダム」等 ■主な参加作品「魔神英雄伝ワタル」「勇者エクスカイザー 絶対無敵ラ 、イ 」他 多数

川口克己

■1964年、東北九州市生まれ 最初は1年の時に ンダムでガンダムに触れ ストリ ムへ スの一員として予備校時代から大学生時代を通算でモデラーとして過ごす 1985年にバンダイに入社 ガンプラの開発 ■伝統保といった単語に食わり 近年はイベントなど平通したガンプラ啓蒙活動をメイン■趣味のひとつとしている
■ガンプラの楽しみ方のひとつに、考証という要素があります 現実」は存在しないものをあたかも存在するかのように極端な嘘にならない程度の範囲で妄想を広げるガンダムセンチュリ やMSVの時代から今に続くそんな知的嘘遊は 折々でガノダムノーノをリードする役割も担ってきました 大真面目にガノダムと張り合う 嘘のウソを探して楽しむのもガンプラなら ここ一番の嘘にウソで嘘負をかけられるのもガンプラ 今回小松原さんが声掛けに食指した人達は食 そんな楽しみに魂を惹かれた人々 簡単になる方々もそんな気分を共有してもらえると嬉しいですね
■模型製作
1/100ガンダムMk-II ティターンズカラ
1/144バンダイMG改造

ギャラクシーポリゴン

■黄の記憶が無いため 生年月日と出身地は不詳 鳥で■して浜辺にっちあげられていたところを ちょうどトライアで通りかかった小松原氏に助けられる。その時にぎりしめていた投網から元漁師ではないかとも推測できるがそれもまた定かではない。たまたまパソコンで3D ソフトを触ってみたところ 意外とモデリングが簡単そ たったので3DCG用として使ってもらうことに その後ギャラクノーツインス1号としてギャラクシーソノ 2号とタッグを■むわけたが とにかく伸が長いとい たけで今のところこれといった組織効果は無し ギャラクシーポリゴンというネーミングはアルタ■の24時間喫茶店で帆方に ふと■によぎったイメージから
■恥ながらこんなにも楽しいメンバーさんが集まっている本に■加させていただいて大変恐■です 次回のオ ）までにテクスチャの貼り方を覚えておきます（笑）あと記憶も■り戻しておきたいところですよー
■3DCGモデリング
ゼータ ガンダム（0G） ■■クルー（CG）、ほか

■■■■

■北■■出身の ■■ 絵の■■■■て来 ■ ■■は、ガナイSE いつかし ■スをしたいと■見るモ タ ス■■ ノ好きです ■■在はアマチュアモデラーとしてネットでまったり活動中 好みが非常に偏ってるわけですがみまり気にしない方向で
FRAME OUT models@motorsports
（http://www.geocities.jp/kkuwa/ ■■■）
■自分のようなサラリーマノモデラーに 今回■■■とはいえこのような■会をいけ ただけて本当に楽しかったです 至らないなりにも一つ経験 ■ことで やれることとかやりたいこととかの到達地点がクノとあかったと思えるので 今■に生かしていきたいですね しかし■■に■事と■切を持ち込むことがどいいっていうことなのかヨクワノマタ いや もちろん楽し かったですけどね
■模型製作
1/700アーガマ（バンダイEXモデル改造）

玄■マット（アキバネットバンク）

■1973年生まれ■■■のもろガンダム世代。子供の頃にどっぷり日本のアニメ文化に影■されまくった■ カナダへ移住、北米西海岸では当時最大のFanSubサークルVJACに所■し北米でのジャパニメーションの浸透や発展を■近で体験 2000年の■に ヲタク心を抑えきれず日本に■■、■■タレントとして企■やネットで活■ 最■■■や■■などもするうちに■分でも一体■が本■なのかわからなくなってきている今日この頃
■日本に■ってきた野■が一つかないました！ 日本で作られる■文がいまだに不思■文■になっていることが多い中 少しは本■らしい出来だと■います（こう！ ってとき言うから外人て言われるんでしょうね～ アラ探さないでください！～） アキバでFICEと■く一■に活■してるので見かけたら気■に声をかけてください
■■■訳

ぼくらの見たかった宇宙世紀ビジュアルを目指して

そもそもこの「マスターピース」の企画がスタートしたのは、原型師＝小松原博之（studio RECKLESS）と「ガンダム占い」(※1)で知られるデザイナー　映像作家＝古賀 学（ペッパーショップ）との出会いから始まった。様々な話をしていくうち、ガンダム関連の書籍・グッズなどの現状に対する問題意識が近いことを発見し、2人はたちまち意気投合することとなる(※2)。

そして、小松原が1冊の本を古賀に見せる。それは世界の兵器写真が多数掲載された解説本で、このスタイルでガンダムの本が制作できないか？　と小松原は提案したのだった。「撮影な本ではなく、写真を中心としたヘラヘラの雑誌に、その世界に実在しているという設定のモビルスーツやそれ以外の兵器、ヘルメットなどの装備品が載っている　ガンダムの本　が作りたかった」と、小松原は振り返る。「当然、写真は模型を使うが、このとき1/144スケールだの、1/100スケールだのという表記は一切入れるつもりはなかった。実在するはずのモビルスーツの写真を掲載しているという前提なのだから、スケール表記などあるわけがない」（小松原）。このスタート時点で、既に「マスターピース」は模型の本ではなかったわけだ。

ガンダムのスケールキットを目指して

2人が出会った2005年春、小松原はキャラクターイベント「キャラホビ」に出展するゼータ・ガンダムのガレージキットの原型を制作していた　だが、実際の飛行機や船を造る会社に勤める知人から「小松原の立体は、たいしてリアルではないよね」「C面(※3)があると、現実的には強度が落ちるんだよ」などと指摘され、凹んでいたという。

この知人の言葉を挑戦と受け取った小松原は一大奮起、製造業に従事する友人、知人、そして尊敬するプロモデラーである二宮雅幸らの助言を得て、実在する飛行機、自動車などの製作、製造方法に関して考察を行っていく。揃えられたプレス、鋳造等々の製造技術の知識を動員し、実際の工業製品製造のノウハウをキットに反映していくことになる。もちろんガンダム世界として守らなければいけない部分はきちんと守りながらだ。「考え方は人それぞれ、いま目指している自分の考えを人に押しつける気はない」と小松原は言う。それは、小松原が追い求める「リアルなキャラクター製品ではなく、実在の飛行機や戦艦のスケールキットを作る感覚でガンダムを制作したい」という結果なのだ。こうした努力のかいもあり、リアルでないと揶揄した前述の知人も、撮後には小松原のキットを高く評価してくれたという。

その理想を追い求めたゼータ・ガンダムを見た古賀は、前述の「ガンダムが実在する世界での兵器解説本」を本当に作れると確信する。当初の予定では、模型を使った「宇宙世紀の本」のつもりであったが、小松原がゼータ・ガンダムの原型を制作していたことに加え、映画版の公開もあり、彼らの周囲はまさに「機動戦士Zガンダム」一色だった　そこで「ガンダムが実在したら」という世界のテーマが散漫にならないよう、2006年4月にはゼータ・ガンダムに絞った本にすることに決定したのだ。

この時点でも実際に「マスターピース」のような本が作れるのかは全く見通しが立っていなかった。

出版社を悩んでいた2人のもとに、ソフトバンク クリエイティブから「小松原さんの撮型作品撮を出版したい」という旨のメールが届く　ソフトバンク側は小松原らがこんな企画を話し合っていることなどは一切知らず、新たな雑誌の市場開拓を狙って小松原に問いを立てただけであった。偶然か、運命のいたずらか、これで「マスターピース」は一気に現実的なものになっていくのである。

「マスターピース」にかけるこだわり

さて、小松原の作るキットは1/144スケールが基本だ。今回の「マスターピース」では各部のアップ写撮などが多用されている、小さい模型だと見栄えということで不利にはならないだろうか？

「18メートルという巨大ロボットを再現するというよりも、実際より大きなスケールに見えるように心がけている」と小松原は語る。今回のカバーを飾ったゼータ・ガンダム(※4)は撮影のために量産を考慮せず、ワンオフで制作されている。

この撮影は2006年8月18日に幕張メッセで行われた「キャラホビ2006」の「studio RECKLESS」ブース、ペッパーショップ、バンク クリエイティブ」ブース前で行われたトークイベントの内容を元に構成しました　写真左＝古賀 学、右＝小松原博之。

古賀 学（ペッパーショップ）

■1972年佐世保市生まれ　フリーのデザイナー＋映像作家　1994年より雑誌[illegible]のスタート、原初はアート系のインタビュー フリーペーパーの名称でした　1998年「G20 ノー ツー オーバスキー」創刊時の企画編集とアートディレクションを担当するが、初めの1～2号で離脱する「ガンダム占い」シリーズ（サンライズ ワニブックスほか）ではキャラクターデザインも担当。ちなみにガンダム占いでは「おうし座　A型」でジムキャノン。近年は映像作品も手がけ PVやショートムービーを監督している　ペッパーショップ→http://www.peppergear.com/

■ぼくの手はガンダムにまみれすぎた。右手も左手もすっかりトリコロールに染まってしまった　クリエイターとしての自分のドメインがアート　デザイン界ではなくガンダム界にあることに気がついて　しばらくガンダムと距離を置こう　と思っていました（その一方で秘蔵元のPVとかオリジナルDVDとかの映像製作がおもしろかった2005年の上半期）。そんな矢先に目の前に玄関にサングラスの男＝小松原博之が現れたのです　しかもその口からは「模型雑誌と違う本がつくりたい」と原こえてくるではないですか！　なぬ？　なぬ？　なぬ～？　ガンダムと距離を置こうと思っていましたが、小松原さんが製作中のゼータの模型を拝見しますと　ぼくの魂は宇宙世紀までぶっ飛ぶのです　コレ（小松原造形）を自分の手で料理できる!?　そりゃーやりますよ　この美しくトリコロールに染まった手で！　むしろガンダム　ドメインからのリベンジですよ　そっから1年ほどで香方個にガマンを強いつつも（ほんとうにありがとうございます！）、なんとか形にすることができました　小松原さんのプロデュースによって原作されたスゴイ模型たちを使って　古典的な方法から新発明に近い方法まで混入して楽しいビジュアルをたくさんつくれました　そんなビジュアルの楽しさをさらに強化していただける原稿の数々を　憧れの原稿さん　岡部さん　氷川さん　藤津さん　小高さん　二宮さんに書いていただけたなんて夢のようです　夢じゃありませんよね

■企画＋構成＋原案＋アートディレクション＋デザイン＋特撮ディレクション＋フォトショップ合成

・背景美術（アナハイム エレクトロニクス原子原　アーガマ艦内　アウドムラ原内　空間基地エプロン）制作

小芝健馬（SOFTBANK Creative）

■1[illegible]年生まれ。お店に並んで初めて買ったガンプラは真壁聖ザク（上構生に原られた）次に買えたのはシラマキノ「テキサスの攻防」だった少年時代を経てGAMESPOT→SOFTBANK　GAMES・にゅーあきは・GA　GraphicとWeb製作を主な戦原として モソモと活動中

■撮影の合間にトンカツ弁当で原食　原原などでメン・ーがみな次々に原を外し　気がつくと小松原氏と二人きりに　原原し　恐れ多くて会話もロクにしたことない小松原氏とスタジオにポツンと残され　緊張のあまりースをすべてキャベツにかけてしまい　脈のないプレンなトンカツを食べるハメに

■製作補佐

小林和史

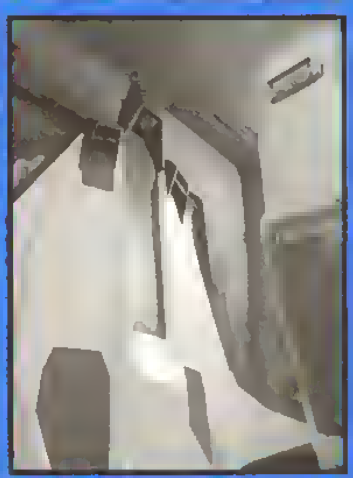
■1990年[illegible]のフィギュア業を経て模型製作会社に勤務　展示　撮影用撮型の製作を楽しむも　時代の流れもありCG会社へ転原　しかし「やっぱり模型だ！」の思いが再燃し　フリーで商品原型　雑誌作例　3DCGモデリングなどを流されるままに　いや　激務ゆえに製作しております

■今回とある方からのご紹介で小松原氏と出会うことが出来ました。アイテム的にサブ中のサブを担当させていただきましたが 元々撮影のメインプロップだろうが 撮影だろうが 大きなプロジェクトの一つの構成になるのは全く苦にならない性格なので楽しませていただきました 今後も色んな形でお手伝いも勉強させていただければと思います。個人的な活動としましては、「モデリズム」というブログ（http://moderhythm.blog26.fc2.com/）を運原していまして そちらで近況やオリナル作品なとも発表しております。是非覗いてやってください

■撮型製作

144フライングアーマー（バンダイHGUC改造）

/400トダイ改（バンダイMSセレクション改造）



■「機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争」によるとサイドらの通貨は ウ ルと いトである とうかがいます 撮影のおろうが[illegible]

佐藤 元(SOFTBANK Creative)

で詳細に作り込んでくるとは予想していなかったようだ。

小松原と古賀の出会いが生んだ究極のごっこ遊び「ガンダムが実在する世界のサイド6で出版された兵器本」は、2人の強い想いと、それに賛同した多くのスタッフの想いが詰まって制作され、企画から1年半(※5)、ようやくロールアウトを迎える。

今、手元に完成した「マスターピース」がある。個人的に長年の夢だった「ガンダムの本」を作ることができて感激だ。しかし、小松原氏や古賀氏らこだわりを持つ"職人"たちの燃えるような情熱で、この本は想像していた以上に素晴らしい出来となった。

単なる「ガンダム本」ではなく、"想い"に支えられた「語り継がれるガンダム本」を、素晴らしいクリエイター達と制作することができたことが何より嬉しい。

次は貴方が、この"想い"が詰まったサイド6発行のミリタリー車輛を楽しんで欲しい。

パネルラインの表現にも小松原の強いこだわりが見える。なんと、極小のスジボリに見えるパネルライン表現は、極限まで削ったシャープペンシルの芯で描かれた線なのだ(なんと小松原はフリーハンドでその作業を行っている！) その線さはカッターナイフでのスジボリよりも数段細く シャープペンでスジを描いては芯を削るという作業を繰り返し、最後にクリアを吹いて定着させるという気の遠くなるような作業の上に成り立っている。ゼータ・ガンダムに負らず「マスターピース」に模範された模型群のスケールを超えた造型は、こうした工夫と努力によって生まれている。

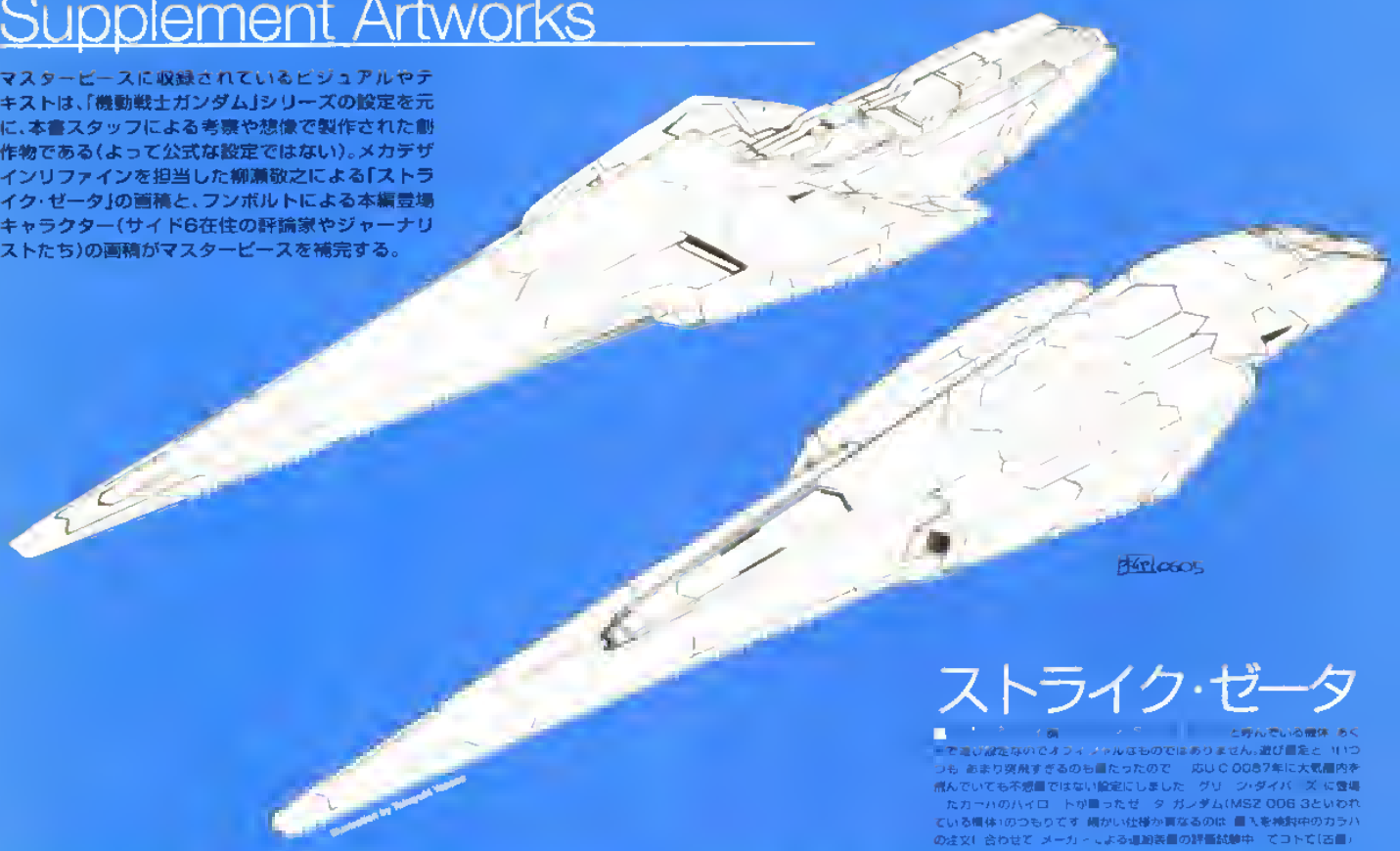
小松原や古賀の機体表現に対するこだわりは、模型だけに限らない。本書に使用されているハイクオリティCGの採用も、実在の兵器本を意識して制作されたポイントの一つだ。これは、実際に使われている兵器が部品の状態で一般マスコミの写真に納まるケースがないためという。特に、戦闘機の機体等が細かく解体された解説は、写真ではなくイラストやCGが用いられることが多い。ガンダム世界の軍事評論家や記者が、限られた資料を元に想像でモビルスーツの可動や部品などについて語るとき、解説に使用するのはCGイラストであるのが自然だと考えたためだ。

もちろん、小松原が制作したゼータ・ガンダムをベースに特別に作り起こされたCG制作にも、膨大な時間と、制作者=ギャラクシーポリゴンの並々ならぬこだわりを垣間見ることができる。CGを発注した古賀自身も、まさかここま

マスターピース
第2回
もっさり
撮影現場は極秘なんで
すごいですガンプラが大集合ー
ガンプラじゃないから
あれれ？
なんでこの切り貼りがモザイクなの？
はー どうやって撮ったらこんな大きく見えるのかにゃー
ガンプラじゃないから
撮影現場は極秘なんで
もう帰れ！
キョロキョロ
ヤッホー
暗くていっぱいっぱいですか？
や 暗がりがいいですから
暗くていっぱいっぱいですか？
や 暗がりがいいですから
暗くていっぱいっぱいですか？
や 暗がりがいいですから

Supplement Artworks

マスターピースに収録されているビジュアルやテキストは、「機動戦士ガンダム」シリーズの設定を元に、本書スタッフによる考察や想像で製作された創作物である（よって公式な設定ではない）。メカデザインリファインを担当した柳瀬敬之による「ストライク・ゼータ」の画稿と、フンボルトによる本編登場キャラクター（サイド6在住の評論家やジャーナリストたち）の画稿がマスターピースを補完する。



ストライク・ゼータ

■ [illegible] と呼んでいる機体 あく [illegible] で違い設定なのでオフィシャルなものではありません。遊び画定と [illegible] いつつも あまり突飛すぎるのも面たったので [illegible] 応U.C.0087年に大気圏内を飛んでいても不思議ではない設定にしました [illegible] グリ [illegible] ン・ダイバ [illegible] ズ に登場 [illegible] たカーハのハイロ [illegible] トが乗ったゼ [illegible] タ ガンダム（MSZ-006-3といわれている機体）のつもりです 細かい仕様が異なるのは [illegible] 乗りを神経中のカラハのほ文（ [illegible] 合わせて メーカー [illegible] による追加装備の評価試験中 [illegible] てコトで（石黒）

佐藤 元（SOFTBANK Creative）

■1963年 福岡県生まれ。山寺の修行に耐えられず [illegible] 出版業に入職するか悩いつつも SOFTBANKへ入社 Web媒体「GA Graphic」をはじめコミック「CAT SHIT ONE！」シリーズなど 少し変わったコンテンツを主に担当する

■入社以来 いつか実現してみたいと画策し温めた念願の模型本（構想には違いますが）を製作することが出来ました 製作にあたり 撮影まで自分の撮影を削り 撮型製作やプロデュース業務をこなしてくれた小松原さん そして難しい考察と素晴らしいデザイン 優れた写真加工技術で本誌をまとめ上げてくれた古幡さん さらに使用目的を知らされぬまま（実はマスターピースは機秘で製作していました）撮型製作を依頼され 厳しい要求に応えてくれたモテラーの方々に感謝します また 大原から何度も駆けつけてくれ その高くへき特数撮影技術と迫力の写真を撮り下ろしてくれたカメラマンの皆さんに感謝です そのほか 数えられないほど多くの方に支えられ この本は完成することが出来ました そんな皆さんに一言言わせていただきたい。次回も厳しくお願いします

■企画＋編集＋撮影

Syujyu

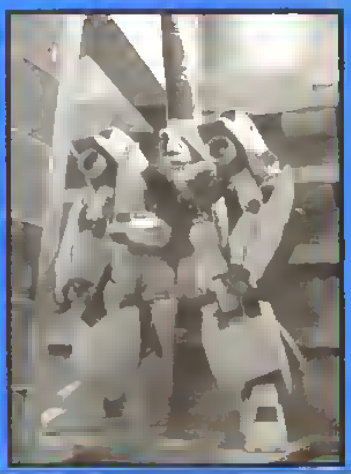
■1977年5月26日生まれのB型 ガンダム占いはサクンロで ある意味おいしい B型らしく興味のあることにはとことん力を入れるが興味のないことには全く無関 [illegible] 最近様な資料では本名よりペンネームで呼ばれることのほうが多くなってきた 模型はメカのみ製作 最近はモビルス [illegible] ノ モーターヘッドの製作で手一杯

■撮影モデラーのあり方を常に考えています やっぱ時間のやりくりが難しい！作品ごとの製作期間を延ばさないとなーと思っています

■模型製作

・1/144リ ガズィ（フルスクラッチビルド）

・1/144メタス （フルスクラッチビルド）



Sho-Un（ブラギルド）

■1973年生まれ 現在フラキルド [illegible] に修行中 雑誌掲載は本誌がデビュー

■今回が一応デビュー作になりますが またまた修行中の身 今後はメインの作例を手がけられるよう頑張っていきます

■模型製作（長野勇司氏と協同製作）

・1/144ネモ カラバ所属機4体（フルスクラッチビルド）

高橋拓海（PN）

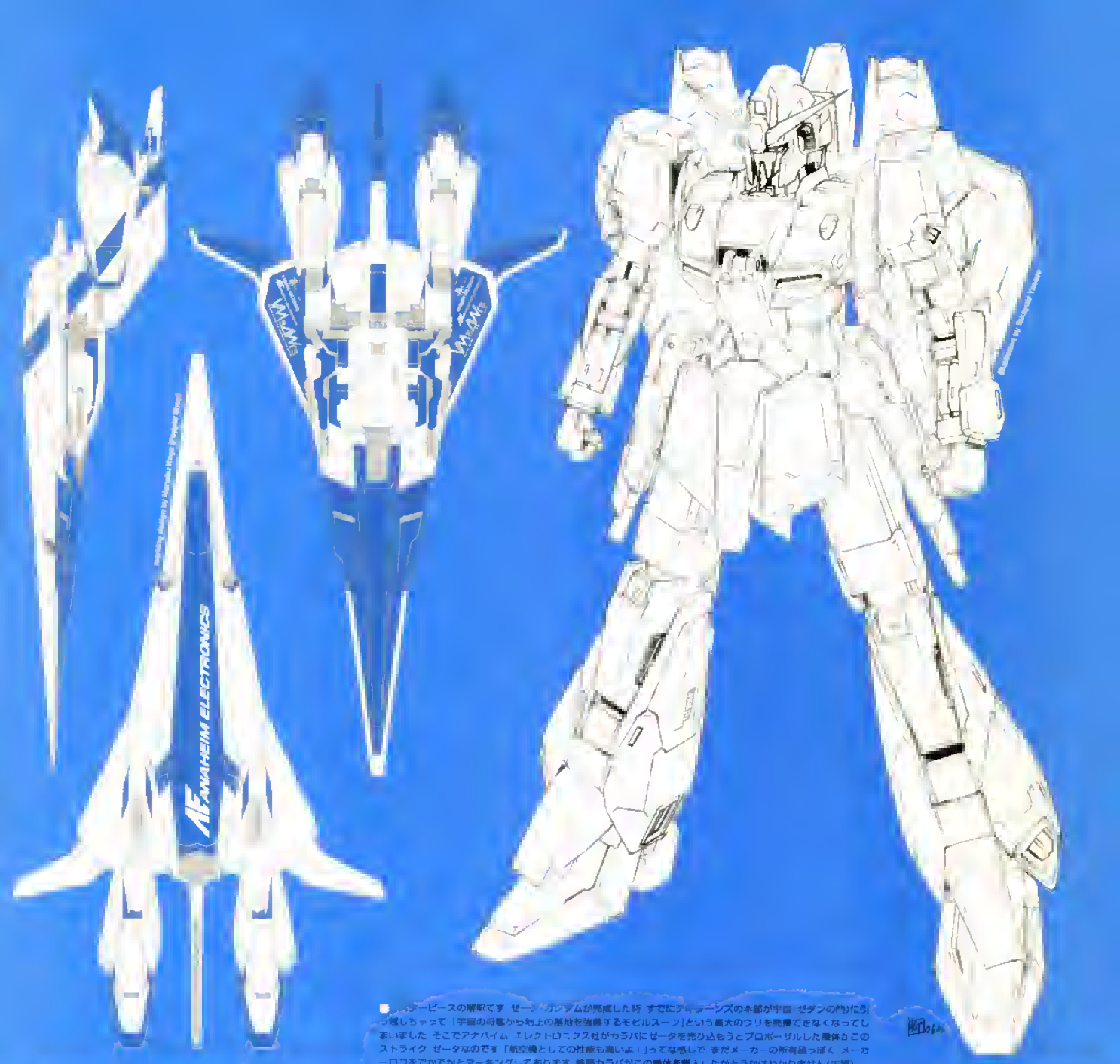
■1971年生まれ [illegible] 山形県在住 [illegible] 歴歴世代 [illegible] く最遅のリ マン系ガンプラ編モテラーです 今まモライター業はもちろん 大きなコンテストなといっても [illegible] メノヤー経験のない私が このようなゴージャスな企画に参加させていただいたこと自体不思議でしょうがありません。ほんとに。

■昨年の秋 とあるきっかけで小松原氏と知り合ったのがことの始まり いっさい企画の説明もないまま氏の御 [illegible] いお言葉 [illegible] そそのかされ（笑）ノフトながらも厳しいご指導のもと 暗く地獄を見つつ一生懸命ささえたテ [illegible] ェか気がつけばこんなとこにいたりします。いざとなれば怖いものです 手の離えかとまりません って

■模型製作

・1/144ディジェ（バンダイキノト改造）

[illegible] ル＝約5円）で日本円に換算できそうです 玩具5円 新聞100円、ウイスキ [illegible] 150円、 [illegible] への報酬25万円 本書2400円は約4ハイト80クール って [illegible] ことになりま [illegible]



■メインテーマの解説です ゼータガンダムが完成した時 すでにティターンズの本部が宇宙にゼダンの門に引っ越しちゃって「宇宙の司令から地上の基地を強襲するモビルスーツ」という最大のウリを発揮できなくなってしまいました そこでアナハイム エレクトロニクス社がカラバにゼータを売り込もうとプロポーザルした機体がこのストライク ゼータなのです「航空機としての性能も高いよ！」ってな感じで まだメーカーの所有品っぽく メーカーロゴまでかでかとマーキングしてあります 結局カラバがこの機体を購入したかどうかはわかりません(苦笑)

高橋昌也

■1961年東京都生まれ 高校時代にモデラー誌で1/35ミリタリーフィギュア モデラーとしてデビュー 機動戦士ガンダム 本放映を見て動要を受け 入会していた模型サークルに最初の同級生だった川口克己氏らを誘い込み 同サークル内の有志によるユニット「ストリームベース」に参加 1980年 ホビージャパン 誌で本格的に模型ライターとして活動を開始し 多くの媒体で人物を担当 また コミックボンボン 誌で「クラフト団」名義で「プラモ狂四郎」単独名義で「MS戦記」といったマンガ原作を手がけたほか ADバニシス などのトラマロの脚本 日本初のゲームブック ハロー チャレンジャー シリーズの執筆＆出版プロデュース ガンダム センチネル ALICEの鏑矢」などの小説執筆など 元来のスケベ根性が災いし 本人ですら何をやっているんだか疑問がつかないほどホビー業界を中心として年々フィールドが拡大 現在は「広げすぎ」を反省して 某出版社にて"ホンモノの 自動車雑誌の編集記者としてあとなしくしているが たまにホビー業界に戻ってきてコソコソと仕事をしているらしい

■実はソフトバンクさんとは今回が二度目のお仕事となることになります 昔々「Beep」という雑誌で連載をやらせていただいた時期がありまして その頃はまだ会社も赤坂じゃなかったんですよね こんなシノイを今回の仕事に選んでいただいたことに感謝

■参考 ヒキタ・マサヤ タカノ・綾

角田 治

■1965年鳥取県生まれ 広告代理店勤務 ステアラのガンダムファン 好きなMSはMSM-03C"ハイゴッグ"

■この度はこのような素晴らしい機会を与えてくださり本当にありがとうございました プロジェクトの一端が担えたことを大変光栄に思います さらなる展開と飛躍をご期待申し上げます

■模型製作
1/400ネモ＆ディンエ遊戯改修
(バンダイMSセレクション改修)

■ 1/60 ガンダム(ver.Ka) 40 くらいでしょーか 東亜広告に登場するリーマン ーやハンバーガーチェーンも「ポケットの中の戦争」からの出典です

鶴見祐輔(studio panboat)

■1971年青山県生まれ。studio panboat代表 大阪在住フリーランスCGデザイナーとしてTV CFやVP等の商品 背景素材や映像効果 アニメーションなどの映像を中心とした3DCGを手がけている。2000年にstudio panboatを結成 映像作品の制作をきっかけにCGをHobbyのユニットとして活動をスタートさせる。それを機にミニチュア撮影を手がけるようになる
http://panboat.com/
■今回はじめて虫の目レンズなるものを作成して撮影しました レンズ作りに行き詰まった時は全くどうしようと思いましたが うまく写るようになった時は自分で感動していました「マスターピース」の撮影ですばらしい造形を書かせてもらった時は本当に感動しました
■趣味(虫の目レンズによる特殊撮影ほか)

増富理輔

■ライオン丸職人。1967生まれ アニメーションカメラマンを10年ほど勤めた後 映像関係の美術製作に転進(と言っても社会人なんてすが) ひょんなことより二宮氏と知り合い 30才を過ぎて模型雑誌のライターとしてデビュー。現在 模型製作の詰め切りに追われる日々を過ごしている。
■ちょっち猛烈不足でスタッフの方々にご迷惑をかけました しかし今回の撮影に使用したレンズは「すごい!」の一言ですね。小生の製作した車輌のアラがもろに出そうでドキドキしております(現時点でOKカットを見ていませんので) そんなわけでこれからも努力精進いたしますので今後も宜しくお願い致します
■模型製作
1/144新幹線+エレベーター塔(フルスクラッチビルト)

中北晃二

■絵描き 主に美術 背景上がり 直作は「ブラモデル・スクールダンディSF」版権イラスト「グラディウス ポータブルバンク トレカ「レノノャーズストライク」「ディストノョノ ゼロ」など メカとかクリーチャーが好物
■最近はぼちぼちアニメのデザイノ業務とか ガノプラのアレノジ仕事とかもしています この本が出る頃にはもう ガンコレの1/400αアノールとか出ているかな
■イラスト
カミーユ ビダン ブレックス フォーラ、クワトロ バーナ 各自機

長野麻男(プラギルド)

■1989年生まれ 静岡県出身
■現在 プラギルドの松村さんの下で修行中。一日でも早く腕をあげてみんなに喜んでもらえる原型師になります
■模型製作(Sho-Un氏と合同制作)
1/144ネモ カラバ所属機4体(フルスクラッチビルト)

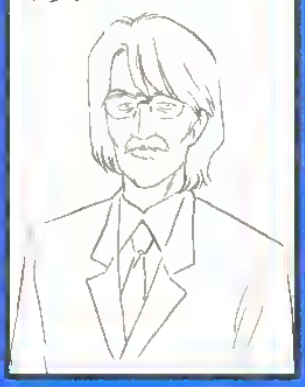
▶ FMSチャンピオン プ告死広告のミニルモ巴「 ばい ン自をモチ フに展示用として飾っています 同じ ットの中の戦争」からの出

専門誌編集者
マサヤ・タカハシ

■ ○○61年生まれ。○○ニアモビルスーツ製作者 作家 ジャーナリスト コミック「MS'青年館」 MS戦記ものなどの創作や「連邦軍教導団脱走事件」を扱いたリボルター ノュ ガンタム センチネル」の著者として知られる。現在はモビルスーツ専門誌出版社に勤務する編集記者である

1

軍事評論家
イサク・オカベ



■ ○○0064年生まれ。軍事評論家 軍事雑誌の編集者などを経てフリー 各種軍事雑誌や模型雑誌にて 事やコラムを連載 お家にノオンMS部隊の隊長」!モデリング オブ MS」など 著書に「傑作MS列伝 ムトキャノン!」などがある。808TVのニュース番組にて軍事 安全保障関連の解説も行う

2

メディア評論家
リュースケ・ヒカワ

■ ○○0058年生まれ 大学では電気物性を専攻。卒業後 通信機器メーカーに就職 携帯ケータ通信機器の開発 設計に従事する 並行して大学在学中からメディア論に興味を持ち メディア上で流布される言説や事力拡大メカニズム 情報収集や分析方法などの研究を独学で確立 各メディアに寄稿している

3

ジャーナリスト
リョウタ・フジツ

■ ○○0088年生まれ 大学で生物学を修めた後 ローカル紙「ノボータイムズ」に入社 メーカー 流通といった企業取材を中心に行う。0097年に週刊誌「Space」に移籍し インタビューへー ニュースコラムを担当 その後フリーとなり0080年代の社会風潮を中心に取材を続けている

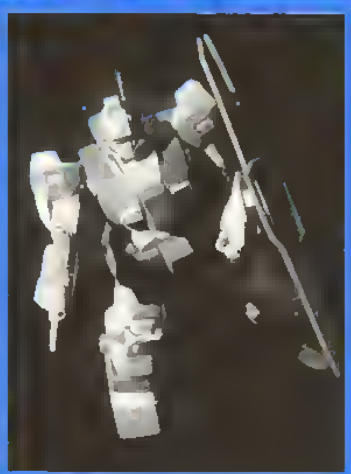
4

西村友一=osprey

■1959年鳥取県生まれ(1989年に鳥栄し、第二のプラモ雑誌のライターの所で働きながらGUNSBIKEに明け暮れる日々を過ごす 1991年に帰国後 10数年メカクとしてバイクショップ!"勤務 現在は貿易のサラーマンの4人の子供を持つパパモデラー

■ご質があり 今回の企画のお手伝いをさせていただくことになりました とても貴重な経験をさせていただきました 制作中(特に塗め切り前)いろいろと努力!! くれた意味に感謝です

■模型製作
1/144ネモ アーガマ所属機(バンダイキット改造)

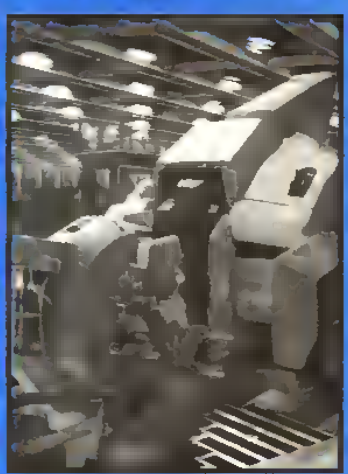


二宮茂幸(NYASA)

■1961年 スプートニクが打ち上げられた年に生まれる。1985年模型誌デビュー 同時に建築模型 アニメ作画参考用モデル 映画 TV CMなどの映像用造形物 玩具試作 ガレキの原型などの制作に関わる。

■ゼータ ガンダムは模型誌デビューした時に最初に関わったアイテムです それから5年、10年 15年と節目の年には何らかの形でゼータ ガンダムと関わってきました 20年目の今年 さすがにもうないだろうと思っていたところお声がかり このような本に関わらせていただきました 私にとってもゼータ ガンダムの集大成です もう思い残すことはありません。

■ディテール考証+テキスト(ノグ エヌ役)+模型製作
1/144未塗装組み立て塗中ゼータ ガンダム
(studio RECKLESSガレージキット改修)

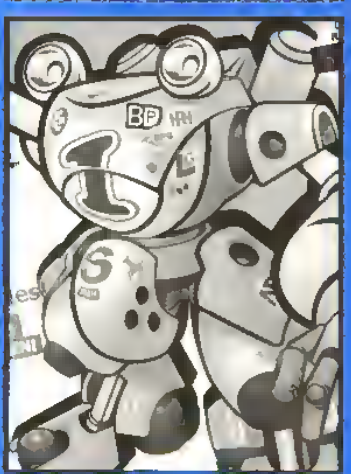


ハギハラシンイチ(number4 graphics)

■197/年徒世伝わ生まれ 1994年よ。number4 graphics」としてグラフィックデザイン WEBデザイを主に活動 http://www.no.4.com/

■今回はじめて メノヤーな「ガンダム仕事」に関わることができました 機会を作っていただいた感謝しています ヘルパーショップ古畑くんとは 前がヘルパーショップの時号を名乗る以前からの仲 約15年ぶりに一緒に仕事をしたのですが 時の流れや 人間の成長 人生の経過や重みを感じて ちょっと大袈裟ですが感動しています 福岡からWEBを通しての遠隔参加ということも含めてあらゆる意味で 楽行錯誤した 気持ちのいい仕事ができました 制作費 誠実の皆様 ありがとうございます

■3DCGモデリング+グラフィックデザイン
ゼータ ガンダム組み立て工場(CG) 航空自社広告(旅客シャトルCG+デザイン) ノュニア モビルスーツ会告知広告(トラケンイラスト+デザイン)



早川広志(studio RECKLESS)

■16歳の時に模型屋の店員をしていたところを小松原氏にスカウトされました。上手くできなくて16~19歳くらいまではよく怒られましたねえ 10代の青バイアランが好きといったら死ぬほど馬鹿にされたのを今でも覚えています(笑) 小松原氏のサポートの他 現在はORE GUNの原型 LaLeLa ランドセルの原型 他バンプレストさんの名前の出ない原型を制作させていただいています

■この本でのアシスト作業では小松原の要求してくるハードルの高さは半端なものではなく 全身がガタガタになりました。間違いなく過去最高のキツさでした これからのRECKLESSは僕やMAKOTO 石川が造型の中心になっていくようにと小松原から言われていますので早く師匠小松原を安心させられるように精進します。

■模型製作アシスト

studio RECKLESS

▶ ヒカワ氏による取材者 リボー宇宙空港のラウンジで単華した ことについています 石川氏は実際に飛行空港で飛行機を操縦から事故の最高を聞いているそうです

Illustration by Fujimoto

藤 敏彦(SOFTBANK Creative)

■神奈川県生まれ 専門新聞の記者を経て 縁あってソフトバンクに入社、ネットゲーム雑誌の立ち上げ的存在と(一部から)いわれた「SOFTBANK GAMES」を立ち上げていい気になるも企業 年収の8割をレアゲームとAV機器につぎ込むコレクターだったが 現在は息子のすべてが焦 しゃない イタ車の修理代に消えているそーな

■横浜にある古賀氏のヘッドバーションプから 撮影に使うパネルなどを都内のスタジオまで運搬し!のたが 運搬に使ったのが会社から借りた軽バン たたでさえ軽でけないように大切に運ばなければならないのに 大きなパネルで後ろは見えないし 都内の道は分からないして 無事運び終えたときは疲れきって腰が抜けた。何よりまいったのは 後の体重(0.1トン)を乗せたせいで車が傾を上るのを嫌がり 最川あたりでプチ炎上を引き起こしてしまったことか

■製作補佐

氷川竜介

■アニメ評論家 1958年兵庫県尼崎市生まれ プロ活動は1977年から開始 ガンダム仕事の最初は1979年リアルバム「戦場へ」から、以後 アルバム ムック関係多数に、参加 1997年にヘッドハーションプのデザインにより単行本「20年目のザンボット3」(太田出版)を著述、以後「G20」(アスキー)を含め ガンダム関係の仕事も再び多く手がけるようになる 「みずがめ座 A型」でクラブロ NHK BS2 BSアニメ倶楽」ではコメンテーターとして出演中

■ガンダムは現実世界を楽しく過ごすためのノールだと思います 現実が味気なく感じられたとき スパイスとして熱線として 妄想を膨き立てるために本書が役にたてと良いなと願ってあります

■テキスト(リュースケ ヒカワ役)

鈴之助 日野

■1966年生まれ 元ファストドラマー 99年「電撃ホビーマガジン」誌ガンプラ主コンテストにて「初代」王冠獲得 以降 同誌でプロモデラーとして活躍 00年よりんとばら屋」にて ガンダム艦船 宇宙戦艦ヤマトなどのガレージキットをプロデュース 近年「電撃ホビーマガジン」誌上ではマクロス、ダンバイン他スケール艦船も担当している

■私はファーストの世代でありながら ガンダムは「Z」が一番たと考えています 昨年より 劇場版も公開され新しい世代にもZが注目される機会が出来たことを大変嬉しく思っています そんな折 このようにクリエイティブな本が出版され かつ微力ながら協力することが出来たのは本当に界隅らしいことです 本誌掲載のアウトムラは キャラホビ2006にて完売 再販ながら大変好評をいただきました。Zファンとして 生みの親として てんなに嬉しいことはありません しかも聞くところによれば本誌には また元があるとのこと 是非またご一緒できることを祈っています

■模型製作

1/700 アウトムラ(フルスクラッチビルト)

真凛亮太

■1968年生まれ アニメ評論家 週刊誌編集者などを経てフリーに 主な経歴に「ガンダムの現場から」(氷川竜介と共編 キネマ旬報社)「三国の鼎ノブリ美術館GUIDEBOOK2006」(芸術書店)「アニメ評論家」資格」(振興社)などがある アニメ誌「ニューライフ」で連載「アニメの門」を連載中

■この本 完全に「同じ釜の飯」にイッてます つまり「宇宙世紀2.01」です

■企画協力+考察+
テキスト(リョウタ フジノ役)+フェイク記事原稿

真本孝彦

■愛知県生まれの東京育ち 1990年代後半にHPを開設 開始当初は音楽 20世紀末はポストペット 2000年以降はニュースサイト系 その後 模型関連情報を扱うサイトを続々と運営中 http://modelfplus.com/

■縁あって今回の企画に参加させていただくことができました 参加の機会を与えてくれた小松原氏に感謝しております

■模型製作

1/144リックディアス 素組2体(バンダイHGUC)
1/144アッシマー 素組2体(バンダイHGUC)

フンボルト

■1969年大阪生まれ 1990年ころより細々とイラストレーター兼デザイン業など 2005年より「TCGレジェンズストライク」(バンダイ)のカードイラストを描かせていただいております

■お声をかけていただき有難うございます イロモノ担当と言うことでこっそりと参加させていただいております にもかかわらず遅れて申し訳あわわ汗

■ライナーノーツ用イラスト

マサヤ タカハシ イサク・オカヘ リュースケ・ヒカワ リョウタ フジノ、シンヤ オグラ シグ エヌ ヒロユキ コマノバラ マナブ コガ、各キャラ表&キャラ名文字

■デカール中央 もちろんTV版「機動戦士Zガンダム 37話 デカールの日」を元に 構成しています 画面右下にあるニュースチャンネルのロゴマークに気にN記入されているマ

大学講師 シンヤ・オグラ

■UC 0065年生まれ。通称:最新鋭大学リーア分校・天文物理学特別講師 UC 0101年の「UC 0087宙域プロスペロー宙域事変」の検証ドキュメンタリーでの唯一の関係者として注目され 以来 特に「宇宙機としてのモビルスーツの機動」「モビルスーツ 大型宇宙艦による大気圏再突入」の研究発表で知られている。

5

映像ディレクター シグ・エヌ

■UC 0061年生まれ。映像ディレクター 主に前世紀の兵器や軍隊の実写映像を発掘しドキュメンタリー作品を手がける。モビルスーツ研究は完全に趣味

6

スタジオ・レックレス ヒロユキ・コマツバラ

■UC 0057年に地球連邦軍を除隊し リーアに移住。同年リーアでアパレル関連製品の制作および販売を行うstudio RECKLESSを起業する。現在では玩具製作事業部を独立するなど幅広い分野で活躍

7

ペッパーショップ マナブ・コガ

■UC 0072年生まれ。戦後世代が一年戦争終結20年をふりかえる作品集「After War 20」の企画を立てるが、シリーズ刊行の途中からアーティストに転身してしまう しばらくアートムービー監督や占いのマスコットキャラクターのデザインをやっていた 今回の「masterpiece」で久しぶりにエディター&アートディレクターとして復活

8

ボビー金井

■来は男女2人のユニット、2001年ホビージャパン誌にてオラザク選手権」にて賞荷に入る 最近ではかなり個良気味な造型活動を展開している

■小松原さんのご好意にて寄稿させていただけましたことを感謝いたしております。あらゆる物の楽しみ方にはいくらでも切り口はあります それを具体化し提示することは興味深いものですね。小松原 吉貴両氏の今後の展開に期待し、今後はファン側の観点から楽しませていただきますね。

■造形
1/100百式(バンダイMG改造)

MAKOTO=小松原博(studio RECKLESS)

■RECKLESS代表小松原博之の実弟。兄とは10歳離れていて小さい頃から兄の作るモノを見て育ち いつの日か同様にしていました。

■兄小松原や兄弟子の早川にはまだまだ遠く及びませんが少しでも早く追いつきたいですね。自分の力の無さを実感しています。とにかく造型に対して貪欲に今は取り組むことしかできないですが!!

■模型製作アシスト

studio RECKLESS

松村年信(プラギルド)

■1969年静岡県生まれ ホビージャパン誌にてデビュー後 フリーの原型製作業を経て有限会社プラギルドを設立。一応代表

■今回この本に関われたことを凄く嬉しく思います。自分の作ったモノを振り返ると ちっと作り込んでおけば良かったと後悔しかありませんが 少しでも読者の記憶に留まってくれれば嬉しいです。これを書いている今現在 あまりにもいろいろな出来事があり書く混乱していますが 一歩一歩踏み越えていき更なる先をいつも見据えて精進っていきたいと思います。今後とも見守ってやってください プラギルドではメカ フィギュア入り乱れての新製品を企画しています。是非ご覧ください。
http://www.pleguild.com/

■模型製作
1/144 ゼータ ガンダム電子戦闘用テスト機
(studio RECKLESSガレージキット改修)

みなつきふたご

■2002年「征服魔界ちゃん」(ワニブックス)でデビュー その他に「港湾署デカピタ隊」「美味しくごはん」「お腹のま貫族!」(芳文社)「爆熱学園Ultra☆StriQ」(FOX出版)などがある

■今回のレポート漫画は 絵と本当がハーフ&ハーフです(笑) (告知)FOX出版さんから電月で発行されている「もより～ 萌電～」にて「爆熱学園Ultra☆StriQ」を連載中ですよ。宜しく～

■ライナーノーツ用まんが

村上 元(SOFTBANK Creative)

■1972年東京生まれ 山口県育ち。保育園の頃「宇宙戦艦ヤマト」の再放送でSFアニメの洗礼を受ける。ガンダム初放映は小学2年の時。大学進学のため上京 直中休学して山に修行に行ったり鹿児島で子供らと遊んだりした後 デキトーに卒業。ゲーム制作会社にしばらく身を置いた後 (中略)現在に至る

■また世間のCDショップが"レコード屋さん"だった中学の頃 小遣いをはたいて買った初めてのCDが「Z」のBGM集でした。思えばこの作品がその後のボクの人生を決定づけたのかもしれません。この本の制作のお手伝いができて光栄でした 小松原さんの模型界の更先端をゆく造形のおかげで いまだにボクの中の Zガンダムはフレッシュなまま輝き続けています

■製作補佐

劇中でベルトーチカと力一八の工作員の員に付いていた ラッペンから引用しました。レポーター名としてクレジットしてある「カレン ラッセル」という名前はベルトーチカの偽名です。

世界がもしガンダムの村だったら

野田真外

ガンダムのファンの人たちは心底うらやましい、と思うわけです。

残念ながら私は〈ガンダム村〉の住人じゃない。ただの通りすがりの押井守原理主義者だ。サイド6と言われても、中立だっけ？　とか、テム・レイ＝いかれた親父、とかその程度の知識しかない。この本の製作にかかわった皆さんとは違って、サイド6に私の住民票はないんである（東京湾の13号埋め立て地辺りに多分あるはずです）。

とは言え、自分がガンダム世界に対する知識が少ないから、わかっている皆さんがうらやましい、と単に僻んで言っているわけじゃない。

全くの私見なんだけど、ここ10年ほどのオタク業界は下半身的快感原則にどんどん支配されていっているように見える。いわゆる"萌え"が全ての価値観を統合しつつあって、すでに〈オタク＝萌え〉が必要十分条件にされているのではないか、とすら思えて仕方がない。私は別に萌えという価値基準そのものを否定しようとは思っていないけど（ラムちゃん大好きだしね）、でもオタク的価値のあるなしが、萌えるかどうかで全て決められかねない状況に関しては、違和感を感じずにはいられない。

それでもやはり時代の趨勢は、圧倒的に萌えである。萌えキングダムである。このまま放っておけば、エヴァブームや謎本ブームの頃にはまだしもあった、行間の読み込みとか、文脈解釈とか、そう言ったもっと知的な楽しみはほとんど失われてしまうんじゃないかと。この流れに身を委ねていると、脳味噌の襞が一本ずつ消えていくような気がしてならない。

そんな中で、この「masterpiece」はその流れの対極に位置している商品だ。萌え的要素は破廉恥も含まれていない。そこにあるのは、膨大な思考と、圧倒的な手数、神懸かった技術、それだけだ。それらシンプルにして決定的な中身は、ブラックペッパーの2人の決定的な覚悟の量によって支えられている。

そしてガンダムと言う作品世界には、古賀　学、小松原博之、そしてそれ以外の参加者全ての覚悟を全て受け止めるだけの強度が、深さが、ある。それはもちろん、最初から自明のものとして備えられていたわけじゃない。多くの先人たちが30年近く営々と築きあげてきた、それは巨大な楼閣なのだ。GとかWとか種とか、ちょっと入ってきたくらいじゃびくともしないどころか、取り込んで血肉にかえてしまうほどの。内部はきっとミノフスキー粒子がみっちみちに充満しているに違いない。そんな強固な地盤を持っているガンダム村の人たちが、私はすっごくうらやましいんである。

そしてこの本は、読む人間に対しても、覚悟の量を問うている。お前は本当にサイド6に住むにふさわしい人間か、と。だったらその思いのたけを見せてみろ、と。

そんなギリギリまでテンションを高めた、発信側と受け手側のやり取りがビジネスとして成立しているガンダム村の人たちは、本当にうらやましい。

うらやましいったらありゃしない。

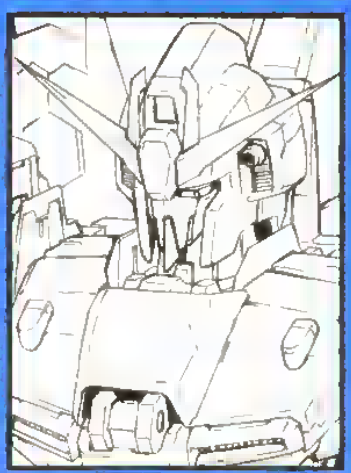
野田真外（のだ・まこと）　1967年生まれ　漫画家　押井守原理主義者　Gnasten（グラナステン）主宰。主な作品に『京騒戯（03）』、『また研究本』（前田真宏　押井守様　フットワーク出版）の装丁など。文筆活動も行う。80年代前半は「うる真やつら」にうつつを抜かして、ガンダムを素通りしてしまったうつけ者。なのに真宏には押井フ　ンよりガンダマー（しかも特別濃い）が多いのは何故か？　●04年2月26日に「Howling in the Night ～押井守　夢を語る」という押井監督と観客いじくさんのト　クイベントをやっています。
http://www.gnasten.co.jp/

柳生孝太

■1972年千葉県生まれ　3歳の頃からプラモにハマる　初めて作ったのはキカイダーのサイドカーだったと思う　その後も発売するプラモを作り買い　気付けばオーバーザサーティ　2002年■雑誌真型コンテストで大賞を受賞　そのまま増殖ライターに　現在は電号RAMPAGE GHOSTでイベノト■加中　また商■原型も多数手がける　ちなみに初のコンテスト出品作品はザク。初の模型作例もザク　初の真■原型もザク　ガンダムといえば「天神■　B型」でザク　この本の作例もザク（ハイザック）
■ディーラー「RAMPAGE　Ghost」で様々なガレキイベントに参加しています　買かったらチェックしてみてください！　http://yubee.finito.to2.com/hp/main.ht
■模型製作
1/144バイアラン
　フルスクラッチビルトミニポピーガレージキット
1/144ハイザック（バンダイHGUC改造）
1/144真■ウェポントレーラー
　（フルスクラッチビルト

柳瀬敬之

■メカ　ノ　イラストレーター　雑社員として働つかのロボットゲームのデザインを真当。2002年よりフリー　主にゲーム　CG　玩真て活動
交響詩真エウレカセブン（TVアニメ　デザインワーク
ゼーガペインTVアニメ　デザインワークス）
ゼノサーガ　エピソードII（セットデザイン）
ORE-GUN（玩真デザイン）
MS IGLOO（コミック真　メカデザイン）
■メカデザインを担当しました　許はバランスとタリ　面白いお仕●でした
■メカデザインリファイン
ゼータ　ガンダム（全機）　メタス　リ　ガスィ



大和真実

■やまとまみ　1982年9月3日生まれ　あとめ屋　B型
スリーサイズ　T174 B100 W61 H90
特技　水泳　●道（7段）　マ　ゲージ
趣味　真歩　料真　写真　真画　ゴルフ
好きな言■　一期一会
■今回　●加させていただき　すごく　嬉しく思っています　これからもジャンルにとらわれず　色んな仕●をしていきます　ガンダムのことは　詳しくわからないけれど　これから　勉強して　わかるようにしたいと思います　色々　教えてくださいね！　私のブログサイトもよろしくお願いします
大和■実　Life style diary
http://blog.yamato-mami.com/
■モデル（061ヘ　ジ）

●トーチカの名台「カレン　ラッセル」はマンガ「デイアフタ　トゥモロ　レポートより　き　角川（真絵）からの出真です。

061 株式会社ウイング

064 株式会社ウェーブ http://www.hobby-wave.com/

075-076 株式会社バンプレスト http://www.banpresto.co.jp/

架空広告

以上の架空広告ページは株式会社ウイング、株式会社ウエーブ、株式会社バンプレスト(掲載ページ順)の協力をもとに作成しました。また以下の架空広告ページはペッパーショップ、studio RECKLESSによって作成されました。

093 ペッパーショップ
http://www.peppergear.com/

094 studio RECKLESS
http://www.studio-reckless.com/

そして、幾多の"ピース"が繋がる時

岡野 勇

「そんなこと知ってるよ」という人には退屈な話かも知れない。特に年配層はそうだろう。が、すでに26年の長きにわたる中であまりにも情報が増えすぎ、「文脈立って組解くキッカケがわかりづらい」という人も増えている。そういう人に対しても本書『masterpiece』を説明するには、どうしてもこれくらいの長さが必要だったのだ。申し訳ない。

■

アニメ『機動戦士ガンダム』が79年に放送された時、僕は小学6年生。難しいことはまだわからなかったが、それが「これまで見ていたロボットアニメと何か違う」ことはわかった。

何が違うのか？　それがわかったのは、中学に入りアニメ雑誌を読むようになってからだ。僕らと同じように弱く、人間関係や状況に翻弄される等身大人物達、戦車や戦闘機と同じような扱いのロボット兵器、それらが生み出すドラマと世界観の「リアルっぽさ」。それが理由だった。

これを契機にアニメには「リアル路線」と呼ばれるジャンルが生まれ、幾多の作品が作られた。けどその中で「ガンダム」だけが26年以上にわたってリリースされ続け、しかもフィクションであるはずのあの世界がやたらと現実味を感じさせてきたのはナゼだろう？　演出、ドラマ、設定、メカ……考えられる要素はいくらでもある。でも、それらに書きを置いた優れた作品は後にもあったのに、ガンダムだけが確固たるリアリティとして目の前に存在し続けている。ジオンの台頭も、モビルスーツの開発史も、宇宙移民に降りかかった圧政も。僕らはまるで本物の歴史的事実のように……ヘタすればそれ以上に知っている。

そのリアルっぽさを生み出しているパズルのピースは何だろう？　この10年ほど、そんなことを時々考えるようになった。が、ある日。自分の本棚にあったいくつかの本を見て答に気がついた。そうだ、「ガンダムは隙間だらけだった」からだ。最近では「ガンダムは初放送時から鉄壁の設定と世界観を持っていた」かのような誤解をしている人もいるけれど、元々はここまで隙間のない世界観を持っていたわけじゃなかった。

世界観を作るのも設定を作るのも、アニメーション作品に携わる人たちの仕事だ。しかし時は80年代前半。今ほどハッキリとリリースサイドと受け手が分かれていたわけではなく、ある種「共同でノリを楽しんでいた時期」だった。アニメファンの数もわずかだった。だから皆、アニメを盛り上げたかったのだ。その共同幻想が楽しかった。

中でもガンダムは格好の作品だった。作品に魅せられたアニメメディア側にいた人たちや、作品から発生したガンプラに魅せられた人たちの"隙間につけこんだ遊び"が全ての始まりだったように思う。"遊び"と言ったっていい加減って意味じゃない。作品が、そしてガンプラが好きだから、その隙間に対して本気でアプローチをした。

「その隙間があるなら、そこにこういうことがあった方がもっとリアルっぽいんじゃない？」

その「こういう事」というリアリティを本気で考えたのが"遊び"の正体だ。こうしてガンダムという虚構はリアルと深くリンクし始め、僕らもそれを受け入れていった。

■

アニメ作品である「ガンダム」の世界観・設定へのリアル追求を遊び始めた人たち。ガンプラのリアル追求を遊び始めた人たち。双方の遊びは加速していった。中でも、「ガンダムセンチュリー」（81年　みのり書房）と「HOW TO BUILD GUNOAM 1&2」（81年　ホビージャパン）の後への影響は大きかった。

アニメの製作スタッフもまざって遊びまくった「ガンダムセンチュリー」は、現在に至る「ガンダム」の世界観設定の幾多を生み出し、その土台を堅い物とした。当時、ガンダムを巡っては「アニメ（ガンダム）ファン対SFファン」という対立があり、アニメ誌やSF誌でマジメに論争になっていたのだ。ミノフスキー物理学、宇宙兵器に手足がある理由AMBAC。SFファンに対抗するための、何が「もっともらしい設定」の多くはここで作られ、後にいくつかは公式化した。ファンやメディアが好き勝手に設定を作って遊んだだけならともかく、それが公式に反映されてしまったのだ。これは大きな事件だった。

一方「HOW TO BUILD GUNOAM」は、ガンプラという当時の模型界では色目で見られていた商品の遊び方と可能性を見せつけた　戦車的な塗装やアレンジ。ジオラマ。それて解釈。「実在する物を実在するように見せる」という従来の写実主義的な模型の作り方と異なり、「実在しない18メートルのロボット兵器というものを、どうしたら本当にありそうな感じに出来るのか？」は、想像力の戦いだった。

ガンプラを出し、すでにオフィシャル的な立場であったバンダイからもこういった"遊び"の名作は生まれ、ガンダム世界のリアリティを強めていった。その代表とも言える「MSV（モビルスーツバリエーション）」は、モビルスーツのリアルな兵器っぽさをいっそう強めた。

また、これはかなり後のことになるが、バンダイからはガンダムの世界観を使った戦場写実風イラスト集「MS ERA」（90年）という名著も出ている。OVA「ポケットの中の戦争」にリンクしたムックであったが、第2次世界大戦やベトナム戦争の戦場写真をモチーフにした1冊だ。アイデアも多岐にわたり　爆風によるファインダーのぶれ、全てにピントがバッキリと合っている宇宙空間の画、そして戦時下で生きていた普通の人々の様子を描いてリアルっぽさを強調した。

■

しかし思い返してみると、不思議なことにこういった`遊び`の多くは、いわゆる「一年戦争」を題材にしていた物ばかりだ。今に繋がるガンダムファンを魅了した作品は「Zガンダム」以降だったのに、意外にもそこで遊んだものは少なかった。80年代前半に実かれた「リアルなガンダム」はあまりに強烈な盛り上がりからたった数年で消費され、隙間が見えなくなってしまったのだ。

特にガンプラファンの混迷は大きかった。リアルの考え方も方法論も行き詰まり、迷走の時期に入っていた。

`Z`の人気は高くファンも増えたし、「ガンダム」という商品自体も明確に定着した。ガンプラだって数は増えた。なのに世界観がガッツリ作られてしまっていて、遊びが入る隙間がなかなか見つからない、まるで時間が止まったかのように過去数年と同じ手法を延々と繰り返していた。

そういった行き詰まり感にカウンターをぶつけてきたのが、87年に模型雑誌モデルグラフィックス（大日本絵画）が連載を開始したフォトストーリー「ガンダムセンチネル」だ。舞台としたのは「Z」の時代であるグリプス戦役末期。「センチュリー」以降に作られたリアル作品世界設定の数々。「HOW TO BUILD～」やMSV以降のリアルガンプラへの方法論、現実の科学や情報や知識。「センチネル」はこれらを見直し、肯定し、時には否定をし、新たな考え方を持ち込んで再構築した。

特筆であったのは、作品のみからリアリティを伝えるのではなく、読者コーナーやコラムなどといった`企画そのもの`の見せ方全てに「僕らのリアリティ」を内包していたことだ。作り手と受け手、肯定と否定それぞれが誌面やその外で本気でぶつかりあう空気。そして過度の情報と知識の巧みな反映と表現。それは大きな反響を呼んだ。

アニメ作品としての「ガンダム」シリーズしか知らない人にはピンと来ないかも知れないが、なにしろガンプラファンの中では、それから15年以上を経た今でも「センチネル」が見せた「リアルなガンダム」の方法論が扉を引いているし、批判的な人ですらその影響は否定できないでいる。もはやトラウマみたいなものだ。

やがて、ガンダム世界のリアリティを従来とは違う形で表現したOVA「ポケットの中の戦争（89年）の成功もあり、90年代に入りしばらくすると「ガンダム」はアニメもガンプラも再び勢いが出てきた。新作アニメも次々と作られるようになり、あえて「ガンダム＝リアリティ」という既存概念を壊すことに挑んだ作品も出た。

ガンプラでは新機軸のマスターグレード、HGUCシリーズがスタート。アニメに出てくるデザインをそのまま立体化するのではなく、メーカー側が「どうしたら18メートルのロボットにリアリティを与えられるか？」を基本コンセプトとして意識し始めた。

ここに至り、ガンダムが生み出すリアリティはすでに僕らも一緒に生み出す物ではなくなった。すでに製作側やメーカー側がパッケージ化して送り出す物となったのだ。

■

「ガンダム」を使って僕らが遊べる時間は終わったのだろうか？　そんなことを時々考えていたこの10年ほどだった。が、ある日突然「まだ終わらんよ！」と叫ぶ企画を見せられた。

それがこの「masterpiece」だ。

前述してきたような、過去に「リアルっぽいガンダム」を生み出していた幾多をパズルのピースであるとするのなら、本棚はそれらのピースを組み上げたものだった。

僕は面食らった。そりゃそうだ。これまでバラバラだったパズルのピース。でも、そのパズルを組み上げた状態は誰も見たことがなかったのだから。

26年間で数々のリアリティを生み出してきた幾多の`遊び`全ての延長線上にあるこの本は、昔からのファンだけではなく、そんな文脈は知らなかった今の人たちにもアプローチするものになっている。アニメシリーズとしての「ガンダム」しか知らない人、作品よりもガンプラを主としている人。そのどちらにもだ。

過去に生み出されてきた「ガンダムにリアリティを与える遊び」は、否応なくそれが生まれた時代性をも反映している。

「ガンダムセンチュリー」には、それまでマニアしかいなかったSFが「あたりまえのものとなっていった」日本のSF史が反映されている。

「HOW TO BUILD GUNOAM」や「MSV」には、当時の日本のプラモデル事情が反映されている。

「ガンダムセンチネル」には、「リアル」そのものが曖昧になっていた80年代文化が反映されている。

「MS ERA」が刊行された90年は湾岸戦争が起き、戦争におけるメディアと報道が問われ、そして幾像作品での表現が見直された時代だった。

フィクションであるはずの「ガンダム」にリアリティを与えていたそれらには、常にその時代背景が見え隠れしていた。

そしてもちろん、本書「masterpiece」だって時代性を反映している。

過去のパズルピースを組んだだけではないのだ。

「今、あのパズルを組むならこうなるんじゃない？」

それが時代性であり、それを反映しているからこそ新しい遊びになっている。

アプローチをされた人たちは、その時代性を考えてみてはどうだろう。

「Zガンダム」が宇宙を駆けていた時代。それをリアリティがあるように見せている情報の数々には、僕らが今いる時代そのものが隠されている。

雑野 雑（おかの・いさむ）　1967年東京生まれ。放送作家　教育雑誌や社会ドキュメントや雑誌といったマジメな雑誌や　深夜バラエティをメインでやっていたんですが、その後雑誌が減してオタク雑誌に多く関わったり！日本オタク大賞！などに関わったり、そこから生じた縁で　たまにオタク関連書籍や雑誌雑誌で文章を書いてます

BEAUTIFUL BLUE

Life
OF
OUR
SPACE
COLONY
SPACE TRANSPORT

Life
OF
OUR
SPACE
COLONY
AGRICULTURAL PLANT

Life
DRINKING WATER

Life
OF
OUR
SPACE
COLONY
VIEW MAINTENANCE

Life
OF
OUR
SPACE
COLONY
ELECTRIC SUPPLY

masterpiece
of HUGE ARMS

兵器はそれぞれの時代の産物であり、歴史が兵器を作ってきた。しかし稀に時代の常識を超える兵器が突然現れることがある。旧世紀の地球の戦争に用いられた弾道ミサイルや、ジオン独立戦争、いわゆる一年戦争に出現したモビルスーツがその例といえよう。それらの兵器は後の戦争のあり方だけでなく、世界そのものの様相すら変えてしまった。その意味では兵器が歴史を作ったのである。

そのモビルスーツの開発の歴史の中から、おそらく戦争と世界の歴史も変える可能性を秘めた機体が、かつて現れたことがあった。ゼータ・ガンダムである。

軍事評論家・岡部いさく

マスターピース
ゼータ・ガンダム

ガンタム世界から「巨大兵器の専門書」をテイクアウト！　この本の中では、架空の兵器であるモビルスーツが"実機"として存在しているのた。高度な造形技術を投入した模型特撮と丁寧に考察されたテキストによって傑作機セータ・カンタムか描かれる。

masterpiece of HUGE ARMS
U.C.0108 issue [JAPANESE]

studio RECKLESS
小松原博之／古賀 学

ヘッパーショップ

マスターピースを"テキスト"と"考察"と"造形"で描く

高橋昌也／岡部いさく／氷川竜介／藤津亮太
小倉信也／柳瀬敬之／二宮茂幸／川口克己
Syujyu　松村年信／柳生圭太／早川広志studio RECKLESS　ほか

132ページオールカラー！ 解説ブックレット（16ページ）封入！

ソフトバンク クリエイティブ

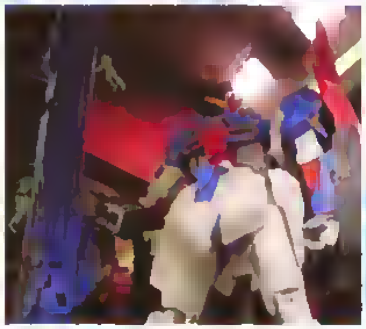
ISBN4-7973-3462-2

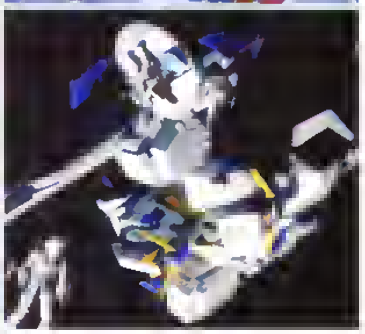
C0076 ¥2400E

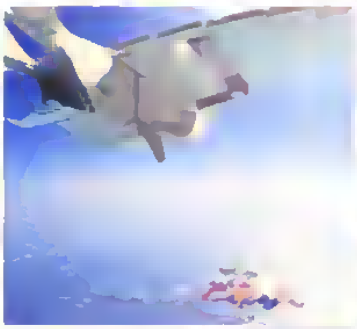
定価 本体2,400円 +税

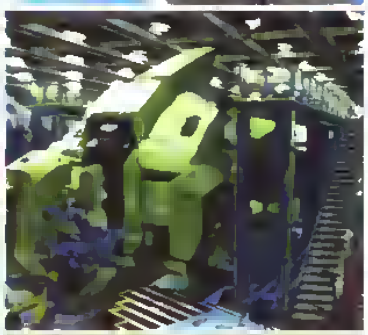
分売不可

集結した究極スタッフの"想い"が、20メートルの巨大兵器＝モビルスーツが実在している「機動戦士Zガンダム」の世界を緻密に再現する カンフラという神を遥かに超えたハイクオリティな模型特撮で描かれた宇宙世紀がここに！









マスターピース・ライナーノーツ

美術 様々な角度 [illegible]

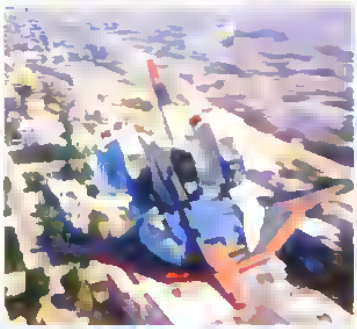
今井誠 b [illegible] 本

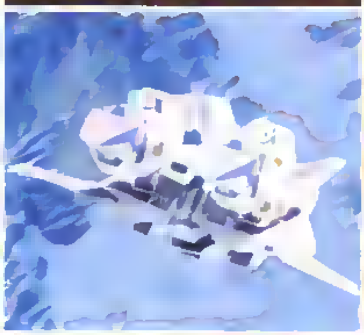
編集構成 [illegible] 年表

[illegible] 年録

楠見 清　井上幸一　斎藤貴義

岡野 勇　野田真外　フンボルト





masterpiece of HUGE ARMS
Anaheim Electronics MSZ-006 Zeta Gundam

マスターピース ゼータ・ガンダム

SoftBank Creative

masterpiece of HUGE ARMS

The language used is JAPANESE 日本語版

Published in REAH side 00 | Commentary on Military and Technology | 巨大兵器のマスターピース | JAPANESE

アナハイム・エレクトロニクス MSZ-006 ゼータ・ガンダム

Anaheim Electronics MSZ-006 Zeta Gundam

U.C.0106

brought to you by SOFT BANK CREATIVE

Unfurl wings like never before.
AirUNA. The touch that travels the space.
AIRUNA
GROUP
NEW HONGKONG
GLOBAL GATEWAY
Alt GIBRALTAL
GLOBAL GATEWAY
VON BRAUN
GLOBAL GATEWAY
PALDA
GLOBAL GATEWAY